熊本県文化財調査報告　第36集

おさき墓地古塔碑群

―中・近世墳墓の調査―

1979

熊本県教育委員会

序　　文

熊本県教育委員会では、九州縦貫自動車道建設に伴い、日本道路公団の委託により、昭和50年度から昭和54年度にかけて松橋～八代間の埋蔵文化財発掘調査を実施中であります。

本報告書は、昭和51年度に実施した「おさき墓地（八代郡宮原町）」に関するものであります。

県下各地には中、近世の無縁墓地が数多く存在しますが、近年次々と改葬されて消滅しております。本報告のおさき墓地も無縁墓地の一つで、調査によって江戸時代の墓制の一端を知ることができました。

本書が、埋蔵文化財に対する認識と理解、さらに学術、研究上の一助になれば幸いです。

発掘調査の実施にあたっては、日本道路公団の御理解と御協力をはじめとして、調査指導の先生、地元の方々からの御協力を賜りました。ここに心からお礼を申し上げます。

昭和54年3月31日

熊本県教育長　井　本　則　隆

例　　言

本稿は、熊本県教育委員会が昭和52年の５月から６月にかけて実施した九州自動車道（松橋～八代間）に関する埋蔵文化財の発掘調査の報告である。

本報告書には、八代郡宮原町大字栫所在のおさき墓地の調査を本論とし、県教育委員会が過去に実施した中山五輪塔、福富（西園祭祀）遺跡、その他３遺跡の調査結果を付論として納めた。

本書の『おさき墓地古塔碑群』の執筆は、主として桑原憲彰が行い、第１章の２の「栫集落と草場城跡から見たおさき墓地」の項については、大田幸博が分担した。また、付論として収載した各遺跡の調査結果については、各調査担当者が、これを行い、その報告文の末尾にそれぞれの文責名を記した。

遺物処理、および本書に使用した図の作成は熊本県文化財収蔵庫において行ったもので、桑原が補訂して掲載した。製図は鶴島俊彦、小川賀代子両氏の協力を受け、校正は佐藤誠子・西町圭子の両氏の手を煩わせた。

掲載写真は、白石巌によるものである。なお本書の編集、構成は、桑原憲彰が行った。

目　　次

序文・例言・調査の組織・調査の経過

おさき墓地古塔碑群

第1章　おさき墓地の位置と環境……4

1.　位置と環境……（執筆、桑原）……4

2.　栫集落と草場城跡から見たおさき墓地……（執筆、大田）……5

第2章　各墳墓の調査……（執筆、桑原）……13

1.　調査の概要……13

2.　石造物について……13

3.　墓坑・木棺……22

4.　墓坑内からの出土遺物……24

5.　墓穴掘りに関する習俗……25

まとめ……（執筆、桑原）……29

付　　論

1.　中山五輪塔遺跡……（執筆、桑原）……31

1.　位置と環境……31

2.　旧地形の復元……31

3.　遺構・遺物……33

4.　まとめ……34

2.　福富（西園祭祀）遺跡……（執筆、桑原）……41

1.　はじめに……41

2.　地形と環境……41

3.　出土遺構・遺物……41

4.　まとめ……42

3.　御船塚、中近世墓地遺跡……（執筆、上野・鈴木）……48

1.　御船塚墓地群……48

2.　御船塚出土板碑等について……53

4.　北牟田塚墳墓……（執筆、田添）……56

1.　位　置……56

2. 環　　境……56
3. 発掘調査に到る経過……59
4. 発掘調査の過程……59
5. あとがき……67
5. 鹿央町上広西屋敷近世墓地遺跡……（執筆、桑原・下村）……69
1. はじめに……69
2. 城丸組の先祖祭と地名……69
3. 西屋敷墓地の成立時期……70
4. 調査結果……71
5. ま と め……83

挿　図　目　次

第１図　おさき墓地の位置……4
第２図　おさき墓地立地地形図……4～5
第３図　栫集落の地名と石塔分布図……7
第４図　草場城遺構図……9
第５図　草場城遠景……10
第６図　おさき墓地地形図……14～15
第７図　寛永年号入りの地輪……14
第８図　鴟（ウハキュウ）銘を持つ有角五輪火輪部及び空風輪部……14
第９図　おさき墓地散乱石造遺物編年一覧表……14～15
第10図　正保銘の水輪……15
第11図　納骨用施設を持つ地輪……19
第12図　単十字と中心孔を持つ水輪……19
第13図　本郷左衛門の墓と伝えられる板碑残欠……20
第14図　記銘のある墓石拓影……20～21
第15図　吉田市左衛門の石塔と吉田氏の釈一円信士塔……22
第16図　1680年代の板碑状墓標……22
第17図　おさき墓地墓坑配置図……22～23
第18図　護念寺全景……24
第19図　おさき墓地出土遺物……28
第20図　中山五輪塔立地地形図……32～33
第21図　中山五輪墓坑平面図（Ａ区）…32～33
第22図　中山五輪散乱石造遺物（１）……35
第23図　中山五輪散乱石造遺物（２）……36
第24図　中山五輪遺跡グリッド設定図……37
第25図　遺跡層序図……38
第26図　遺跡試掘溝断面図……39
第27図　中山五輪遺跡出土遺物（土師質土器）……40
第28図　福富（西園祭祀）遺跡周辺地形図とグリッド設定状況……45
第29図　福富（西園祭祀）遺跡遺構平面図…46
第30図　福富（西園祭祀）遺跡出土遺物実測図……47
第31図　御船塚旧状遠景……48
第32図　御船塚中・近世墳墓平面図……49
第33図　御船塚板碑類拓影（二岡中学所在）……53
第34図　北牟田塚墳墓周辺遺跡分布図……56
第35図　北牟田塚墳墓位置図……58
第36図　玉名市北牟田地籍図……59
第37図　内部上層石郭実測図……60
第38図　石郭東側内部正面図……61
第39図　木棺実測図（棺蓋）……62
第40図　主体人骨実測図……64
第41図　北側断面実測図……66
第42図　近世墓周辺の状況……69
第43図　上広西屋敷墓所周辺地形図……74
第44図　上広西屋敷墓所部分地形図（その１・２）……75
第45図　上広西屋敷墓所出土遺物……82

表　目　次

表１　記録のある墓石一覧（おさき墓地中心）……16
表２　おさき墓地墓坑一覧表……26
表３　中山五輪遺跡墓坑一覧……32
表４　墓石の年代……50
表５　御船塚出土人骨一覧表……52
表６　早岐氏系図……55
表７　上広西屋敷墓所墓坑および埋葬状況一覧……76

図　版　目　次

図版１　おさき墓地古塔碑群
（上）おさき墓地発掘個所全景
（下）調査前の地元有志による墓前供養
図版２　おさき墓地古塔碑群
（上）墓地内に散在する五輪水輪部
（下）発掘個所の表土を約30cm程除去した状況

図版3　おさき墓地古塔碑群
（上）墓坑の排土作業風景
（下）確認された15の墓坑(北方より)
図版4　おさき墓地古塔碑群
（上）排土を終えた墓坑群（南東方向より）
（下）№3墓坑内に設けられた基礎部分の石組
図版5　おさき墓地古塔碑群
（上）〔左〕有角五輪塔の火輪・空風輪部〔右〕同・空風輪部
（下）〔左〕火輪部に刻まれた文字〔右〕同・火輪部
図版6　おさき墓地古塔碑群
（上）四方仏塔（宝塔）
（下）同上・塔身部拡大
図版7　おさき墓地古塔碑群
（上）〔左〕花翁宗園禅定門の五輪水輪部(拓影)、〔右〕同左五(写真)
（中）〔左〕直翁宗王居士の五輪地輪部(写真)、〔右〕同左五輪(拓影)
（下）〔左〕五輪水輪部上端に刻まれる単十字(拓影)、〔右〕有角五輪火輪部に刻まれる 鴒（写真）
図版8　おさき墓地古塔碑群
（上）火の見櫓周辺に散乱する五輪火輪部
（下）石垣内に組み込まれていた五輪地輪部
図版9　中山五輪遺跡
（上）中山五輪遺跡遠景
（下）散乱する五輪塔の各輪
図版10　中山五輪遺跡
（上）№8墓坑と№9墓坑（手前）全景
（下）各墓坑群　先方左より№1、№6墓坑、中央が№2墓坑、手前が№3墓坑
図版11　中山五輪遺跡
（上）遺物出土状況　土師質納骨器底部と弥生土器片
（下）土師質火葬納骨器底部拡大写真
図版12　中山五輪遺跡
（上）№1墓坑と、なかに納められた土師質土器
（下）同土師質皿拡大写真（二枚の土師質燈明皿の口をあわせ、なかに火葬骨片が納められていた）
図版13　中山五輪遺跡
（上）№6墓坑に紛れ込んでいた平瓦片（布目瓦）
（下）№11墓坑
図版14　中山五輪遺跡
（上）中山五輪調査風景
（下）調査終了後整理された散乱石造物群
図版15　福富（西園祭祀）遺跡
（上）福富（西園祭祀）遺跡遠景（南方より）
（下）福富（西園祭祀）遺跡発掘調査風景
図版16　御船塚遺跡
（上）御船塚墳丘群（東北より）
（下）同上墳丘群
図版17　御船塚遺跡
（上）御船塚墳丘部の試掘溝設定状況
（下）同　上
図版18　御船塚遺跡
（上）御船塚天正銘板碑
（下）六地蔵龕部塔残欠
図版19　北牟田塚遺跡
（上）北牟田の集落と北牟田塚の位置（矢印）右北塚・左南塚
（下）北塚全景（北方より）
図版20　北牟田塚遺跡
（上）北牟田塚より望む東方の景観、遠景は伊倉の台地、○印（上）北塚・手前は南塚
（下）北塚全容
図版21　北牟田塚遺跡
（上）露出された内部上層の石組と東方を望む景観
（下）同上石組拡大
図版22　北牟田塚遺跡
（上）内部上層の石組拡大　下の白い部分は下に敷かれた大石
（下）大石の引き揚げ作業　遠景は金峰山系、三の嶽（左）、二の嶽（右）

図版23　北牟田塚遺跡
（上）土坑内北側断面土層
（下）内部主体の木棺々蓋
図版24　北牟田塚遺跡
（上）木棺々蓋上半部、杉の皮と板の使用状態を示す　左端は頭骨横断面、上の横長いのは木棺々身左側板の一部
（下）同上主部拡大、この部分の下に主体人骨胴部がかくされている
図版25　北牟田塚遺跡
（上）露出清掃された主体人骨の全容
（下）同上上半身部拡大
図版26　北牟田塚遺跡
（上）主体人骨下半身部拡大　樫板の木目も鮮やか
（下）主体人骨　顎骨部拡大　左に縦に湾曲するは左鎖骨
図版27　北牟田塚遺跡
（上）主体人骨の左腕に付着するひも
（下）左腕に付着するひも拡大
図版28　上広西屋敷近世墓
（上）C区墓所　墓坑配列状況全10基
（下）B区墓所　B—2の墓坑と人骨の埋葬状況
図版29　上広西屋敷近世墓
（上）I区墓所　旧農道に沿って帯状に並ぶ墓坑
（下）I区墓所　I—6墓坑　墓坑線と棺の圧痕
図版30　上広西屋敷近世墓
（上）I区墓所　I—1・I—2墓坑
（下）I区墓所、I—11墓坑と棺圧痕
図版31　上広西屋敷近世墓
（上）I区墓所　I—11墓坑と棺内に納められた右側臥屈葬人骨
（下）I区墓所　I—11墓坑・同上部分拡大

おさき墓地古塔碑群

執筆担当者

「おさき墓地古塔碑群」　県文化課技師　桑原憲彰
県文化課技師　大田幸博

調査の組織

調査の組織（おさき墓地古塔碑群）

調査責任者	文化課長	岩崎辰喜
	前文化課長	合志太助
	〃	境　信三郎
	文化課長補佐	真弓袈裟勝
	前課長補佐	田中　繁
	前課長補佐	前田利郎
	前課長補佐	河野宗忠
調査総括	文化課文化財調査係長	隈　昭志
調査事務担当者	文化課管理係長	望野正雄
	前管理係長	松本　巽
	文化課主事	石原昭宏
調査指導助言者	文化財保護審議会委員	原口長之
調査担当者	文化課技師	桑原憲彰
調査協力者	鹿本高校考古学部ＯＢ	前川英利
	宮原町栫区区長	島崎貞雄
	宮原町栫区役員	田中夘一郎
	宮原町栫区役員	竹本一郎
	宮原町栫区役員	中居直人

調査の経過

ここに掲げたものは、昭和51年5月10日から同6月30日まで実施した「おさき墓地」の発掘調査の経過を調査日誌より抄録したものである。なお、季節柄梅雨に祟られた日も多く実施調査日数は、約30日位であった。

昭和51年5月10日（月）　晴　日本道路公団松橋工事事務所で、工事長・土持氏と会い、今後の調査の打合を行う。午後は調査予定地におもむき調査区域の確認をし、同区域内に散乱する墓石の記銘の記録を行った。

5月12日（水）　小雨　午後、公団の土持氏と栫地区の区長である島崎貞雄氏宅を訪ね、協力を依頼し、作業員確保と、調査区の樹木伐採をお願いした。また当所旧地主の山本正俊氏を訪ね発掘についての了承を得た。後、反対側の天神墓地の踏査と範囲確認を行った。

5月14日（金）　晴　調査現場の蜜柑畑の樹木伐採を開始、ほぼ一日で終了した。

5月24日（月）　曇後雨　昨日の切残しの雑木伐採と落とした枝の運搬整理を行った。午後は雨のため作業を中止した。

5月25日（火）　曇り　遺跡周辺の地形測量を200分の一の縮尺で開始した。本日中に墓地のA・B・C地区の中央部分について測量を開始した。

5月26日（水）　曇り　前日に引続いて墓地の東側から西側一帯にかけての地形測量を続けた。また周辺遺跡の聞き取り調査を行った。

5月27日（木）　曇り　墓所西側道路一帯の地形測量を行う。4時から文化課へ事務連絡のため出向した。

5月28日（金）　晴　西側竹林一帯の地形測量を行う。竹林のなかから倒れていた享保・元文等の年号のある三基の墓石を発見した。

5月31日（月）　晴れたり曇ったり　東側林道および蜜柑畑一帯の地形測量を行う。今日で一応の地形測量は終了した。また午後は田中夘一郎氏（63才）より、周辺の遺跡に関する聞き取り調査を行った。

6月1日（火）　曇り　東部一帯の補充測量および、周辺遺跡の踏査を行った。本日の作業は、城が平と呼ばれる中世城跡のプランの踏査と縄張図作成が主体となった。

6月3日（木）　晴後曇り　本日から発掘調査に着手するため、10時から護念寺住職の読経による墓前供養が地元有志の手で行われた。恐らく250年前にも被葬者は同じく護念寺住職の穴経によって埋葬されたであろうことを思い、立合い者一同感慨無量であった。供養終了後、搬入路をつくり、ブルドーザーを遺跡内に搬入、排土作業を行った。思ったより軟弱土でブルドーザーのキャタピラがのめり込み、作業は困難を極めた。

6月4日（金）　曇り　A地点の墓石散乱個所の排土作業を開始した。約30cm程の表土をは

ぎ墓坑確認に努めた。本日中に四つの墓坑を確認し内2か所の排土を行った。

6月7日（月）　曇り　昨日に引続き№10、№11、№12の墓坑内より鉄釘数本が出土、また№12の墓坑上面には五輪の水輪部が残っていた。各墓坑の発掘と併行して20分の1縮尺のプランの実測を開始した。

6月8日（火）　晴　今日も墓坑の確認とその排土を進め、午前中に一基の墓坑の存在が確認された。なお、№10、№12墓坑出土の鉄釘については、実測を済せて取り上げた。午後は栫地区における葬送儀礼の聞き取り調査を行った。

6月9日（水）　雨　豪雨のため発掘を中止し図面の整理を行った。

6月10日（木）　曇り時々小雨　図面ができないと後の作業が進まないため、小雨をついてプランの実測と断面図づくりを進めた。また写真撮影も行った。

6月11日（金）　晴　墓坑の排土作業と墓坑実測を進めた。また調査済みの各墓坑に昨日の降雨による相当量の土砂の流入と溜水が見られたので、それの排除と清掃を行い、後写真撮影を行った。

6月14日（月）　晴　本日より前川英利氏と墓地周辺に散乱する、五輪・墓石の実測を10分の1縮尺で開始した。外、昨日設定した西側トレンチの写真撮影を済せた。

6月15日（火）　晴　五輪・墓石の実測を続行した。

6月16日（水）　晴　五輪・墓石等の石造物の写真撮影を白石巌が行った。また、今日、見落していた墓石一基が確認された。№15と命名し発掘を行ったが、鉄片がひとつ出土したのみで他に遺物は見られなかった。

6月17日（木）　晴後曇り　五輪塔の火輪部の実測と同五輪の銘文入りの部分の拓本採り等を行った。

6月21日（月）　曇り一時雨　原口長之氏（県文化財保護審議会委員）の来訪を仰ぎ、その指導助言を得た。また、周囲の関連遺跡の踏査を実施した。

6月22日（火）　曇り　五輪の火輪部の実測と拓本採りを行った。拓本採りは風が強く手間取った。

6月23日（水）　曇り後雨　現場で今後の調査について課長と打合を行った。

6月24日（木）　曇り　地輪・水輪部の実測と墓石の銘文の拓本採りを行った。

6月25日（金）　雨　雨天のため天幕を設定しそのなかで五輪各部の実測と墓石の拓本採りを実施した。

6月28日（月）　晴　五輪の各部および墓石の実測とその拓本取りを続けた。

6月29日（火）　晴　石造物関係の補充実測とカラースライドの撮影の終了後、石造物の取片づけと整理をした。

6月30日（水）　晴　調査終了、関連遺跡の写真撮影を行った後区長宅へ挨拶へ行き、本日で調査を終了した。　（桑　原　憲　彰）

第1章　おさき墓地の位置と環境

1.　位置と環境

1.　位　　置

第1図　　おさき墓地の位置

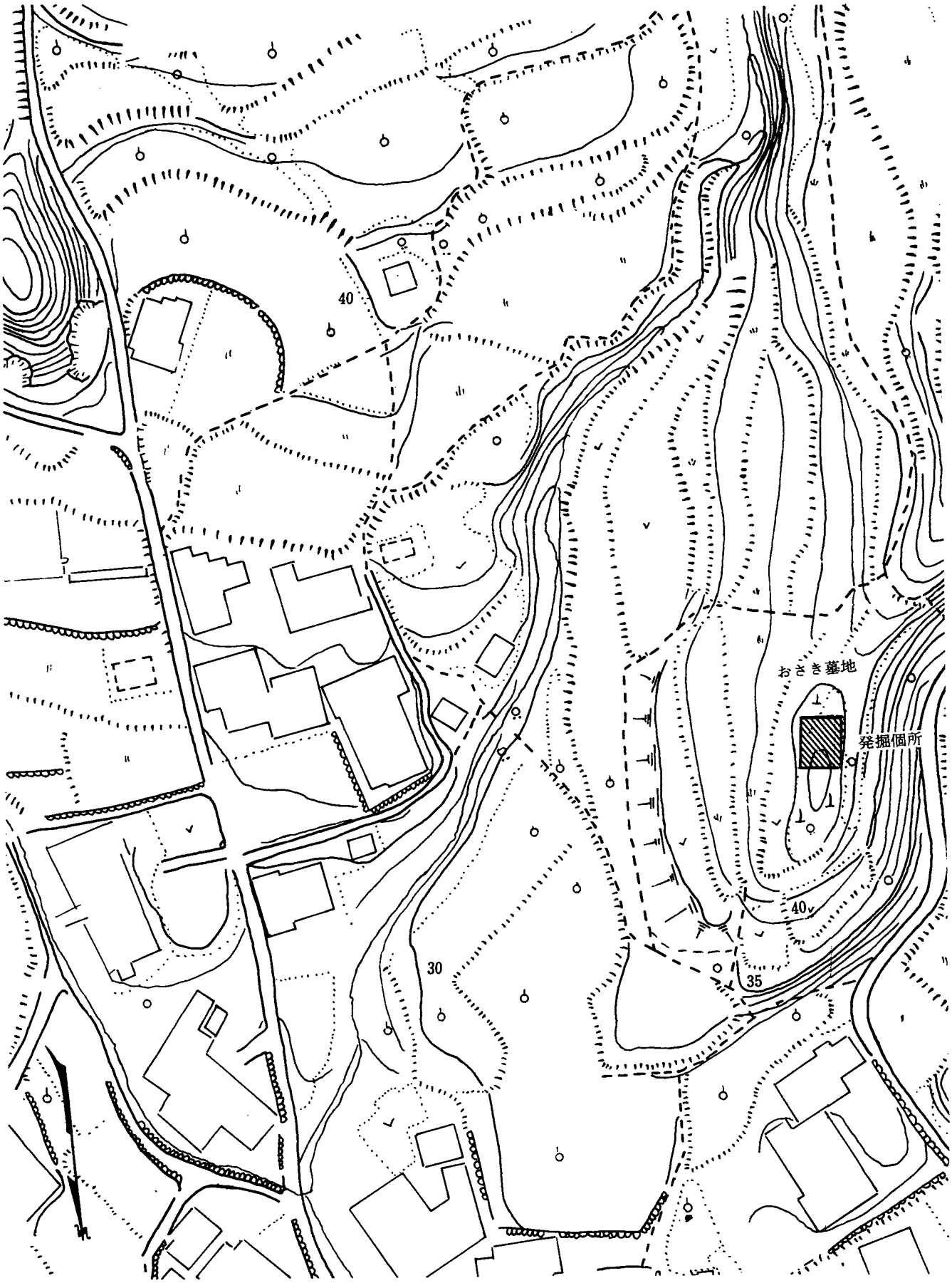
おさき墓地は熊本県八代郡宮原町大字栫に所在する。国土地理院発行の5万分の1八代図幅によれば、南縁から8.2㎝、東縁から13㎝の地点である。

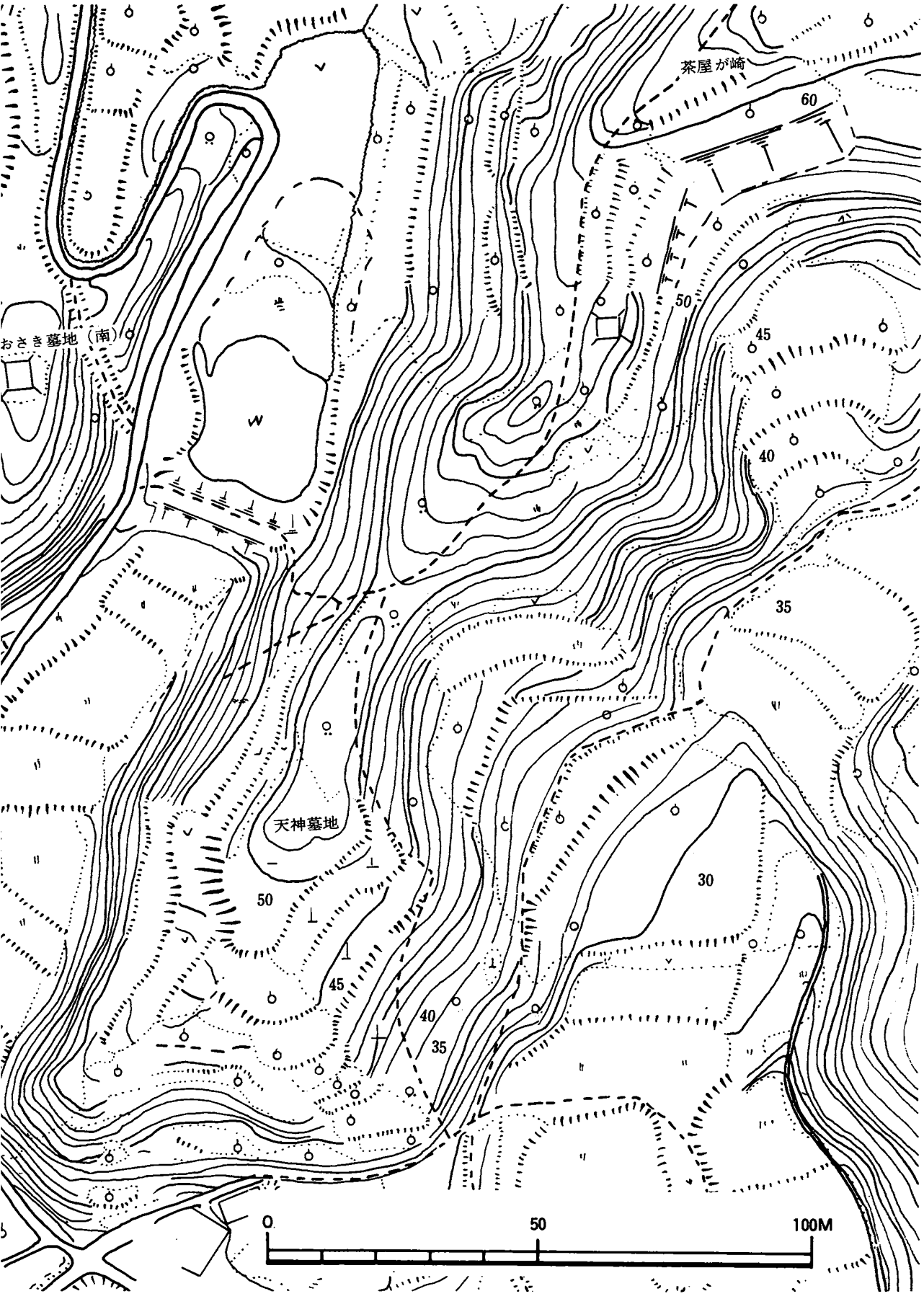
この地点は、海抜517ｍの竜峰山の北にのびる山裾部にあたり、標高44ｍの舌状をなす丘陵の頂上部をわずかに削平して形成されたのが、当おさき墓地である。松橋町から八代市までの八代海に面して続く山地と平野部の変換点には諸集落が帯状に形成されているが、そのなかのひとつが栫集落である。

おさき墓地はどこの地区にも見られる地区有の小規模な近世墓地であった。しかし近世でも初期の墓地であったため相当古い時期から無縁墓地となり永らく雑木林となっていた。そして、僅かに周辺に散乱する墓石類が、かって墓所であったことを物語るのみとなっていたが、近年当所が蜜柑畑として開墾され墓石類は地主によって一カ所に纏められ供養されていた。

このように、江戸時代にすでに無縁墓所となり、加えて近年の開墾の際にも破壊を受けていはいるが、墓石に刻まれる年号が比較的古いため各墓石の調査と、道路敷となる部分について

第２図　おさき墓地立地地形図




茶屋が崎
60
50
45
40
35
30
おさき墓地（南）
天神墓地
50
45
40
35
0
50
100M

は発掘調査を実施することにした。

2. 環　　境

おさき墓地という名称は、あたかも個人名が墓地名に冠せられた観があるが、地元の話では、この丘陵の東側の迫地名が大迫というため、大迫墓地がおさき墓地に転化したものという。このおさき墓地の西隣には、迫地を挟んで、天神墓地という同様の舌状をなす丘陵があり、頂上部が墓地として利用されている。

おさき墓地は、ほぼ南北にのびる丘陵の頂上部に位置する。墓石の散乱する範囲は丘陵の南北の主軸に沿って約140 m の間である。またこの丘陵の東西の幅は約70 m ほどであるが、ある時期に畑地として開墾されたらしく削平され、細長い段々畑状を呈している。現在、この地形は殆んど蜜柑畑として利用されている。

今回の発掘調査の対象となったのは、丘陵頂上部北側の一角180 m^2 中、道路敷地となる約90 m^2 の場所である。

2. 栫集落と草場城跡から見たおさき墓地

おさき墓地は草場(くさば)城跡に比定される山の末端尾根にある。墓地には近世墓碑に混じって室町期と推定される数基の五輪塔が残存している。墓地は城跡の北西側麓に開けた栫集落のものである。

栫集落はその「かこい」という地名からして城跡との繋がりをうかがわせる。熊本県が昭和50年から52年にかけて実施した「中世城跡緊急調査(悉皆調査)」の結果、やはり城跡の麓集落に「かこい」の地名を残す事例が幾つかあった（同事例については後述したい）。事実、栫には城跡に関連深い伝承や地名が残っている。概して中世城跡の麓には近世の城下町に該当するような中世集落があり、墓地には城主及びその一族の墓と伝えられる五輪塔や板碑などの石塔類を残す事が数多い。言うまでもなく城跡と集落と墓地は一つのセットをなす事が多い。伝承などを媒介として三者間に関連性が生じる。この意味からもおさき墓地を草場城跡と栫集落から展望する事は心要であろう。

1. おさき墓地について

現在、墓地には数基の五輪塔と、空風輪・火輪部などの残欠部がある。しかし、江嶋渡氏（元宮原町公民館長）の昭和32年の調査では、墓地内における五輪塔の数は計23基であった。「昭和初期頃には、まだそれ以上の五輪塔が存在していた」という地元の古老（田中外一郎氏、63才・農業）の言もある。栫に散在する五輪塔や、石垣のぐり石に使用されている残欠部は、

その大部分が「おさき墓地」から運ばれたといわれている。

「おさき」という呼称については諸説がある。地元民の中にはおさこ墓地と呼ぶ人もいる。墓地は城跡所在の山から二又(ふたまた)に分かれて下ってくる尾根の片方、先端部にある所から、城跡に関連して「城の御崎(おんさき)」とする説、もしくは純粋に地形的なものから「尾(お)の崎(さき)」と見なすという具合である。おさこにいたっては、山の麓という意味での「迫(さこ)」の転訛ともいう。

栫の小柳におさき墓地の礼拝所と伝えられる所がある。「ろくんどさん」と呼ばれる溜池の西岸中央部である。高さ1m、幅0.6～0.7m程の板碑状の石が建っている。石は多分に石棺のふた石を転用したものである。ここから農民が墓地を拝んでいたという。真偽の程は定かでない。ちょうどこの溜池は小柳と小越(こごえ)の字(あざ)境いにあたる所から境いを示す石であろう。しかし墓地のあり方を示す興味深い伝承である。

2. 栫 集 落

大字栫(註1)は、山と麓集落と「藺(い)草」を生産する平野部から構成されている。しかし平野部は小柳の一区画を除いて大部分が近世の干拓によるものと伝えられる。

この際、注目すべき麓集落は山裾のゆるやかな傾斜面に開けている。その頂点部に城跡が存在しているので、末端にある「おさき墓地」が結果的には集落に最も隣接した直上の山となる。

墓地山より若干下った所に「御座(おざ)」の屋号を持つ家がある。田中外一郎宅で、同家には、「先祖は名和氏の家臣であって相良氏が進出してくるまでは、草場城を把握していた」という伝承がある。栫では例外的に同家と隣家の宮本家のみが、宇土の西念寺の門徒(註2)である。ちなみに西念寺は名和氏の菩提寺と伝えられる。両家は草場城跡の山の所有者でもある。さらに両家の墓地は「おさき墓地」内にあった。一連的な繋がりがうかがわれる。

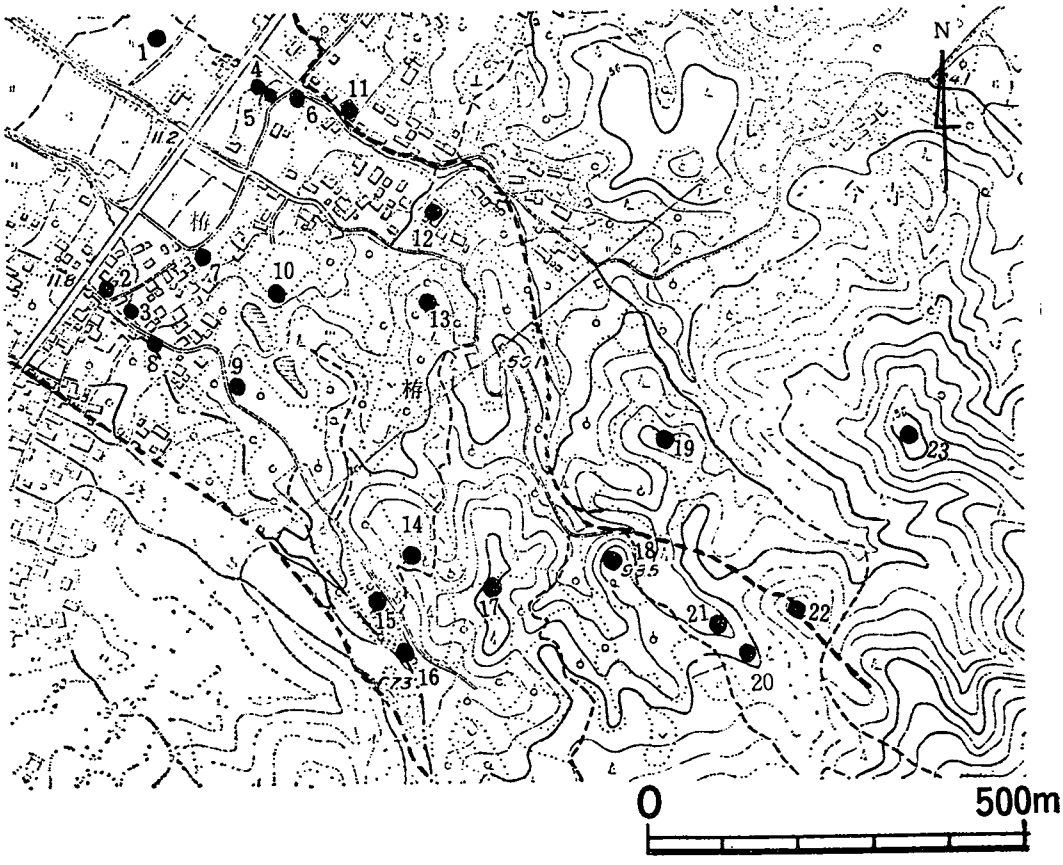
集落から城跡に至る登城道は計4本ある。内、最も南寄りにあって今もよく使用されている道の一部に「きど」という呼称があった。久保田家の前の道がそうであった。近年、同家は新築され、道は付け変えられたが今でも新しい道を「しんきど」という様に呼んでいる。

「きど」から先の道は上り坂となる。この坂を登り切った所に、広い畑地がある。かっては、ここに数軒の家があった。「栫屋敷」という呼称が畑地に残っている。北側対岸におさき墓地がある。「栫屋敷」の背後には城跡より下る南側尾根が迫っている。

「栫屋敷」の西方崖下に、「大明神」と称される楠の大木がある。古墳（大明神古墳）の封土に根をおろし山の神として祀られる。栫住民の信仰が厚く、正月、5月、9月の各15日に祭りが行われる。山の神は宮原町と八代市の行政区域の境をなす所でもある。

古老の言によれば、少なくとも昭和の初期頃までは、山の神周辺が五輪塔を含む古墓所であったという。数の上では「おさき墓地」に及ばなかったらしいが、まとまった数の五輪塔であ

第3図　　栫集落の地名と石塔分布図



1. 小柳　2. 馬頭観音　3. 明六川　4. 伝・礼拝所　5. ろくんどさん　6. 六地蔵
7. きど　8. 大明神　9. かど　10. 栫屋敷　11. 板碑　12. 御座　13. おさき墓地
14. 茶屋が崎　15. 清水郷　16. おちょうず　17. 草場城跡　18. 丸山　19. 狐塚
20. はけや　21. すけん谷　22. 権現さん　23. 草場山

ったという。付近を城跡南側の谷より下る「明六川（めいろく）」が流れている事もあって、流失したり散在したりして現在は一基も現存していない。「栫屋敷」に関連する墓所であろうか。

「大明神」近くの桑原に、馬頭観音が祀られている。その位置については近年桑原家新築の際、若干南側へ移動した。以前は榎の大木（現存）の根元に祀られていた。観音の由来は『肥後国誌』の種山手永に記述されている。しかし地元では、より詳しく伝えられているので触れておきたい。

「薩摩へ向う秀吉の愛馬が栫で病気になった。秀吉は悲しみ、再起不能ならばせめて一度、馬を立ち上がらせてから死なせたいと願った。そこで村の獣医が誠心誠意治療にあたった所、馬はそのかいあって一度は秀吉の前で立ち上がったという。秀吉は獣医に感謝し、立石の姓を与えた」と伝えられる。秀吉の愛馬を祀ったのが馬頭観音である。旧薩摩街道沿いに祀られて

いた。

集落の西縁を走る旧薩摩街道沿いには、この馬頭観音の外に、「ろくんどさん」の溜池付近に六地蔵がある。室町期のものと推定される。

六地蔵及び溜池の西側一帯の藺草地帯が、小柳の地である。地元ではこの地を、栫における最初の干拓地と伝えている。現在も干拓のための堤防が部分的に残っている。名和氏から栫一帯の知行を命じられた草場城主が干拓工事にあたったという伝承がある。

3. 「かこい」という地名について

県内に所在する500近い中世城跡の中で、麓集落に「かこい」という地名を残す事例が、栫を含めて七例ある。もちろん事例としては全体の1％強で少なすぎるきらいはあるが、調査もれも考えられるので一応共通事例として触れてみたい。

・**石櫃城**（阿蘇郡小国町北里・城）

城跡南側麓の集落に囲という字名が残っている。地形的には、北側背後が城跡地の山で、南側前面に北里川の流れがある。地元ではいかにも城跡地らしい地名を伝えている。

・**御船城**（上益城郡御船町下囲）

城跡所在地を下囲（しもがこい）と称し、西側麓に上囲（かみがこい）という地名が残っている。城跡の南側にひろがる水田地帯には外堀がめぐっていたという伝承がある。この外堀が集落まで延長されていた可能性はある。集落が堀で囲まれていた所から「上囲」の地名がついたのではなかろうか。

・**曲野城**（下益城郡松橋町曲野・橋川）

城跡の西側一帯の集落を囲（かこい）と称する。集落の周辺は湿地帯に囲まれており、南側対岸の集落に至るには幅3m、長さ50mの土橋状の道路一本に限られる。囲（かこい）という呼称は、この地形からきたものであろう。

・**赤蜂尾城**（下益城郡中央町中郡・城山）

城跡北東麓の集落に栫（かこい）という地名が残っている。集落は三方を山裾に囲まれており、開口部は北側部分のみである。

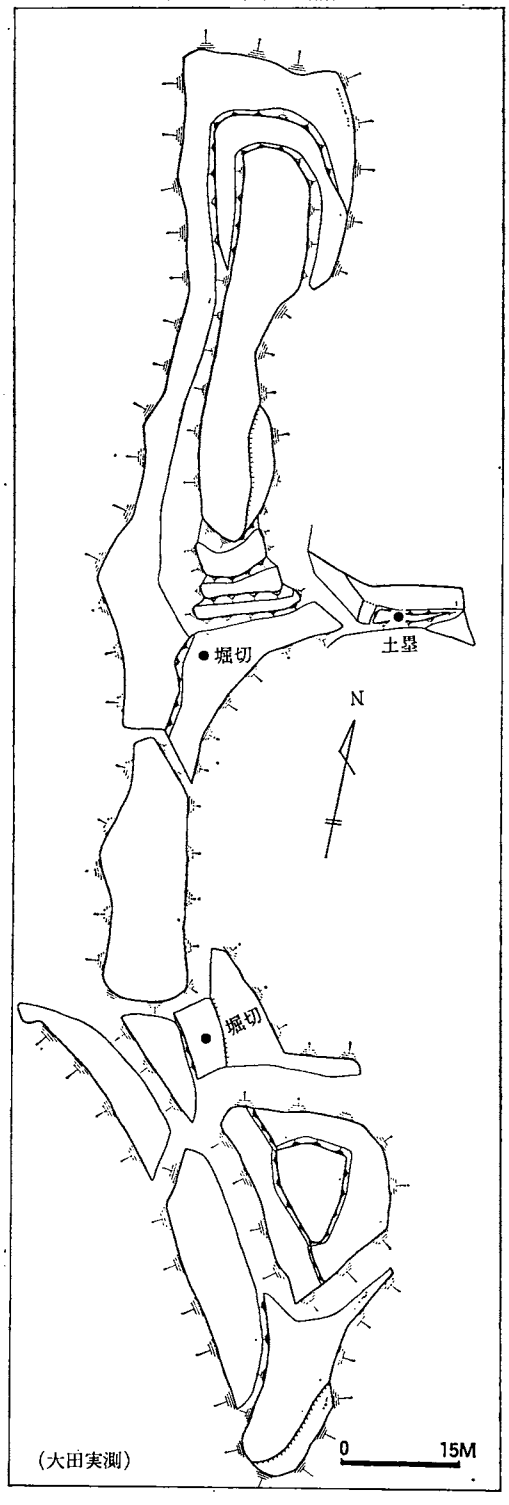
・**囲城**（上益城郡矢部町菅・野添）

囲の集落全体が一つの城を構成している。周辺は、緑川の上流と矢部町の山稜地帯によって南北を挾まれ、南側には溪谷を流れる内大臣川と緑川の合流点があり、立地的には袋小路の形状をなしている。囲（かこい）という呼称の由来は曲野城と同様であろう。

・**湯前城**（球磨郡湯前町下城・野首）

南側麓の集落は「加古井」と称される。城跡の東側鞍部を断切る堀切が、竪堀となりそのまま延長されて集落をめぐる事から、「加古井」という呼称が生じたのであろう。

第4図　草葉城遺構図



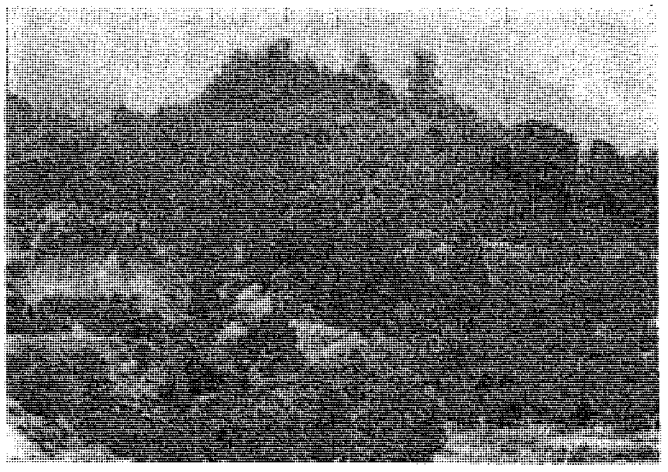
以上の六例を眺めてみると、御船城と湯前城の場合は集落が堀で囲まれているという伝承・推論、もしくはその現状に呼称の由来がある事がわかる。他方、石櫃城・曲野城・赤蜂尾城・囲城については自然地形そのものが、「かこい」である。城跡の分布調査が進展するにしたがい、城が集落を抱え込む、いわゆる「総構え的な城跡」の存在事例が多くなってきている。この意味からも、「かこい」という地名は城跡に関連ある地名といえよう。草場城の栫集落においては、多分に自然地形によるものと思われる。草場城所在の山を頂点に北西側に下る山裾の緩斜面に集落が形成されている。扇状地的な地形をなしており、集落は北側を迫に、南側を岡小路続きの丘陵地帯に挟まれる格好になっている。西側の藺草地帯は多分に中世期には近くまで海が迫っていたはずである。

地元では、「かこい」の由来を城跡とは無関係に、干拓における堤防築造によるとする向きがある。堤防に囲まれた集落という意である。しかし、この伝承は、種々の事柄から参考意見に止めたい。

4.　草場城跡について

『古城考』には「早尾村ニアリ、天正ノ比、伊賀野次郎、同三郎島津勢ニ攻ラレ落城ト云、古墳アリ」と

第5図　　草場城遠景（西方より望む）



記述されている。

栫集落の南東側に城跡に比定される山(第5図)がある。字、「内山」続きの山稜末端部で、山全体に「城の平（じょうひら）」という小名が残っている。集落の西側を走行する国道3号の道路面との比高差は90m弱で、頂上付近は台形状の地形をなす。山は西側に鞍部がある。鞍部は極端にくびれて低くなっており、頂上との比高差は10mを越える。山の頂上は南北に主軸を持ち、長さは180m近くもある。最高所は南端部にあり、堀切で仕切られた小山状の独立区画(第4図)がある。上面は三角形に近い平坦地があり、周辺裾部には若干の削り落しがある。しかしその削り落しは顕著ではなく、せいぜい数十センチ止まりにすぎない。同心円的な曲輪状の地形は、いずれもゆるやかに傾斜しており、上面周囲はむしろ自然地形に近い。ただ、東側と南側部分の段落ちには、整形された階段状地形が存在する。古老の中には、周辺一帯を「天守（てんしゅ）」と呼ぶ人がいる。上面の平坦地の規模は(南北)12.5m×（東西）9mである。階段状地形は東側で（南北）38.5m×（東西）8mを測る（南側は不整形である）。

堀切は、（南北）8.8m×（東西）5mで、東側に二段、西側に一段の階段状地形が付随する。

堀切の北側に隣接して、長方形状の平坦地がある。（南北）3.3m×（東西）11mを測るが、この区画は、蜜柑畑に開墾された時に多分に上面が平にならされている。

北側に進むと第2の堀切がある。堀切は延長された城跡の北端部区画をめぐっている事は確実であるが、現在、この堀は完全に埋没し、階段状地形となって城跡北端部区画の東側裾部を走っている。

第2堀切の西側裾部にも堀の埋没が考えられる階段状地形があるが、その西端には土塁（長さ10m、高さ1.5m）の残存部を確認できる。以前は、この土塁の上面に松の大木が等間隔に根をおろしていたという。

第2堀切の北壁は三段からなる階段状地形（段差はいずれも約1.5m）があり、これを登り切ると城跡の北端部の区画に出る。上面は極めて整形されており、長さは47mを測る。幅は広い所で9m、狭い所で5mである。ほぼ中央部にくびれがある。区画の北端寄りに弧状型の階段状地形がある。

南北に長い山の東西両斜面はいずれも急勾配をなしているが、とくに東側においてより一層顕著である。

城跡からは南西方向に関城跡（八代市興善寺町）を、真西に岡城跡を望む事が出来る。

草場城跡の山から前述のように栫に向って二つの尾根が下っていく。一本は北北東方向に、他方は北東方向に主軸をとる。北北東方向の尾根の先端に、先に取り上げた「おさき墓地」がある。後者の尾根には「茶屋が崎」という呼称が残っている。そしてこの尾根に『古城考』にも記述された古墳がある。現在、古墳の周辺には稲荷（お菊大明神）が祀られている。

城跡周辺の山や谷にはいろいろな地名が残っている。「茶屋が崎」の尾根の南側迫には、上場から下場にかけて「おちょうす」「清水郷」という地名がある。この迫には二つの地名からもわかるように谷川が流れている。頂上よりこの迫まで徒歩で5～6分の近距離である。城跡には井戸跡と呼ばれる所が存在しない所から、この迫が城の水の手であったと思われる。いわゆる水汲道は、前出の久保田家の「きど」から通じる登城道でもある。

周辺の山には、「丸山」・「権現さん」・「狐塚」・「草場山」と称される所がある。「丸山」と「権現さん」の間の迫を「すけん谷」という。「すけん谷」は城跡の南側にあたり、かなり奥まった所である。この谷間に水田跡がある。古老の言によれば、総面積約2町にも及ぶという。荒尾市府本の梅尾城跡、東側に「助作（すけさく）」と呼ばれる水田がある。「すけん谷」と「助作」の間には何らかの繋がりがあるのではなかろうか。その昔、「すけん谷」は栫の生産基盤の一つであった事は確かであろう。

草場城跡は、隣り合わせの関城跡よりもその規模において、はるかに大きく、麓集落の栫ともかなりの関連性を残している本格的な山城である。一方、城跡の真西に存在する岡城跡との繋がりも無視し得ない。岡城跡は、桑原と岡小路の微高地に築かれた、いわば平城的なものである。山城と平城が極めて近距離（地図上の直線距離で1㎞足らず）に共存する例は、下益城郡松橋町における豊福城（平城）と竹崎城（山城）の関係と同じである。

旧薩摩街道沿いに並ぶ宇土―八代間の城跡群の中では、これまでの調査結果からして松橋町の豊福城跡、竜北町の高塚城跡（吉本城跡）、宮原町の草場城跡が本格的な造りを持つ中世城跡といえよう。

ま　と　め

栫集落は、中世期において草場城を核として存在していた事は確かであろう。栫は片隅に中世的色彩を残す集落である。このような中にあって、「おさき墓地」は集落に最も隣接した直上の山に築かれたのである。集落が城跡所在の山を基点に扇状に広がる地形であり、そのかなめともいえる所に、墓地が築かれた点に興味を覚える。「おさき墓地」を単なる古墓所として見なし終えたくない因はここにある。　（大田　幸博）

註1　栫地区の字

栫村は江戸時代、山口・天神・川久保・小越・桑原・中園の各小村から成り立っていたが、昭和初期頃は天神（20戸）・中園（5戸）・上村（10戸）・下村（10戸）・桑原（5戸）の計50戸位いであった。各々の小村は下記の神仏をお祭りする。天神は天神社、中園は阿弥陀堂、上・下村は山の神大明神（楠の大木が御神体）を、桑原は弥勒菩薩の堂さんを持つ。桑原の場合、10数年前、堂さん横のアカノ木の根元より3～4寸の金銅仏が出土したので、この仏像を本尊とし安置している。

なお、地籍図上の小名は、東から内山・山下・右側に小越・国道3号線を挟んで西側は小柳・その右に堂原・塘下となっている。当おさき墓地は、江戸時代では栫村のうちの天神村内にあり小名では内山に属している。

註2　栫地区の旦那寺は、すべて浄土真宗寺院で、栫にある護念寺をはじめ、同小路の光誓寺、同法輪寺や宇土市の西念寺などとなっている。

この外、岡小路の上薬師堂の上に教正寺という寺院が存在したと伝え、現地に教正寺の小名が残っている。後、上益城郡益城町砥川に移転したというが、詳細は不明である。教正寺は栫地区の真宗寺院設立以前からある寺院で禅宗系だったのではなかろうか。

第2章　各墳墓の調査

1.　調査の概要

約180平方米の墓域の内、路線にかかる部分約90平方米の表土を剝ぎ精査を行った結果、15基の墓坑が確認された。墓所としての面積は、発掘面積の約2倍あるので推定約30基前後の墓が存在したものと思われる。

墓域内に存在した墓石類は、一か所に集められ供養されていたため、殆んど年号が刻まれていたにもかかわらず、墓石と墓坑のセットが把握できるものは一基もなかった。また、埋葬当初は地上に、土盛等、墓としての体裁を保つ遺構が存在していたと思われるが、畑地開墾時に失われていて、調査時には痕跡すら認められなかった。

発掘によって確認された15の墓坑についての概略は、表2および第17図に示すとおりである。

墓坑は、一辺が1m前後の方形をなすものを主とし、他は円形である。これは、遺体を納める棺の形状に左右されたものであろう。墓坑の深さもほぼ1m前後のものが多いが、極端に浅いのも見られる。深さについての数値は現時点のものであり、当時の表土面、盛土の有無等、勘案すれば更に異ったものとなろう。墓坑の深浅は、大人用、小児用の差によっても左右される。墓坑内からの出土遺物は、埋葬時に紛れ込んだと思われる陶磁器破片二片と鉄釘位いのもので、他には見られなかった。鉄釘は方形をなす墓坑の角の部分から多く出土しており、円形をなす墓坑からの出土は見られなかった。この事実から方形墓坑に納められた棺は、木製の箱型をした座棺であり、円形墓坑のそれは釘を使わない桶状の、つまり桶棺であったことが推定される。棺材は腐蝕が激しくNo.10の墓坑で僅かに、その木片が確認されたに過ぎなかった。

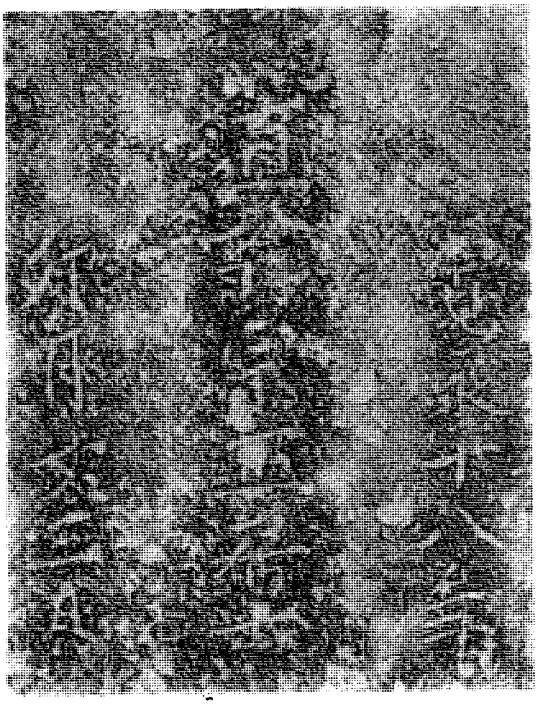
内部に納められた遺体もNo.4に大臼歯1つとNo.13内に人骨の細片2片が確認されただけで完全に土に還っていた。これら15基の墓坑はすべて、土葬墓であり、火葬墓と思われる遺構の存在は納骨用のくりこみを持つ五輪の地輪部を除いて確認できなかった。

2.　石造物について

おさき墓地に散在する五輪の各部には年号の記銘のあるのが二例しかなく、かつ各部分がばらばらに散在し一セットとして把握できないため、的確な造立年代は把握できないが、一番古

いものはその形式等(註1)から戦国末頃の五輪であろうことが推定される。

第7図　寛永午号入りの地輪



いかなる理由によるものか不明であるが、散在する五輪は水輪部と火輪部のみで、地輪と空風輪部が見られないのは不思議(註2)である。26個の火輪に対して、空風輪および地輪は各々2個しか見当らないのである。

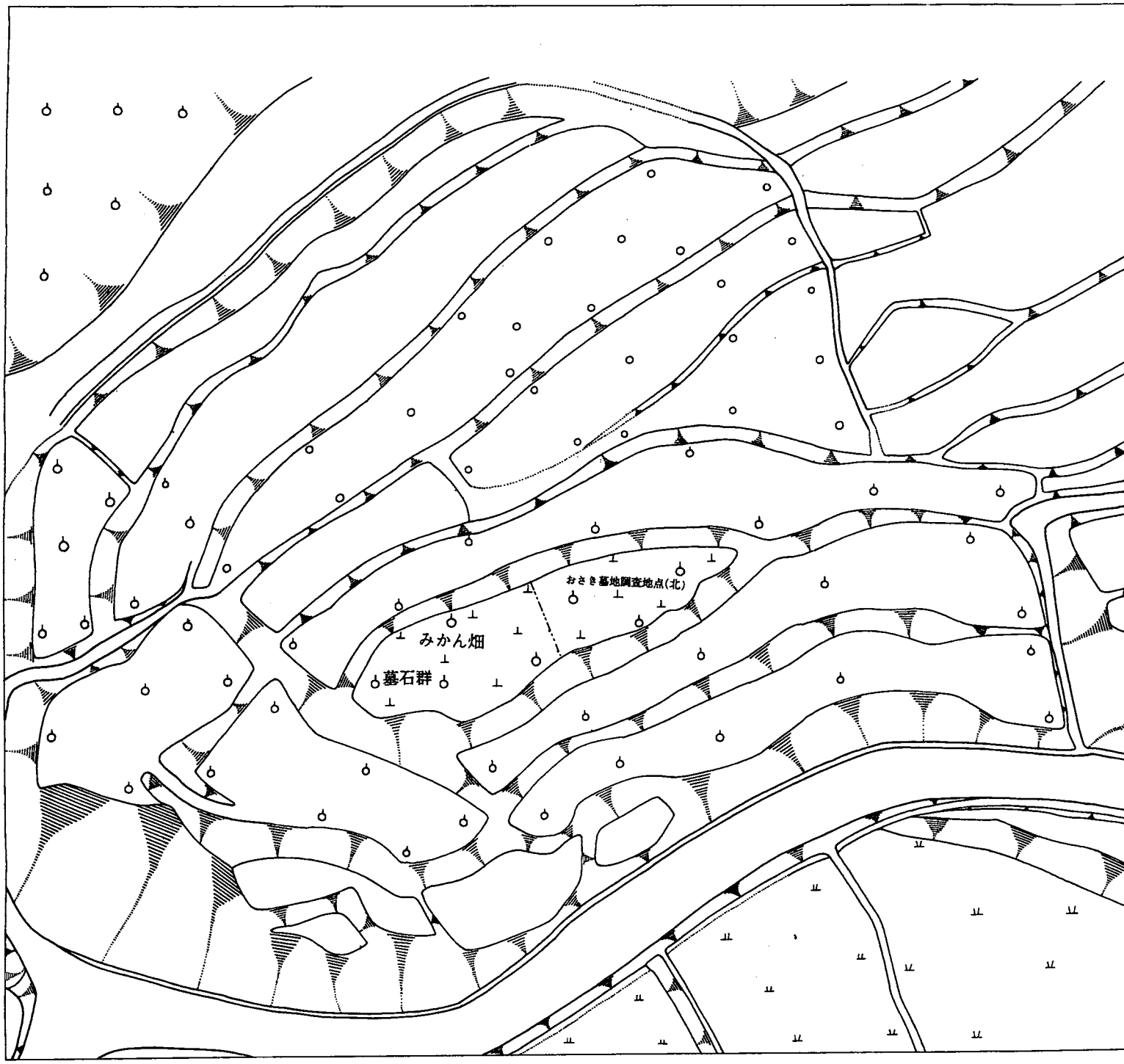
さて残存する火輪の形式によって分類してみると、五輪終末期における五輪のおおまかな形式が把握できる。つまり、火輪の形式から見ると、鎌倉期のものと比較して塔全体が小型化しているのは当然ながら、火輪の全体の厚さが時代が降るにつれて薄くなっていくことが判る。その結果、火輪、つまり笠部の四隅に走る稜線も短くなり反りが消えてしまう。また、頂端部の空風輪部を置く方形の部分の面積が広くなり、枘穴も小さく浅くなって来る。

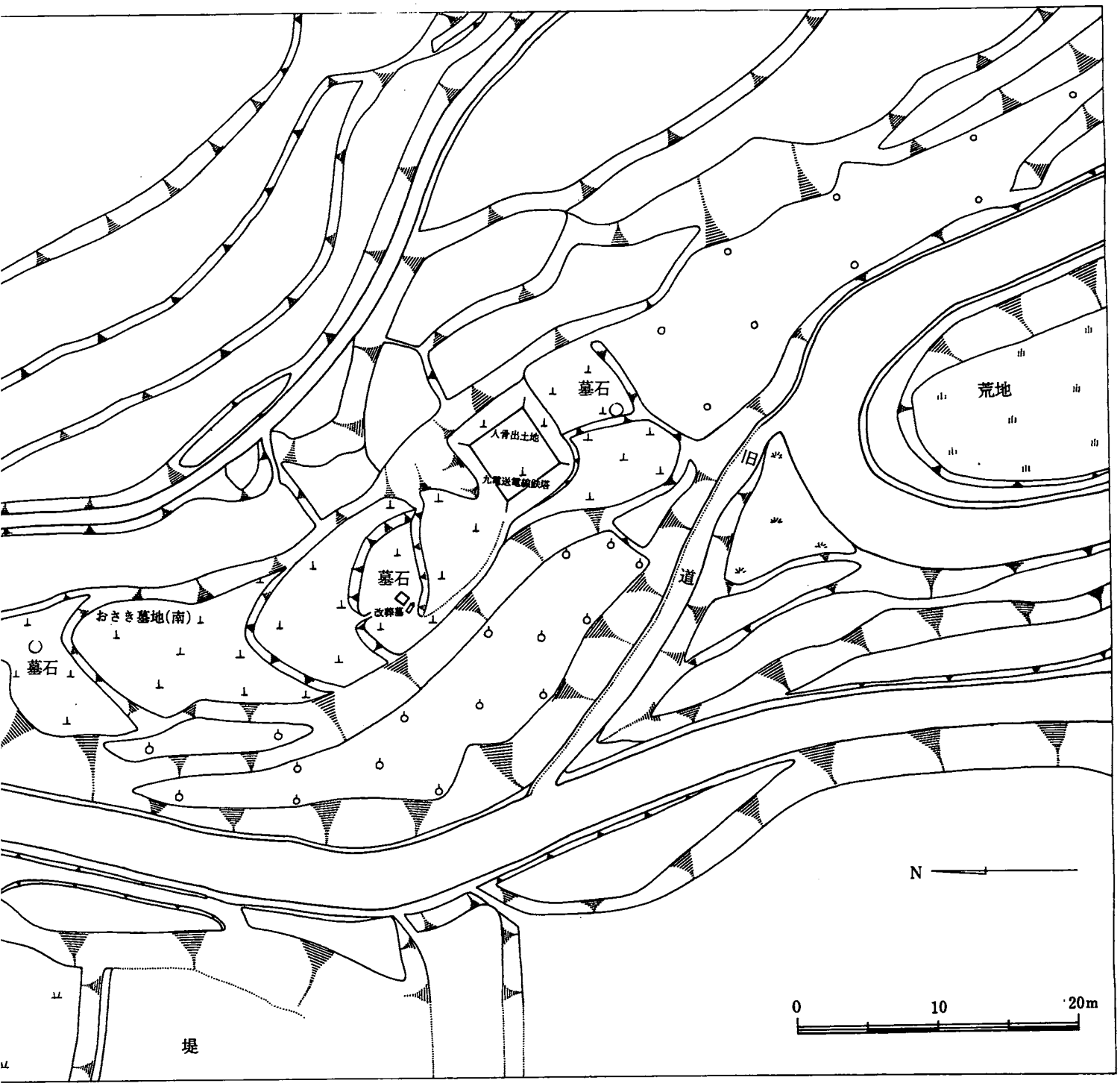
水輪についても、古い時期のものは円

第8図　(1) 鴟（ウハキュー）銘を持つ有角五輪火輪部

同図 (2) 空風輪部

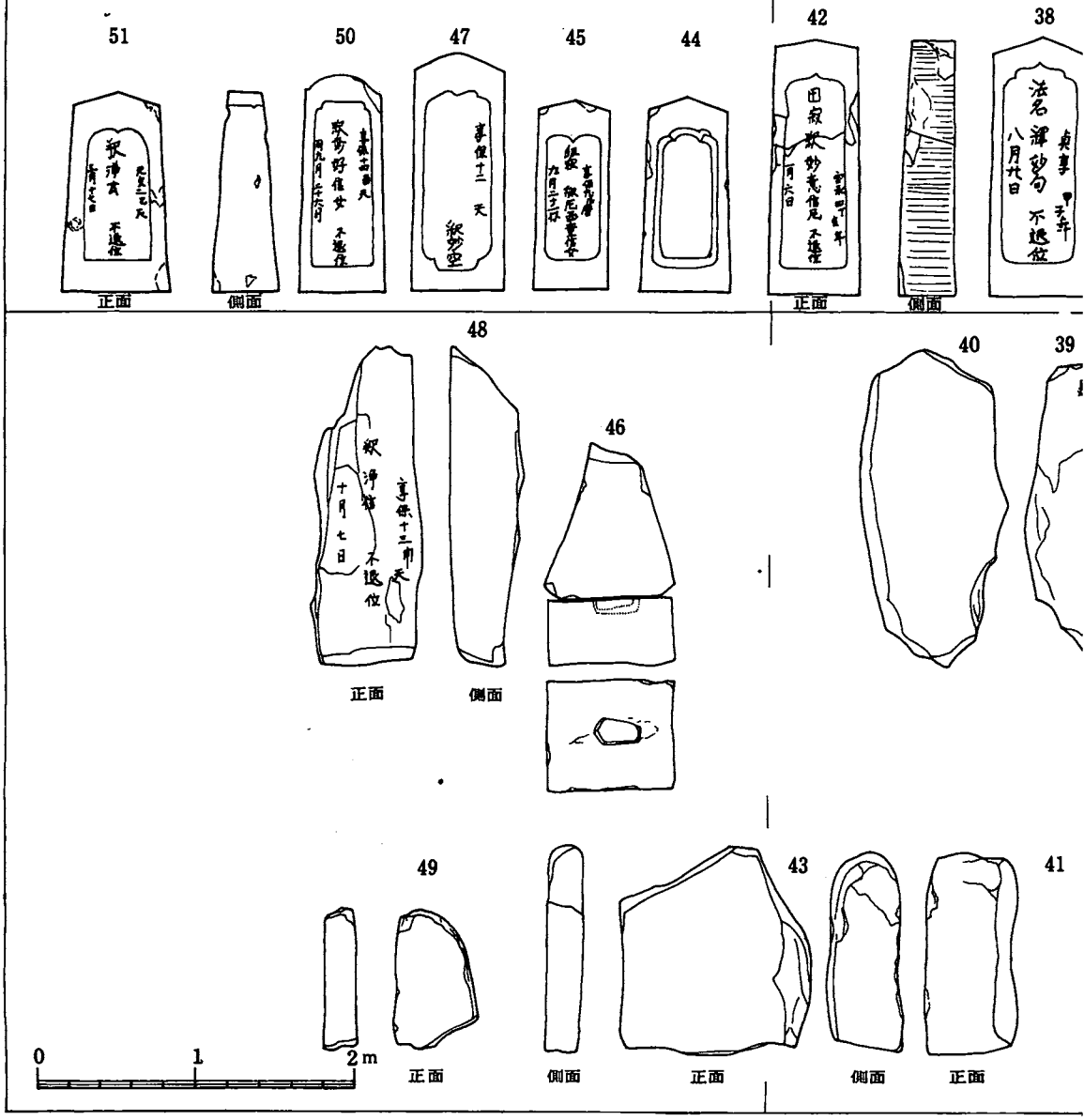
第6図　おさき墓地地形図




墓石
人骨出土地
九電送電鉄塔
墓石
改葬墓
おさき墓地(南)
墓石
旧
道
荒地
堤
N
0
10
20m

江

西暦	年号	年	戒名
一六八二	天和	二	釈好信女
一六八四	貞享	元	釈妙句
一六八五	貞享	二	釈全定信女
一七〇〇			
一七〇七	宝永	四	釈妙意信尼
一七一二	正徳	二	吉田市左ヱ門
一七一八	享保	三	釈一円信士塔
一七二四	享保	九	釈口面意信女
一七二七	享保	一二	南無阿弥陀仏釈妙空
一七二八	享保	一三	釈浄信
一七二九	享保	一四	釈妙好信女
一七三七	元文	二年	釈浄玄



戸　時　代　（前　期）

一六六四　寛文　四　護念寺開墓

一六五二　承応　元　釈祐心

一六五〇

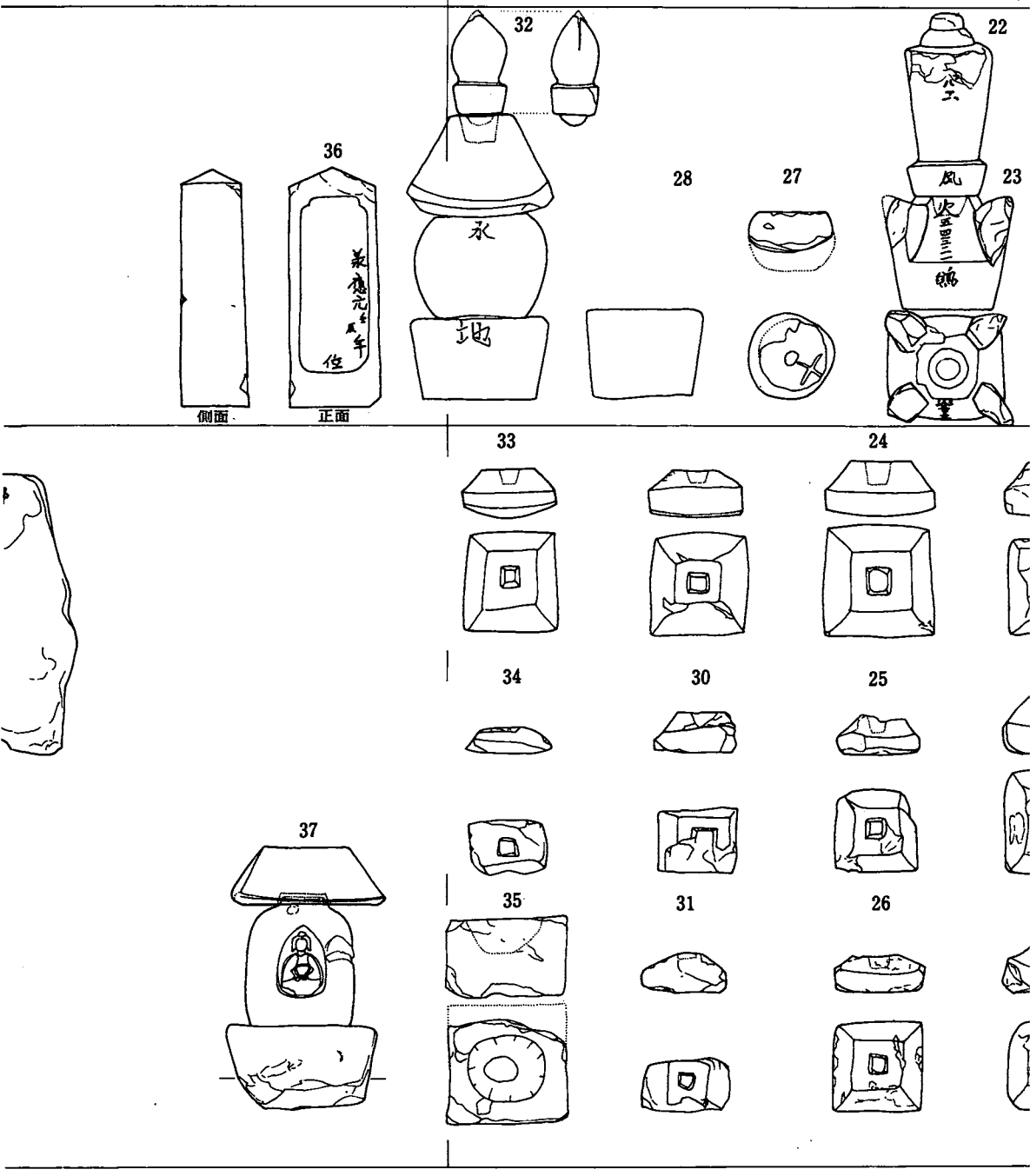
一六四八　慶安　元　花蕊宗園禅定門

一六四一　寛永一八　直蕊宗円居士

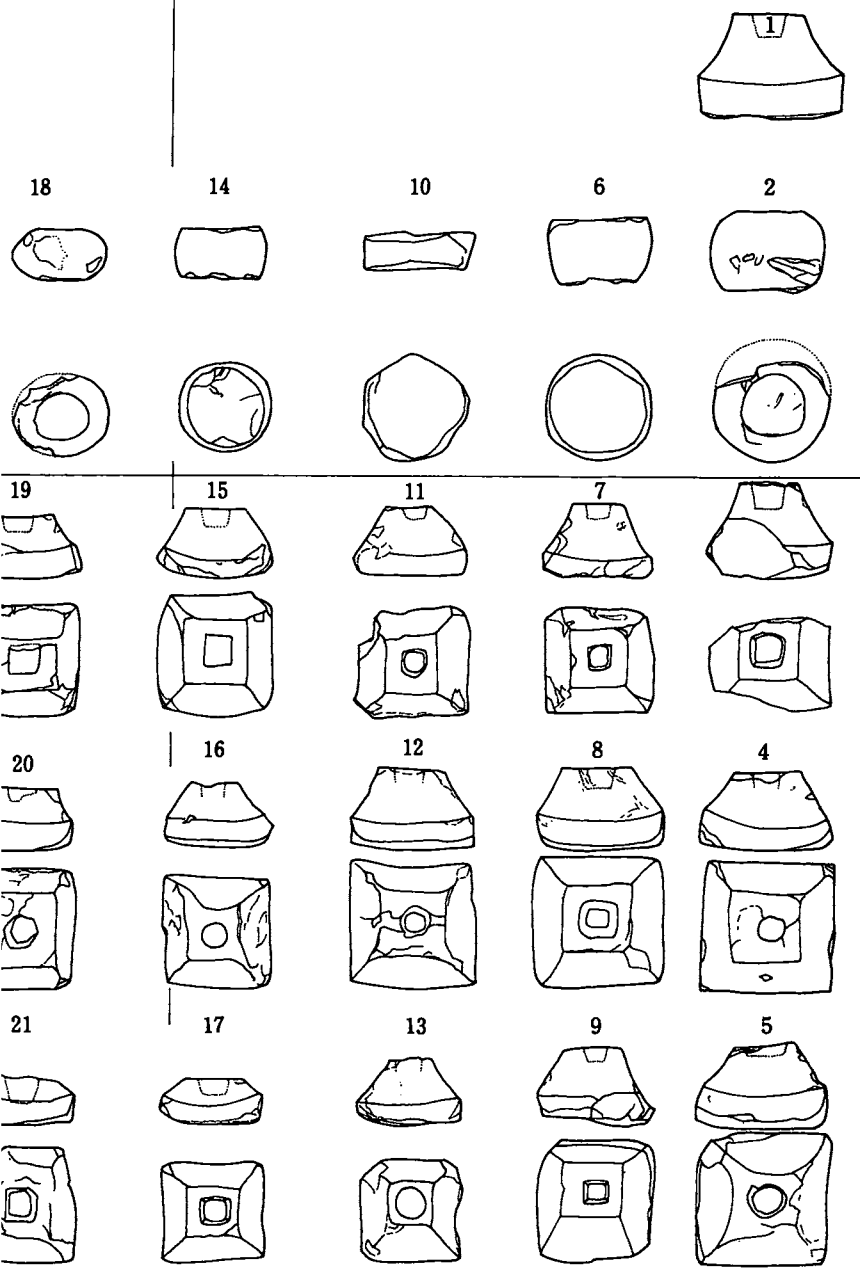
一六三七　寛永一四　島原の乱起る

一六三一　寛永　九　細川氏肥後入国

一六一二　慶長一七　キリスト教禁止令



	安土桃山時代	室町	時代
一六〇〇			西暦
			元号
			墓碑銘及び関連事項



第9図　おさき墓地散乱石造遺物編年一覧表

〈八代郡種山手永栫村所在〉

の上端・下端を僅かにカットしたといった観を呈しているが、この時期のものは、円の上下端を大幅に切断したといった形を見せ、横から見た場合楕円に近い形状を呈してくる。従って、水輪が地輪および火輪と接する部分の面積が広くなり安定は良くなってきている。

また、全体的な施工は粗雑になり、終末期の様相を呈して来る。この時期に出現するのが、有角五輪塔（第8図）である。当おさき墓地にもこの火輪と空風輪部各一基分が存在する。この外にも火輪有角部片が一片出土しているので、元来二基存在したのであろう。

有角五輪の空風輪は図に見られるとおり五輪のそれと異なり空の部分が異状に長く延び円筒状をなし一見、相輪と見まごう形状を呈している。総長は枘部分まで含めて68cm、直径（最長部）29cmあり、各部に空・風の文字が刻まれている。また火輪部の各四隅には宝篋印塔の隅飾と同様の突起が火輪の稜線に沿って造り付けられている。火輪の傾斜部には火と刻まれ、その下に五四三二一の数字、続いて火輪の軒の部分に 鴛（ウハキュウ）の文字が見られる。(註3)

この有角五輪塔は、県内では珍しくあまり見られないが、他県では大名等の墓石に良く見られるものである。慶長年間頃多く造られたようで、この一時期に流行し、あとは廃れてしまったのか以後はあまり見られない。

大名クラスの墓石である有角五輪塔がこのおさき墓地内に存在したことは、慶長頃にこの地に勢力をはった武士の存在が推定される訳である。同様の形式を持つ有角五輪片が他に一墓分

第10図　　正保銘の水輪

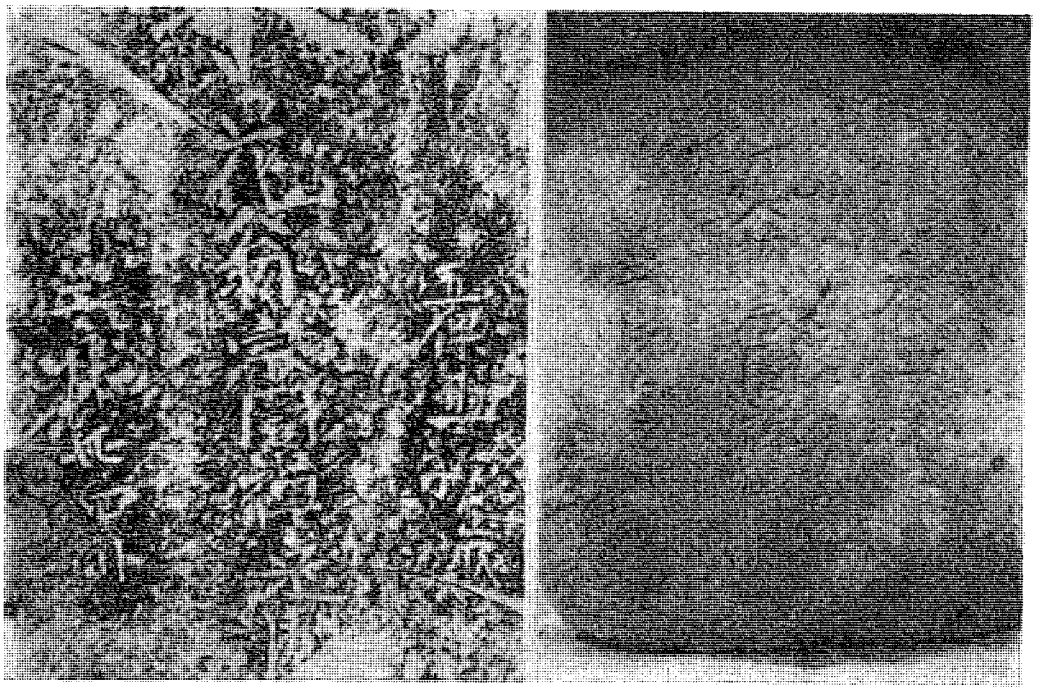


表1　記銘のある墓石一覧（おさき墓地中心）

年　号	月　日	西　暦	法　名
慶長年間か			各輪に地水火風空 火輪に五四三二一、鴎　とあり
寛永9年		**1632**	**細川氏肥後入国**
寛永14年		**1637**	**天草一揆（島原の乱）起こる**
寛永十八年	夘月十三日	1641	直翁宗王居士
正保五戊子歳	二月十四日	1648	水　花翁宗園禅定門
兼應元壬辰年	八月十五日	1652	法名　釋祐心不退位
寛文4年		**1664**	**護念寺開基**
天和二壬戌年	暦六月廿五日冥	1682	歸寂　釋妙好信女不退位
天和三癸亥年	十二月二十九日	1683	南無阿弥陀佛
貞享元甲子年	八月廿日	1684	法名　釋妙句不退位
皆　貞享二乙丑年	十一月廿五日冥	1685	歸寂　釋全貞信士霊位
宝永四丁亥年	二月六日	1707	□寂　釋妙意信尼不退位
正徳壬辰天	十一月十九日	1712	南天阿弥陀仏灵位 法名　釋了念
享保三戊戌天	十月廿一日	1718	釋一円信士塔
享保七	正月十四	1722	釋道清居士
享保九甲辰暦	九月二十一日	1724	釋尼西童信女
享保十二丁未天	二月十六日	1727	南無阿弥陀仏　釋妙空
享保十三甲天	十月七日	1728	釋浄信不退位
享保十四酉天	閏九月二十六日	1729	釋妙好信女不退位
元文二丁巳天	三月十七日	1737	釋浄玄不退位
安永四	三月十三日	1775	宗英義職居士

型　　式	所在場所	第9図の図面番号	備　　考
有角五輪	おさき	22 23	火輪と空風輪のみ
五　　輪	おさき	28	五輪の地輪部に刻名
五　　輪	おさき	32	五輪水輪部に刻名 2月15日改元につき正式には慶安元年（1648）
角石塔形墓標	おさき	36	兼應＝承応
板碑状	おさき	39	自然石
角石塔形墓標	天神東		松永義雄氏所有地 このすぐ横に五輪の地輪、水輪が散乱
自然石形墓標	おさき	38	自然石
板碑状	おさき	40	自然石
角石塔形墓標	おさき（東）	42	高圧線鉄塔建設の際、多量の人骨出土
角石塔形墓標	おさき	44	右側面下部に俗名、吉田市左衛門の刻名あり
角石塔形墓標	おさき	40	左側面に吉田氏刻名
角石塔形墓標	茶屋が崎		松永義雄氏所有地
角石塔形墓標	おさき	45	吉田氏刻名
角石塔形墓標	おさき	47	左側面下に吉田氏刻名
板碑状	おさき（東）	48	昭和五年頃、この横に三体分の骨を埋葬したという （田中外一郎氏談）
角石塔形墓標	おさき（東）	50	
角石塔形墓標	おさき（東）	51	
角石塔形墓標	茶屋が崎		松永義雄氏所有地

見られるので夫婦の墓だった可能性もある。

火輪に刻まれた 鴿 の文字は読み方が不明であるので、一般にこの文字を分解してウハキュウと読んでいる。 鴿 を冠標とする板碑は江戸初期の寛永前後に固まって見られるが、このように有角五輪に 鴿 の文字が刻まれるのは珍しい。

なお、これと前後する五輪の水輪のひとつに十字が刻まれているものがある。第9図の№27の水輪で頂端平坦部に克明に単十字が切られている。この部分は、上に火輪を乗せれば完全に隠れる場所である。無論、塔の製作過程の目印として刻まれたものではない。慶長17年(1612)キリスト教禁教令に伴い、肥後藩でも宇土、小川、川尻で切支丹教徒の詮索と迫害が開始された情勢から、クルスである可能性は十分考えられる。この外、第9図№32の水輪、№32、№28の地輪には刻銘(註4)が見られる。№32の水輪には、水という字の下に花翁宗園禅定門とあり、また№32の地輪には地と刻まれている。№28の地輪には寛永18年・直翁宗王居士・卯月廿三日とあり、これらが江戸初期の五輪塔であることが判る。この時期になると、地輪にも変化が現われる。前時代の地輪を側面から見た場合、正方形・長方形(横へ)をなすが、この時期の地輪は逆台形となっている。寛永18年銘の№28の地輪の上端の幅が40cm、下端の幅が34cmである。№32地輪も上端が47cm、下端が38cmといずれも下端が狭くなっている。また同時期の宝塔台座に関しても同様の傾向が見られる。

五輪塔の空風輪(第9図№32)は、二個しか存在しなかったので断定できないが、空の部分が全体的に長めに延び、先端部が尖りまた正面から見た時と側面から見た時の厚さが異なっている点など、この時期の特色のように思われる。

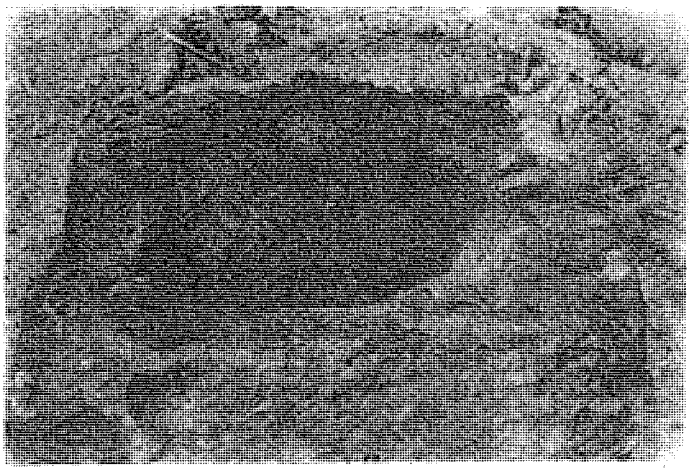
また、初期の頃の五輪塔造立主旨の記憶が薄れたためであろうか、終末期の五輪には往々にして各相当輪に地水火風空の文字が刻まれているものが多い。

これら小型粗雑化した一般人(地侍クラス)の五輪は、当おさき墓地では慶安元年(1648)の花翁宗園禅定門の五輪をもって終末(註5)を告げることになる。そして4年後の承応元年(1652)になると、背が高く先の尖った細身の角石塔(第9図№36)となって登場する。このおさき墓地では1650年頃を境として五輪から角石塔(註6)へと移行しているのであるが、この傾向は恐らく県下全般にあてはまることではなかろうか。そして、その後元禄年間に到ると、角石塔(註7)は各地で盛んに建立されるようになる。

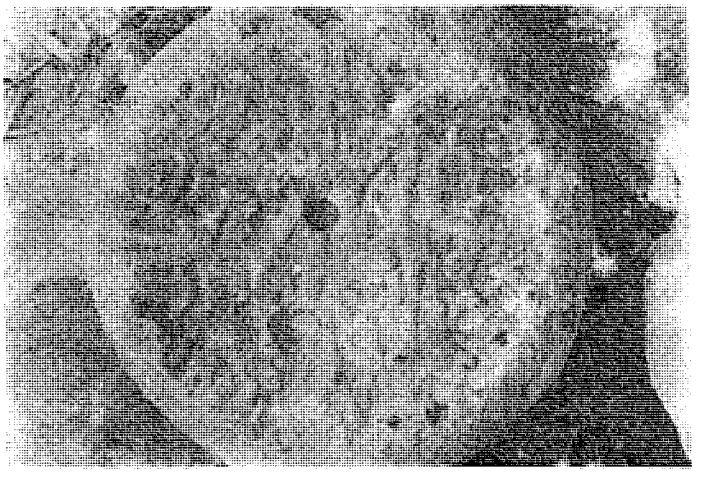
さて、五輪から角石塔へ変化した後、時の経過に従って角石塔の形態にも変化が見られる。

17世紀後半、つまり承応、寛文、貞享頃の角石塔は頭の尖った背の高いものが多いが、18世紀にはいり、正徳、享保、元文と時代が下るにつれて小型化し、角石塔の上下の幅が異なり、将棋の駒に近い形状を持つようになる。

なお、当墓地の場合、これらの角石塔は塔身のみでそれをのせる台座としての石は発見されていない。台座の石は家の礎石等に転用されたことも考えられるが、一個の出土も見られない



第11図　納骨用施設を持つ地輪



第12図　単十字と中心孔を持つ水輪

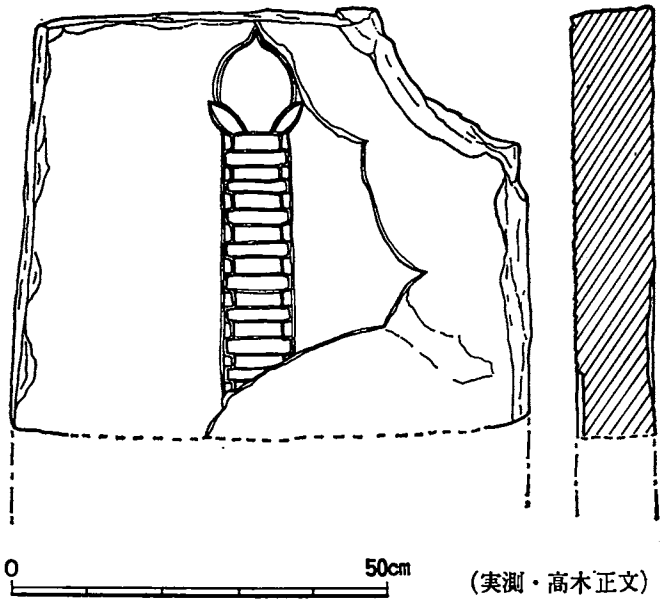
ので元来、存在しなかったのであろう。古い時期の墓石には台座の石が見られないことも多い。しかし、江戸も中期をすぎると殆んど台座が付くようになる。勿論、この変化は一般的な傾向を述べただけであり、特殊な身分の者は大型の墓石を建立しているし、藩主クラスの墓は相変らず鎌倉時代の五輪にも劣らない巨大な五輪塔が江戸時代を通じて築造されている。

なお、これらの角石塔墓に併行して高さ1m、幅45cm、厚さ15cm程度の自然の板石を墓石として使用した板碑状の石塔（第16図）も使用されている。

この外、角石塔を持たない墓坑の上に盛土をしその上に目印の小石をおいただけの、いわゆる土饅頭の墓が一般庶民の墓として続いていることも見落してはならない事実であろう。また、角石塔墓にしても、埋葬時にすぐ角石塔を建立することは少なく年忌等を期に建立する場合が多いのでこの点も考慮すべき問題である。

これら五輪、角石塔、板碑以外に宝塔状をなす四方四仏（第9図・37）がある。四方に稚拙な手法による四仏（第14図・37）らしきものが刻まれるが、何を刻んだものかはっきりしない。全体的に粗雑な仕上げとなっており、江戸期のものと思われる。

承応元年以後の角石塔についてはすべて法名で刻まれているため本名は不明である。これらの石塔に混って、初めて俗名が刻まれるのが正徳2年（1712）の吉田市左衛門の墓石（第15図・左）である。続いて享保三天戊戌天釈一円信士塔十月二十一日吉田氏（註8）という刻名のある墓石が現われる。この外、享保九、享保十二の各石塔には、右側面に吉田氏という刻名が認られ



(実測・高木正文)

第13図　本郷左衛門の墓と伝えられる板碑残欠

る。明らかに正面の法名の筆跡と異なり、かつ三基とも同じ筆跡であるので、後世、吉田氏にかかわりのある人が、記憶の薄れるのを恐れ追刻させたものと思われる。

このおさき墓地の墓石類以外の古い石造物としては、当墓地の南麓の小字、山下の田中外一郎氏宅地内（1207番地）に、塔の相輪が刻まれる長さ56㎝、幅67㎝、厚さ11㎝の、下半分が欠損した砂岩質の板碑（第13図）が残る。砂岩であるため、風化による剝離が碑面右半分および裏面の一部に見られる。現在、コンクリートによる高さ120㎝程の基壇を設け、その上に立てられ同家の屋敷神として祀られている。

伝承によればこの墓は、名和氏の家臣であった本郷左衛門（本郷三郎）の墓という。3月5日には関係者を集め、植柳の水田氏を呼んで祭を行う。

碑の下半分が欠損しているため、この板碑に刻まれた塔が宝塔か宝篋印塔であったのか俄かに判定はできないが、宝篋印塔であった可能性が強い。

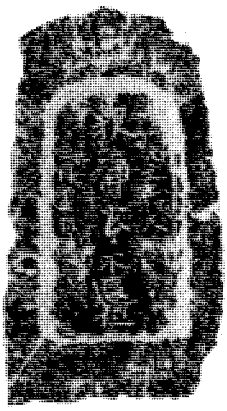
なお、記銘等も欠損部分に刻まれていたのであろうが、残存部には見られない。残された碑面には、相輪部のみが刻まれているが、相輪は九輪を数え刻みが深く、頂端部の宝珠は形の崩れが見られず優美である。

全体的に見ると、相輪は細身で長く、各輪の間隔も均等に整然と刻まれており、古い型式をとどめている。この板碑の年代について同家では、正元年間（1259～60）のものと伝承されているが、南北朝の頃のものではなかろうか。

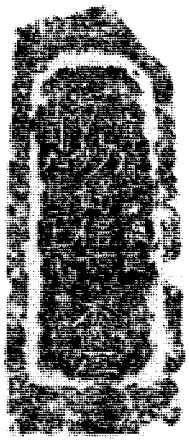
なお、この板碑は、この場所に倒れ埋っていたものを田中氏が掘起したものであるが、この地点より納骨用に使用されたと思われる、瓦質の火舎底部および脚部破片が調査時に採集された。

註1　火輪部を側面から見た場合、厚みがあり、四隅に走る陵線および軒部に反りが見られる。江戸時代にはいるとこれらの反りが少なくなり、平面的になり立体感が感じられなくなる。

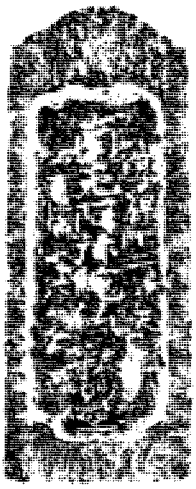
第14図　記銘のある墓石拓影



51



50

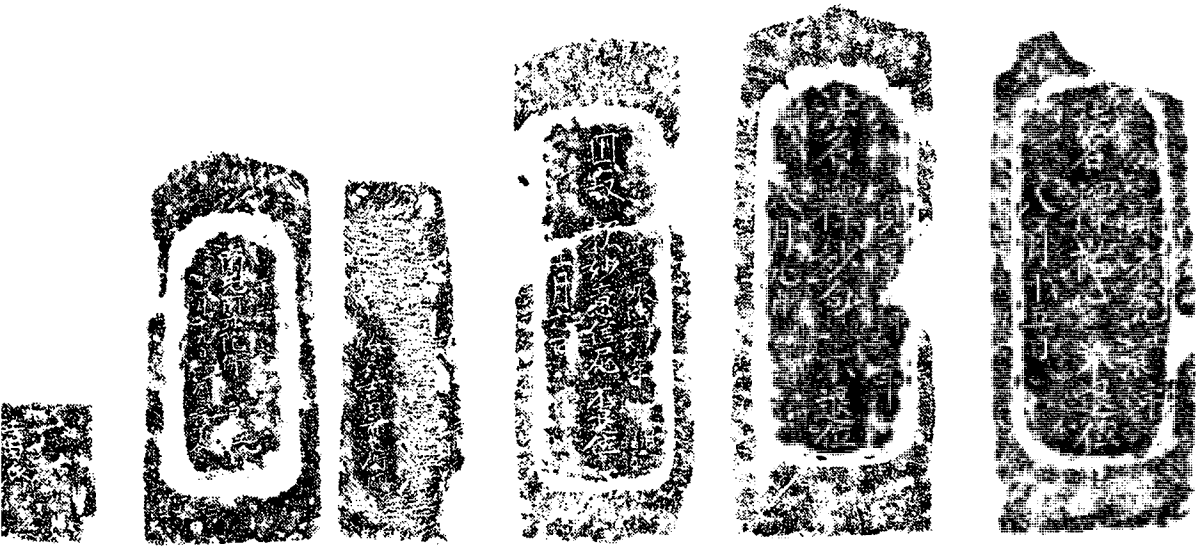


47

45

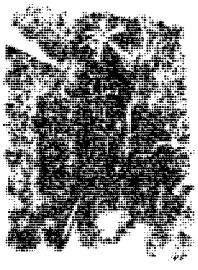
48

46



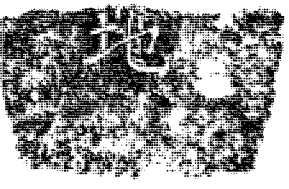
44 42 38 36

40 39

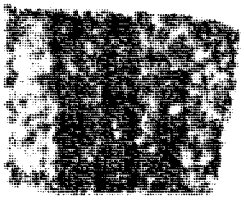


32の水輪

27



32の地輪

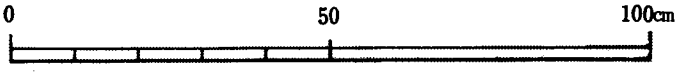


28

23

22

37



註2　中世の墓所等で五輪の空風輪は他に転用できないためか、多数散乱している場合が多い。空風輪の個数を数えることによって、かって存在した塔の数を知ることも多い。

ところが、このおさき墓地には、地輪と空風輪が殆んど見られないのである。隣の早尾には、この空風輪ばかり集めて屋敷神として祀っている家がある。過去に、おさき墓地の空風輪もここに運ばれたのではなかろうか。

先年、発掘調査が実施された宇土市の西岡台の城跡（千畳敷）の深い空堀跡からは、地輪のみが欠損した五輪の各部分が集められ埋納されているのが発見されている。

空風輪が人頭大で人の頭部に似ているところから、年忌等にそれらを集めて供養する風習がこの地方に存在したのではなかったろうか。

註3　鴟　の字のある板碑について

板碑等の冠標として刻まれている　鴟　は分解してウハ臼と読みそれを書いた紙面に 触れただけでも滅罪成仏するという功徳あらたかな字といわれる。しかし、その意味するところについては諸説があり、いまだ不明の点が多い。福岡県大牟田市に2例、熊本県下では球磨郡に30数例ある。県中央部では、熊本市内に数例みられる。有名なものとしては、天草郡苓北町富岡にある天草一揆の際の処罰者を供養した富岡吉利支丹供養碑（正保4年7月25日銘）等が挙げられる。興味深いのは　鴟　を冠標とする板碑は、江戸初期の寛永前後にかたまっているという事実である。恐らく寛永18年（1641）頃のおさき墓地の　鴟　が一番古いものではなかろうか。また五輪の退化した石造物に彫り込まれている例も他には見られない。

註4　肥後藩内では、慶長17年のキリスト教禁教令の後、寛永10年、宗門改めを行い、翌11年に長六橋にてキリシタンが処刑されている。そして3年後の寛永14年（1637）には天草一揆が勃発した。

註5　肥後の墓制上における中世と近世の境は、1650年頃と考えていいように思われる。この時点で五輪から角石塔へ移行するのは勿論、墓石への記載方法にも変化が見られる。例えば、月日の書き方も「舛月十三日」という記載から「八月十五日」といった書き方へと変化し、○○禅定門から釈○○へと法名が変わる傾向を示すのもこの頃である。

註6　「山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告第一集　1976」掲載の下松尾墓地調査報告書のなかで執筆者の靏久嗣郎氏は、これら近世墓地における整形加工された墓石をその形状から、仏像形と角石塔形に分類し、更に角石塔上端の形状により、笠石形、櫛形、角山形、丸山形、兜巾形、特殊形等に分類されている。

この時期の石塔は、従来の供養塔（層塔、宝塔、宝篋印塔、五輪塔、卵塔等）とは異なり、単なる墓の標石、つまり墓標としての意味しか持ち得ないので、ここでは靏久氏の使用されている角石塔形墓標という名称を用いることとした。

なお、角石塔形は、角柱の頭部を塔形に刻み出した塔婆形から発展したものといわれる。

註7　五輪から角石塔への変化は、真宗寺院の開基と無縁ではないように思われる。県下の浄土真宗寺院の建立開基は寛永年間に多い。椿村における浄土真宗の護念寺の開基はやや遅れた寛文4年（1664）と伝えられるが、この年代に前後して多くの真宗寺院が創建される。

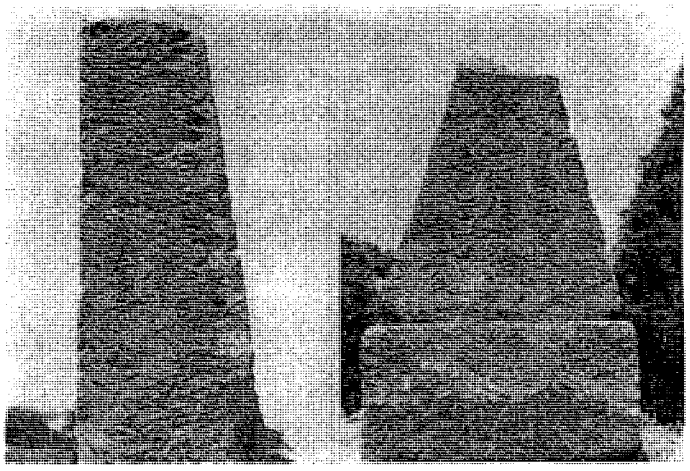
当然、これらの寺院は新規創建だけでなく、既成寺院の浄土真宗寺院への改宗も含まれるであろうが、この事実が墓制の変化に多大の影響を与えたであろうことを角石塔の刻名等からも窺い知ることができる。

註8　吉田氏については明らかでないが、享保頃すでに吉田の姓を持つ家柄であるので当地区の有力な地侍であったと思われる。現在、椿地区に吉田氏は見られないので、過去に滅びた家であろう。

3. 墓 坑・木 棺

今回の発掘区域から15基にのぼる墓坑が発見された。発掘区域が自動車路線敷地買収部分のみに限られていたため、墓域の全貌は不明であるが、推定すれば30基にのぼる墓坑がこの墓域に存在することが推定される。これらの墓坑の詳細については表2のとおりである。(註1)

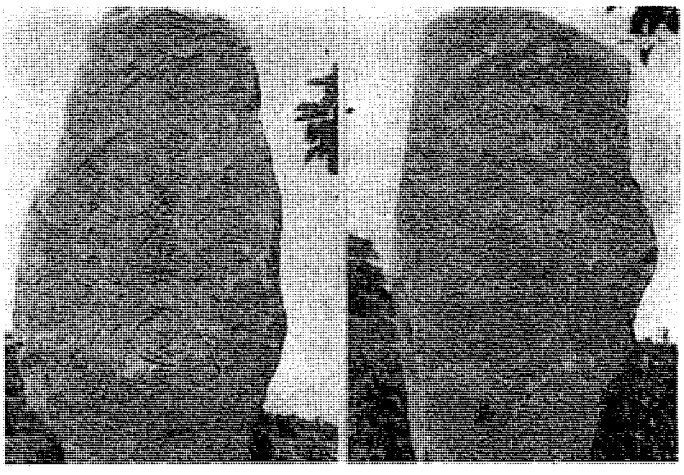
墓坑15基のうち方形プランを持つもの11基、円形プランのものが4基を数える。方形プランを持つ墓坑の一辺の方向は、西に若干触れるものが多い。これは、地形の形状や他の墓の方向に左右された結果であろうが、ほぼ一定の共通性を持って設けられていることがわかる。しかし、このことが即、座棺の場合西向きの埋葬状況であったことを示すものではない。墓坑の深さは各々、表土下1m前後と意外に浅い。一番深いものがNo.7の138cm、浅いものでNo.2の66cmを計る。これら方形の墓坑の一辺は約1m前後のものが平均的である。



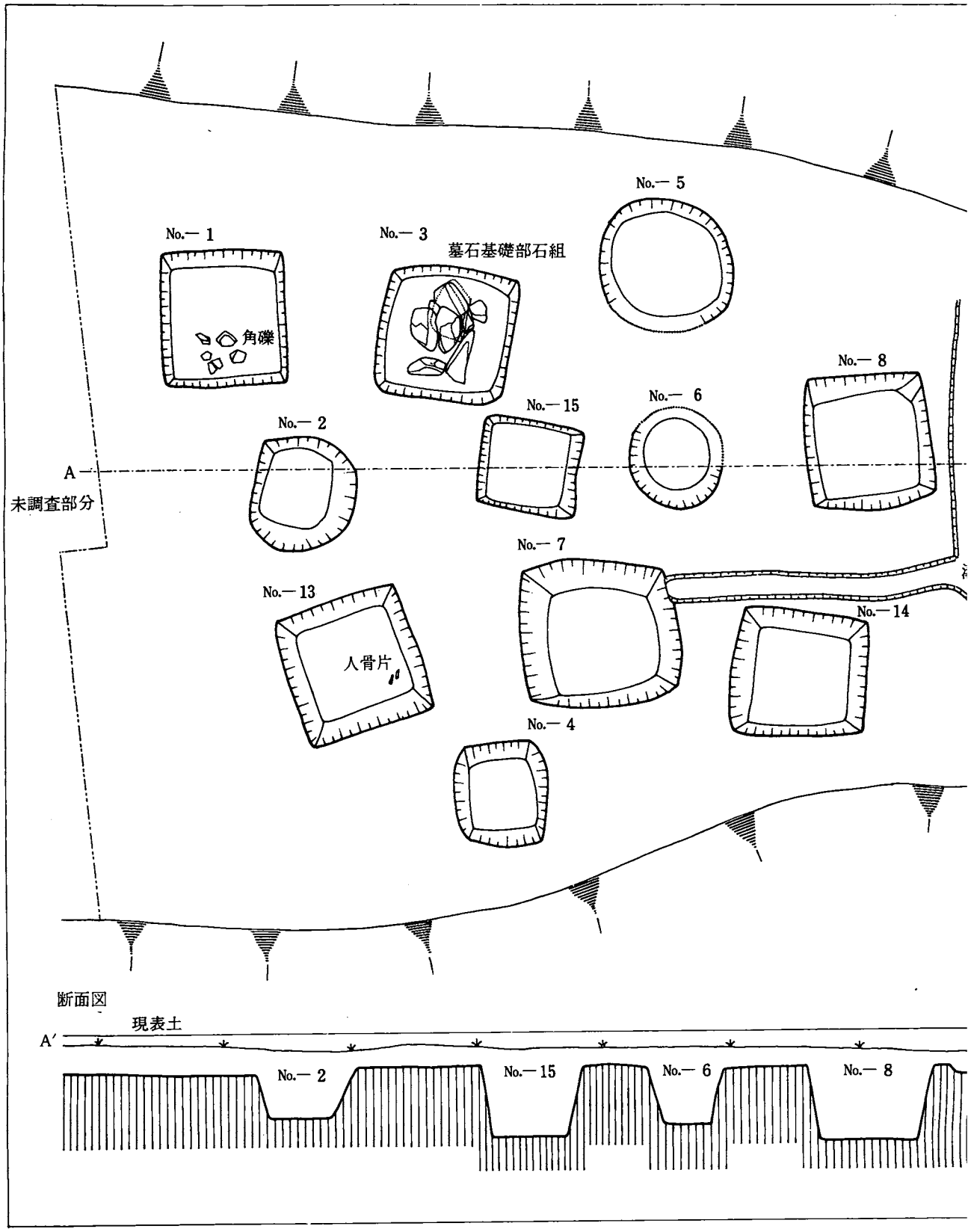
第15図　吉田市左衛門の石塔（左）と吉田氏の釈一円信士塔

これら近世初期の墓坑を中世時のそれと比較すると、大型の墓坑や長方形の墓坑は消え、正方形の画一的な墓坑となってくる。(註2) ただ、墓坑の深さは中世時のものは比較的浅いものが多いが、当墓地でも1m前後の浅い墓坑が多く前時代の踏襲が見られる。

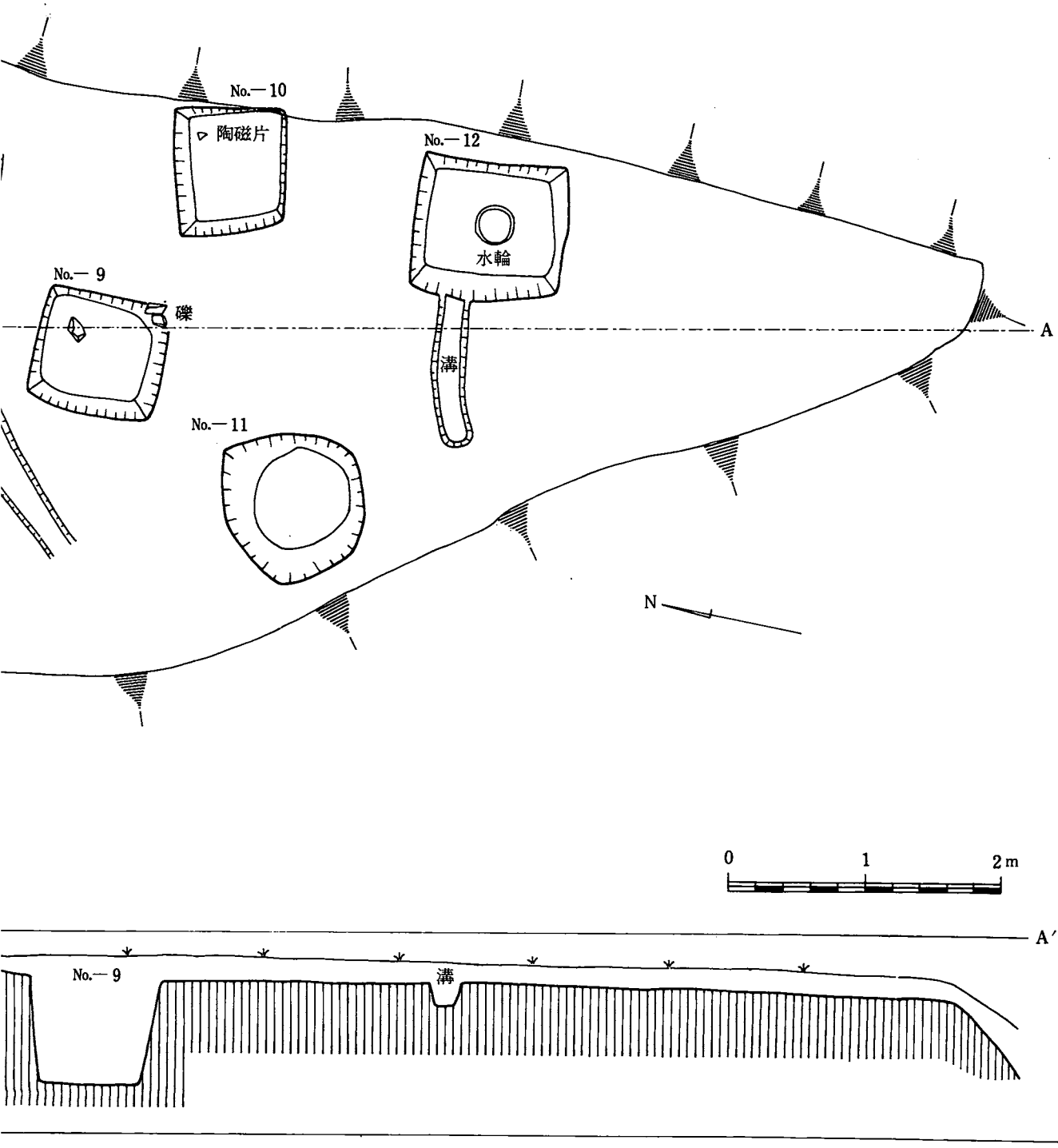
この後、江戸時代を通じて、土葬用の墓坑の穴は除々に深くなっていき、それがつい先頃まで続いたのは(註3)



第16図　1680年代の板碑状墓標


No.— 1
角礫
No.— 3
墓石基礎部石組
No.— 5
No.— 8
No.— 15
No.— 6
No.— 2
A
未調査部分
No.— 7
No.— 13
人骨片
No.— 14
No.— 4
断面図
現表土
A′
No.— 2
No.— 15
No.— 6
No.— 8

第17図　おさき墓地墓坑配置図



周知のとおりである。

内部に納められた棺は、跡かたもなく腐蝕してしまっていたが、これら墓坑の形状、および鉄釘等から、なかに納められた棺の形状を推定することができる。

方形の墓坑には、まず木製の座棺であったことは疑いないところで、円形のものは、恐らく棺桶が納められていたのであろう。このように当墓地の主流を占めるのは座棺であるが、併行して遺体を側臥させ手足を折り曲げ納棺した長さ70cm程の一種の寝棺も使用されていたことが、他の墓所で確認されている。(註4) このように当墓地での棺の主流を占めるものは、木製の箱状の座棺であり、従として桶棺が使われたようである。また、これらの座棺に使用された棺材は釘に付着した木片から三分ほどの板であったことが推定される。

15の墓坑のうち№.2、№.4、№.6については、その墓坑の規模等から子供の墓であった可能性が強い。

さて、これらの墓坑上部の盛土は近世初期になると中世墳墓に見られた大型の墳丘が消え、現代でも見られる小さな土饅頭に近い盛土となる。(註5) 当墓地の場合、すでに存在したであろう小規模の土盛は開墾時に失われていたが、墓坑の間隔から考えて中世後における方形の墳丘の存在は考えられない。墓石を持たない墓の上部構造は小規模の土饅頭に木製の墓標の立つ簡素なものだったのであろう。

註1 おさき墓地における墓坑には、重なり合ったものやお互いに切合い関係にあるものは見られず、狭い墓域内にほぼ等距離と同方向という共通性のもとに満遍無く設けられている。この事実はおさき墓地が比較的短期間に使用され、埋葬個所がなくなった段階で次の墓地へ移っていったことを物語っている。

一般にその墓所の使用期間が永くなると、先に埋葬された事実が忘れ去られ後の墓坑は先の墓坑の上に重ったり、切り合ったりして掘り込まれるようになる。つまり忘れ去られた墓坑（墓）は無縁仏として処理され、その上に新しい墓坑が掘られるからである。

このように、永い年月を経、所有者や縁故の人がいなくなった墓は、適宜無縁仏（墓）として処理されて来たからこそ、面積に限りのある寺院等の墓地が、現在までもその使用を続けてこられたのである。

当おさき墓地の場合、面積が狭いことが原因で、短期間でいっぱいとなり無縁仏としての処理がなされなかったため以後の埋葬が不可能となり、江戸前期頃を持って墓地としての生命を終えたものであろう。

註2 尾窪中世墳墓群（城南町尾窪所在）の31号墳は228×191cm、深さ116cmの大型の墓坑であった。この墓坑の中心に西向きの座臥屈葬の状態で水晶製の数珠を手にかけた遺体が埋納されていた。中世墓の場合、この墓坑に準じた大型墓坑を持つ場合が多い。

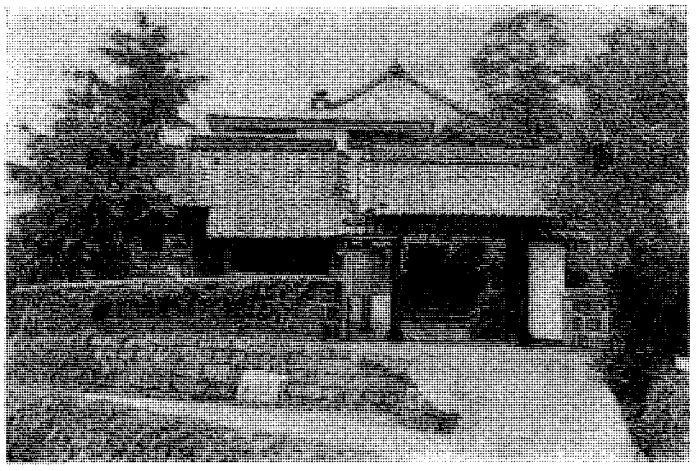
註3 県下では江戸時代、墓坑（墓穴）掘りは「いけほり」と称して葬式組（ソウレイ組）の重要な任務のひとつであった。勿論遺族はこの作業には参加しないが、遺族の家ではいけほりに携った人達のため、特別に酢の物等をつくり床間に据え、その労をねぎらった。また、いけほりをする人にとって、深く掘ることが自慢の種でもあった。

註4 中世墳墓では、先の尾窪中世墳墓群でまた、近世墓では鹿央町上広の西屋敷近世墓群等に認められる。

註5　中世墳墓における墳丘は、現在永年の風雨により、稜線が消え一見小円墳状に見えるが、元来、方形をなす場合が多い。このことは周溝の形状によっても確認される。方形をなす理由は明らかでないが、簡単な墳墓堂、または現在でも田舎の方に残る屋形（やぎよう）の設置等に端を発するのではなかろうか。

4.　墓坑内からの出土遺物

墓坑内からの出土遺物としては、埋葬時に墓坑内に混り込んだとも思われる磁器皿破片がNo.10墓坑より、また棺材をとめるための鉄釘が8つの墓坑から出土した位で、埋葬時の副葬品といったものは見られなかった。



第18図　護　念　寺　全　景

遺構としては、No.3墓坑から墓石の陥没を防ぐためその根を固めたと思われる人頭大の栗石の一群が、またNo.12の墓坑上面から五輪の水輪部が一個出土した。このNo.12以外の各墓坑の上部構造が五輪塔であったのか角石塔だったのかは、今回の調査では判別がつき兼ねた。

釘（第19図）はその断面が方形をなす、鉄製の角釘で、方形墓坑の角の部分から出土しており、棺材をとめるため使用したことが窺われる。出土墓坑は、No.3、No.4、No.7、No.8、No.9、No.10、No.13、No.14、No.15等9基にのぼり、その総数は47本を数える。数はNo.3墓坑の13本が一番多く、他は5～6本前後であったが、発掘時、若干の見落しがあったことも考えられる。

釘の長さは、出土墓坑によりまちまちで一定しないが、短いもので1寸、長いものは2寸釘も見られた。多数を占めるのは、1寸から1寸5分位のもので、これは棺の角となる部分を、また2寸釘等は数が少ないので特殊な部分、たとえば底板等をとめたものと思われる。

なお、先の曲っているものが見られるが、板から尖き出たものを打ち曲げたものであろう。この外、No.15墓坑より用途不明鉄片一個が検出されている。

釘の出土した墓坑は、方形のもののみで円形墓坑からは見られなかった。これは、やはり、箱型の座棺と桶棺との差異を示唆するものではなかろうか。

No.10墓坑より出土した磁器片（第19図）は高台部が付く染付皿の底部である。内面底部には慈姑（くわい）の葉と思われる植物が白気た藍色で描かれている。皿の復元口径は約14cmである。

棺内に埋納された遺体は、埋葬年代が古い時期であるため殆んど消滅しており、15基の墓坑のうちNo.4とNo.13の2基の墓坑より僅かに骨片と大臼歯が認められたに過ぎず、被葬者の性別、年令等の判別はできなかった。

5. 墓穴掘り（いけほり）に関する習俗

人が亡くなると葬式組（ソウレイ組）はすぐにその分担された仕事に着手する。墓穴掘りもそのなかの重要な仕事であり、埋葬時の午前中より作業にかかるが、栫地区には墓掘りに関して興味ある習俗が残っている。

作業が進んで午前中に穴を掘り終えても、棺を埋葬するまで決してそのまま放置しておいてはいけないというのである。何故なら、山に住む狐が墓穴を見に来て、穴が浅いと埋葬後死体を掘り返し持ち去るからだという。

このため午前中墓穴を掘り終えた時は、墓穴の周囲に杭を打ち、それに土あげ用の籠の網をゆわえ、この籠の中に鍬をひとつ入れ、まだ作業中のような状態をよそおう。これを見た狐はこれ以上深い穴になるならとても掘り返して死体を盗めないと観念し、悪さをしないという訳である。

籠のなかに鍬を入れておくのは、金属の金気が悪霊の侵入を防ぐからである。とくにこの栫地区には昔から狐の出没がはなはだしく、地元の人々の口に、お菊狐やズメキ道庵といった狐の名前が度々登場する。

勧請の時期は新しいと思われるが、草場城の出丸部分とおもわれる丘陵突端部の古墳（宮原町指定史跡）上には、稲荷大明神の小さな祠が祀られている。毎年3月18日には、祭が行われ当地区での稲荷信仰の厚さを物語っている。

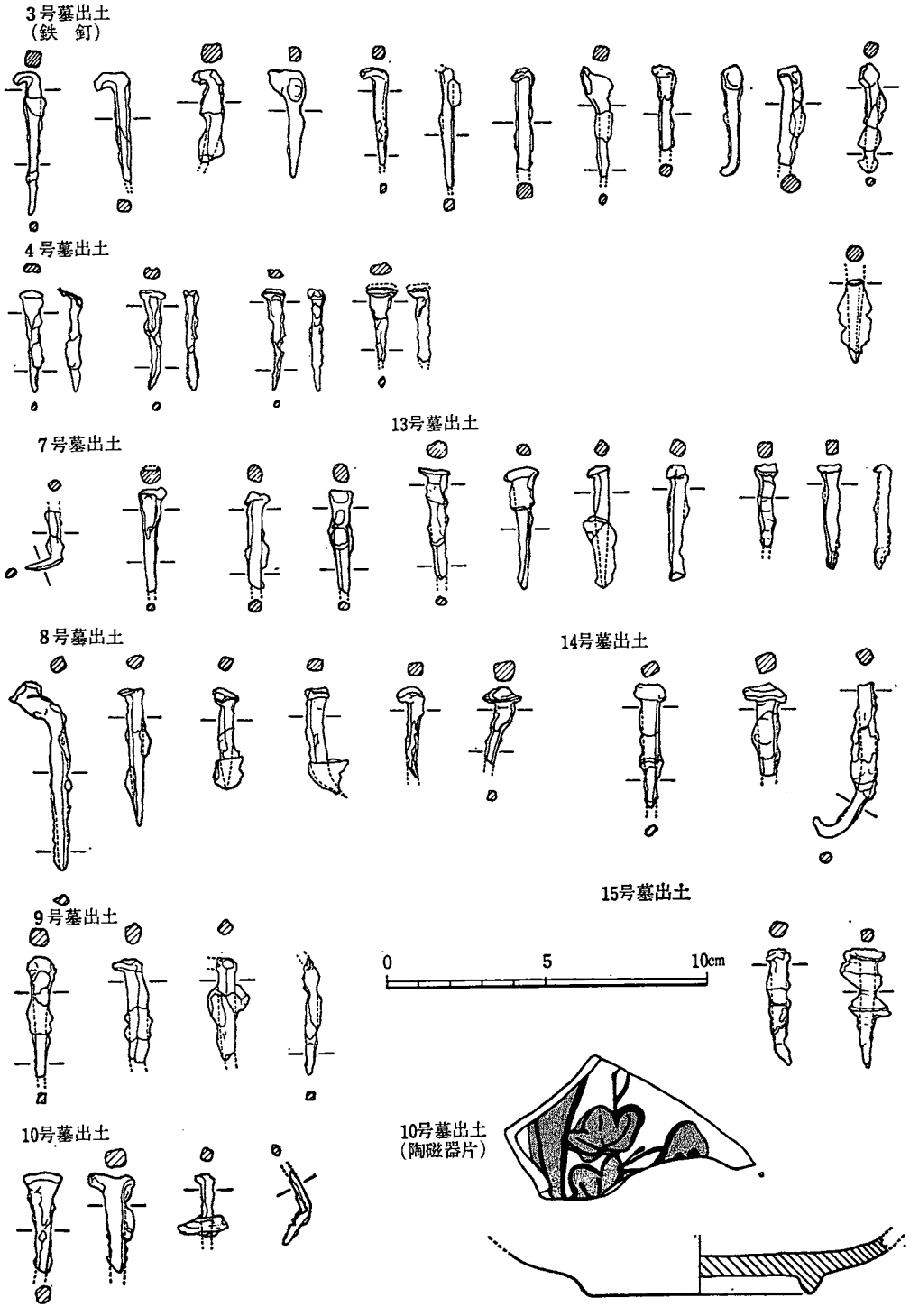
さて、いよいよ墓穴に棺を埋葬する時、棺上の中心部に青竹を立てておく。そして無事埋葬が終り土饅頭を盛り立てた後、その竹で土饅頭をいぐり、野辺送りの道々燃して来た藁たばの藁灰を埋め込むという。この行為が何を意味するのか不明であるが、後で墓石等を建てる際の目印としたものかとも思われる。

表2　おさき墓地墓坑一覧表

No.	墓坑の形状 長軸	短軸	深さ(現表土下より)	方向	かたち	人骨の有無 保存状態
1	104cm	96cm	(73) 現在62cm	N12°W	方形	無
2	90cm	82cm	(66) 56cm	N 0°	方形	無
3	104cm	102cm	(98) 86cm	N 4°W	方形	無
4	80cm	76cm	(111) 99cm	N16°W	方形	有（大臼歯1）
5	(東西) 100cm	(南北) 107cm	(80) 68cm		円形	無
6	(東西) 76cm	(南北) 75cm	(73) 59cm		円形	無
7	124cm	114cm	(138) 126cm	N14°W	方形	無
8	105cm	98cm	(87) 67cm	N20°W	方形	無
9	94cm	87cm	(113) 93cm	N 2°W	方形	無
10	90cm	81cm	(126) 104cm	N17°W	方形	無
11	(東西) 110cm	(南北) 105cm	(90) 68cm		円形	無
12	115cm	100cm	(126) 100cm	N 4°W	方形	無
13	103cm	103cm	(118) 108cm	N30°W	方形	有（人骨2片）
14	104cm	96cm	(90) 60cm	N 4°W	方形	無
15	78cm	70cm	(82) 72cm	N 2°W	方形	無

埋葬状態	副葬品の有無および出土遺物	地目と旧土地所有者	備考
座棺		果樹園（蜜柑畑） 山本正俊氏	墓坑内に角礫5個 蜜柑穴と重なり一部破壊
座棺か		〃	小児用か
座棺	鉄釘13本	〃	長さ30〜40cmの山石を利用した、墓石の基礎部を発見
座棺	鉄釘4本	〃	小児用か
桶か	なし	〃	
桶か	なし	〃	小児用か みかんの植樹の際の掘削で一部破壊
座棺	鉄釘5本	〃	
座棺	鉄釘6本	〃	
座棺	鉄釘4本	〃	墓坑内より角礫3個
座棺	鉄釘4本 磁器破片2	〃	皿は染付 棺材用木片一片出土
桶か	なし	〃	
座棺	五輪水輪部1	〃	土坑の西側の一辺から直角に長さ110cm幅25cm深さ9cmの用途不明の溝が東へ走る。 この墓坑上には五輪塔が立っていたものと思われる
座棺	鉄釘6本	〃	
座棺	鉄釘3本	〃	
座棺	用途不明鉄釘2本 鉄片1個	〃	小児用か

第19図　　おさき墓地出土遺物



ま　と　め

おさき墓地の設置起源は明らかでないが、残された五輪塔の型式・その他から16C後半頃であろうことが推定される。

記銘のある五輪で一番古いのは、寛永18年（1641）に建てられた直翁宗王居士（法名）という人の塔で今から約338年前のものである。細川氏の肥後入国が寛永9年（1632）であるので入国10年後の建立である。続いて、慶安元年（1648）の花翁宗園禅定門の五輪が建てられている。この二基は、共に五輪の形式をとっているが、中世の五輪と異なり、各輪に地水火風空等の文字が刻み込まれ、型式的にも五輪の終末期の色彩が濃く表われている。

また4年後の承応元年（1652）の釈祐心の墓（第9図№36）に到ってはじめて、現在でも見られるような墓石が見られる。しかし、この墓石もよく見ると、今のものと違い、先が将棋の駒状を呈する奥行の浅い背丈の高い墓石の型式をとっている。おさき墓地で一番新しいものは、享保9年（1724）の釈尼西童信女の墓石（第9図№45）で、これを最後におさき墓地は終りを告げ、その後の埋葬はおさき墓地南へと移っていく。

この墓石に前後する三基の側面には、いずれも吉田氏という追刻が施されているので、吉田氏を名乗る被葬者の子孫が後で追刻したものと思われる。正徳の頃に吉田姓を持っているところから、当地区の地侍であったと思われるが、現在吉田姓を名乗る家は栫地区にはないので、子孫が途絶えた家であろう。

墓石調査の後、おさき墓地の発掘調査を開始し、路線にかかる部分の排土を行ったところ、15の墓坑（遺体を葬った穴）が現われた。しかし、おさき墓地の路線にかからない部分にある墓坑を含めると、元来30近くの墓坑の存在が予想される。

今回発掘した分は、全部土葬で火葬は見られなかったが、残された五輪の地輪部に納骨用のくり込みが施されているのもあるので、火葬墓も若干存在したことが考えられる。発掘された15の墓坑は、方形が11、円形が4で方形が主流を占めている。墓坑に埋葬された遺体は、腐蝕が激しく僅かに2つの墓坑に歯と骨片が残るのみで被葬者の年令性別等は一切確認できなかった。ただ、各墓坑から腐蝕した鉄製の角釘が数本ずつ出土しているので、直に遺体を地下に埋めたのではなく、木製の座棺に納め葬ったことが判る。副葬品はなかったが、№10墓坑から埋葬の際、紛れ込んだ明代の染付と思われる皿の破片が、二片出土している。

墓石調査と発掘調査の結果から、おさき墓地について次のようなことが考えられる。

おさき墓地の15の墓坑には、ひとつも重なりが見られず、ほぼ整然と掘られているので、墓石の年号から知られるとおり、16世紀末頃から17世紀にかけての短期間に営まれた墓所であることがわかる。このため、一般の墓所に見られるように、古い墓を無縁仏として処理すること

が出来ず、後に続く埋葬が不可能となり、墓所は送電線の立つおさき墓地南へと移動し、さらに中世よりやはり墓所として使われていた反対側の天神墓地へと移動したようである。

おさき墓地で見られた近世初期の墓坑と中世の墓坑とを比較してみると、若干の変化が起っていることに気付く。中世に見られた長方形や大型の墓坑はなくなり、一辺の短い正方形の画一的な墓坑となっているのである。また、中世墳墓にあった方形の大規模な盛土はなくなり、現代にも見られる小さな土饅頭に近い盛土となることが、墓坑の配置状況等から確認された。葬られた人は栫地区在住の地侍以下の庶民であり、墓石をもつのは、その一部で大半は木製の墓標のまま、角石塔に立て替えられることもなく朽ち果ててしまったものと推定される。このように、おさき墓地の調査結果は、いままで知られていなかった中世墳墓から近世墓への墓制の移り変りを知る上での貴重な資料となった。　　（桑　原　憲　彰）

付　　論

付論執筆担当者

「中山五輪塔遺跡」	県文化課技師	桑原憲彰
「福富（西園祭祀）遺跡」	県文化課技師	桑原憲彰
「御船塚、中近世墓地遺跡」	県文化課主幹	上野辰男
	熊本市文化課長	鈴木　喬
「北牟田塚遺跡」	県文化課臨時調査員	田添夏喜
「上広西屋敷近世墓地遺跡」	県文化課技師	桑原憲彰

1. 中山五輪塔遺跡（若殿塚）

わかとづか

1. 位置と環境

この遺跡は熊本市小山町中山にある。5万分の1地形図「御船図幅」の西から4.5㎝、北から0.5㎝のところに位置し、全国遺跡地図（熊本県）によれば「№168 散布地中山遺跡」として記載されているところである。

この一角に、若殿塚（わかとづか）と呼ばれる1ha余の五輪塔散乱場所（第20図）がある。現在荒地となっているが、この場所が九州縦貫自動車道の敷地にかかるため、道路新設に先立ち昭和45年暮から46年にかけて、約1ヵ月の日数を費し発掘調査を実施した。以下はその調査の略報である。

現在遺跡の中心部と推定される部分に、幅4㎞の工事用仮設道路が県道小山戸島線より引込まれ、遺跡を二分しているため、道より東側をA区、西側をB区として、各々にAトレンチ、Bトレンチを設定、遺跡のアウトライン把握のための試掘とした。

2. 旧地形の復元

調査にあたり、A区中央部のほぼ南北にかけて、長さ25㎞、幅80㎝、深さ130㎝のAトレンチを掘ったが、その結果トレンチ断面の土色の変化等から、少なくとも1層（黒色土）、2層（褐色土）、3層（赤色土）の三つの層に分けられることが判明した。またその断面中2層目の黒い落ち込み部分では、後に命名した№7、№9の墓坑および、地表より約170㎝の深さを持つ濠が次々と姿を表わし、後日の調査の目安となった。

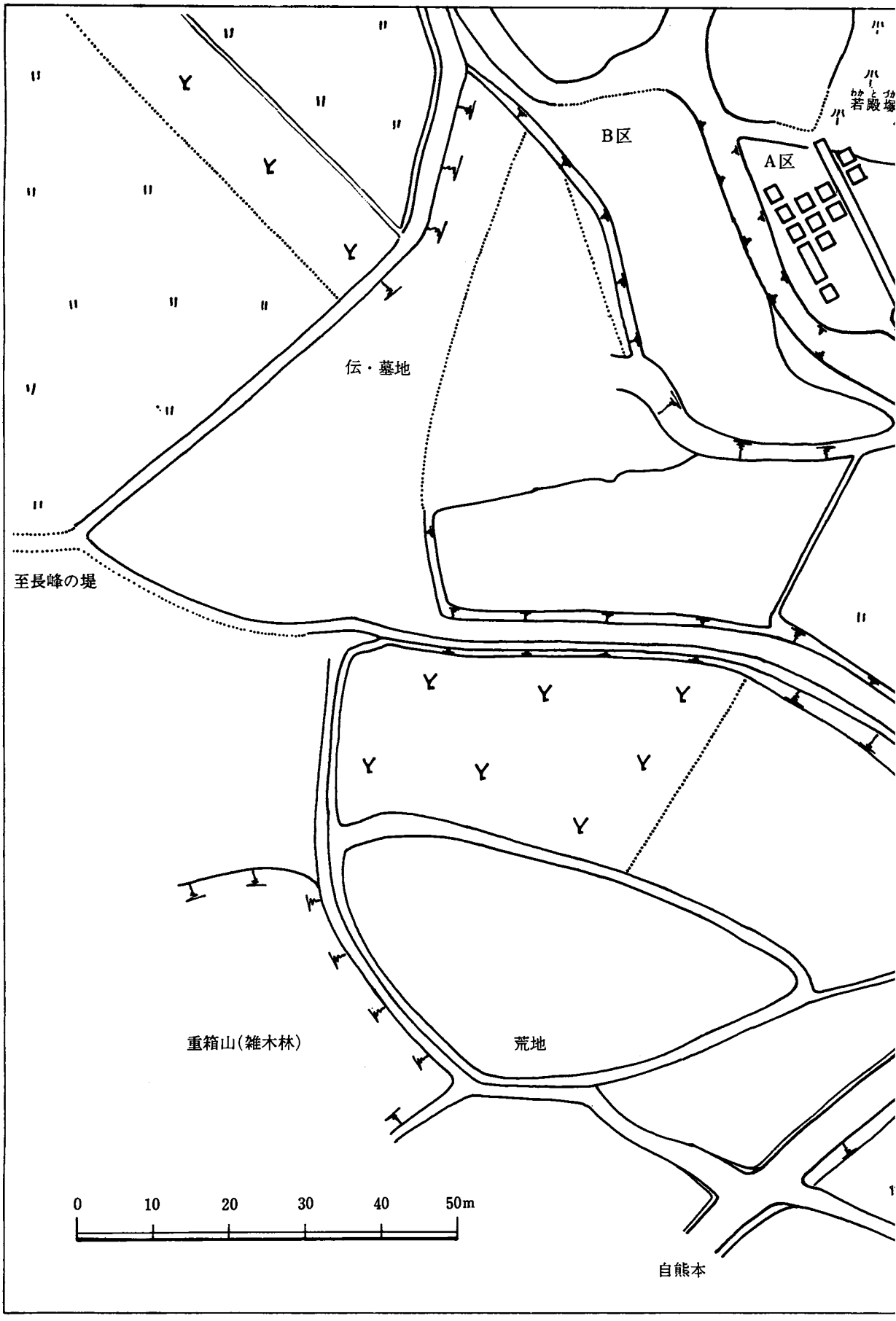
またA区（五輪塔散乱地区）と東側畑とは、約130㎝程度の土手による段落があるため、東側畑の一角を削り土層の変化を調査した。260㎝の深さに掘りさげ精査した結果、先に掲げた1. 2. 3. 層の上に更に現表土（黒色土）、それに続く中間層、赤土混り褐色土層が乗っていることが確認され、合計6層にわたる土色の判別が可能となった（第25図参照）。約100㎝の厚さを持つ上部三層は、荒地の開拓が行われた際、平坦部の畑を造るための盛土で、それ以前の表土はA区表土より続く第1層であり、このことはこの1層（黒色土）内に弥生土器等が含まれ、樹根跡等が2層（褐色土）を貫いている点からも裏付けることができる。

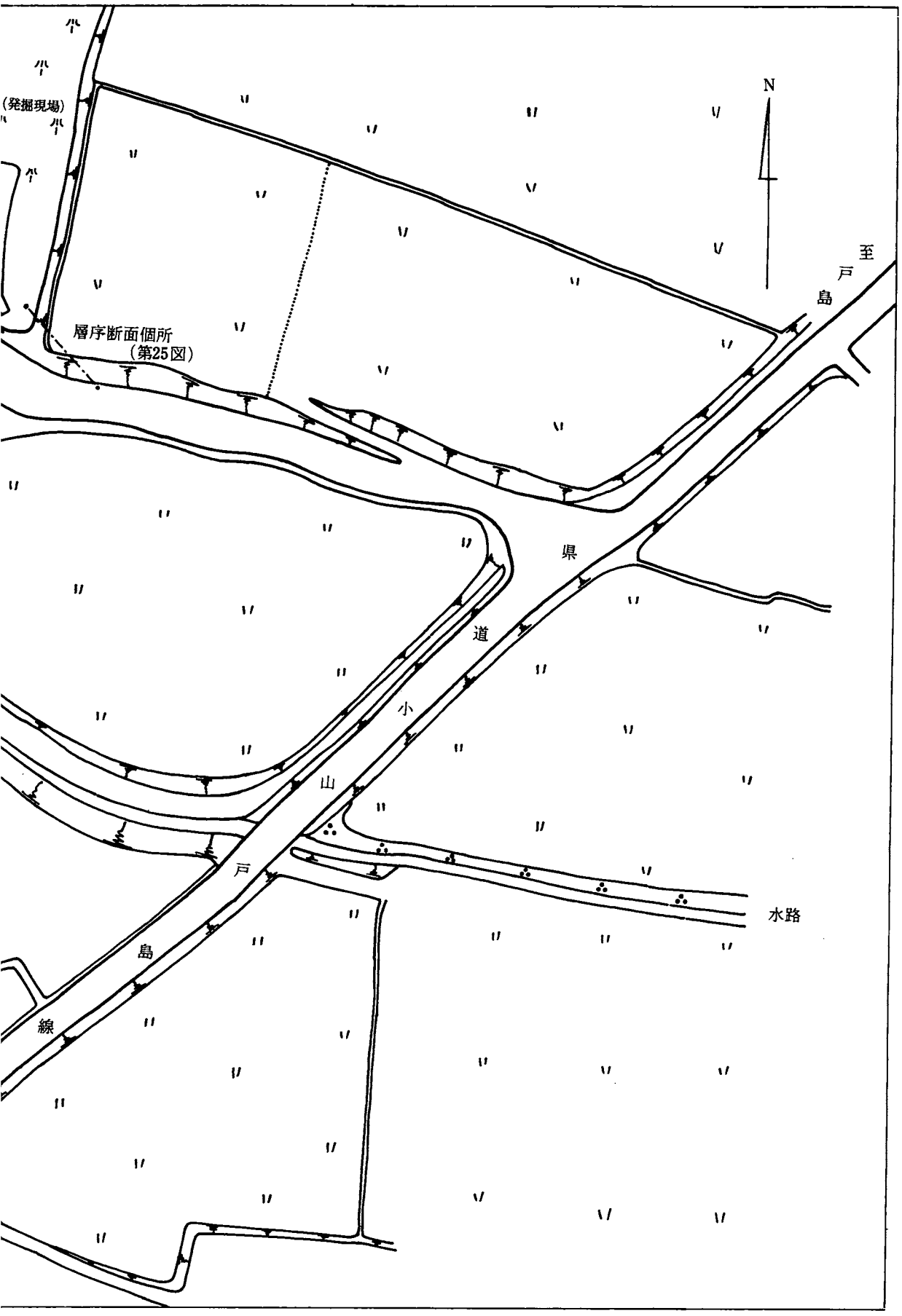
これらの事実から元の地形を復元してみると、A区と上段畑との間の段落ちは以前はなく、

表 3　中山五輪遺跡墓坑一覧

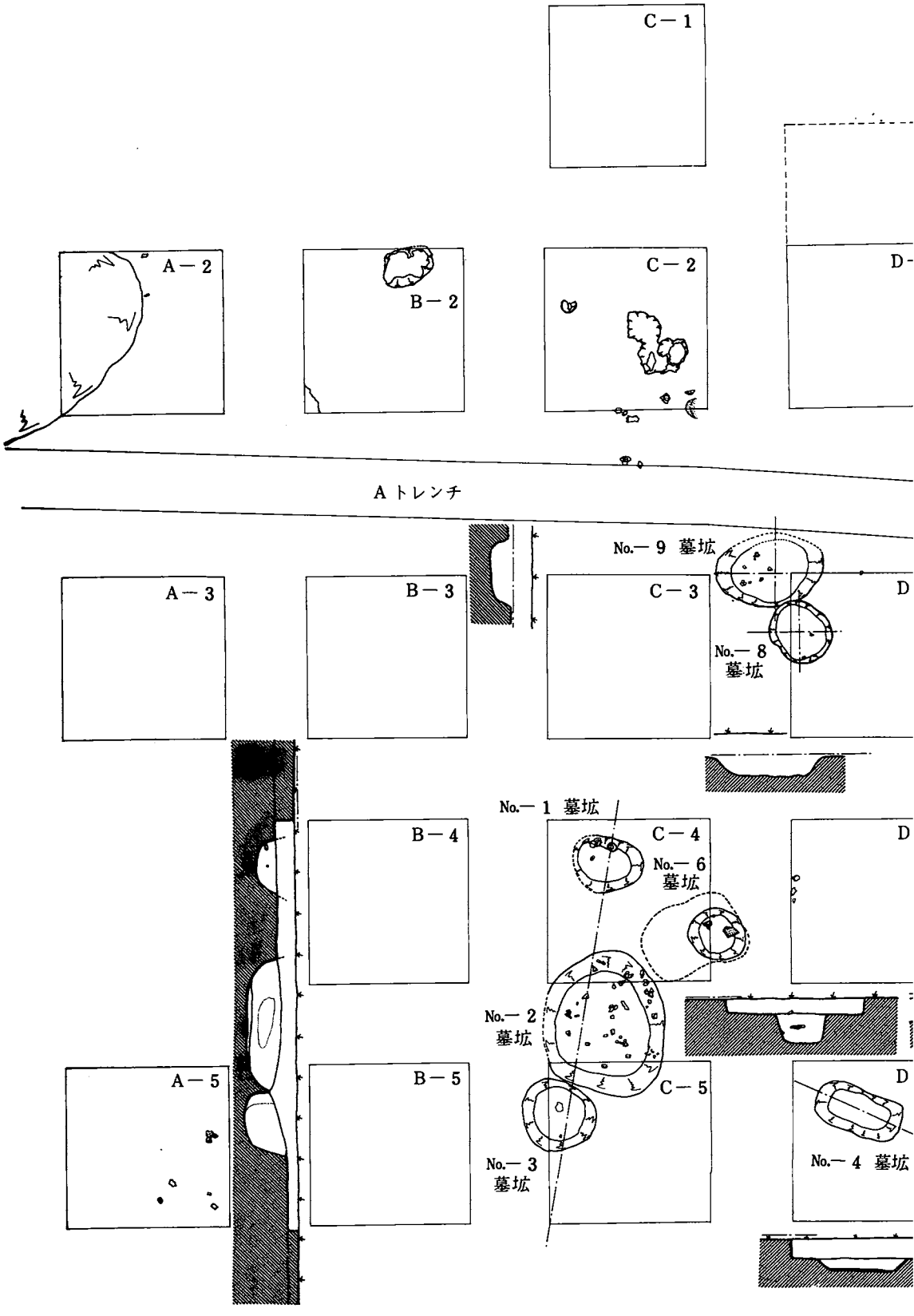
墓坑番号	地区	墓坑（土坑） 直径 短径・長径	深さ	形状	埋葬人骨の有無	葬送用具および副葬品	備考
1	A	70× 85cm	—50cm	やや楕円	有・骨片	燈明皿 3個	燈明皿を2個合わせ蔵骨器として使用
2	A	150×177	55	楕円	有 歯・骨片多数	燈明皿片 多数	火葬用土坑と推定、焼土木炭片多量出土、土坑は一番大きい
3	A	90× 90	65	円	無	無	墓坑内全部真赤な焼土・木炭・灰がつまっていた
4	A	50×110	40	長方形	無	無	
5	A	150×155	63	円	無	無	
6	A	64× 70	55	円	無	無	布目瓦（平瓦）2片、須恵器破片1片、黄褐色土が墓坑上を覆う
7	A	90×156	70	楕円	有・人骨片	無	13の墓坑中一番深い
8	A	66× 80	50	やや楕円	有・人骨片	燈明皿片	上部より木炭出土、底部は打ちかためられたような土塊
9	A	90×132	52	楕円	無	土師器片（11片）	〃 〃 一部Aトレンチでカット
10	A	68×110	48	楕円	無	無	木炭3片、墓坑周辺より瓦器片、土をたたきつけた床確認
11	A	93×123	50	楕円	有 人骨片・歯	燈明皿片（1片）	
12	A	100×104	46	円	無	燈明皿片（4片）	
13	A	95×150	64	楕円	有・人骨片	無	土葬（?）一部東トレンチによりカット
Aトレ拡張部	A	形状不明	?50	不明	有・人骨片	無	E—2グリッド 焼土・灰
Bトレ拡張部	B	形状不明	?50	円（?）	有・人骨片	燈明皿片	
		平均	52.8				

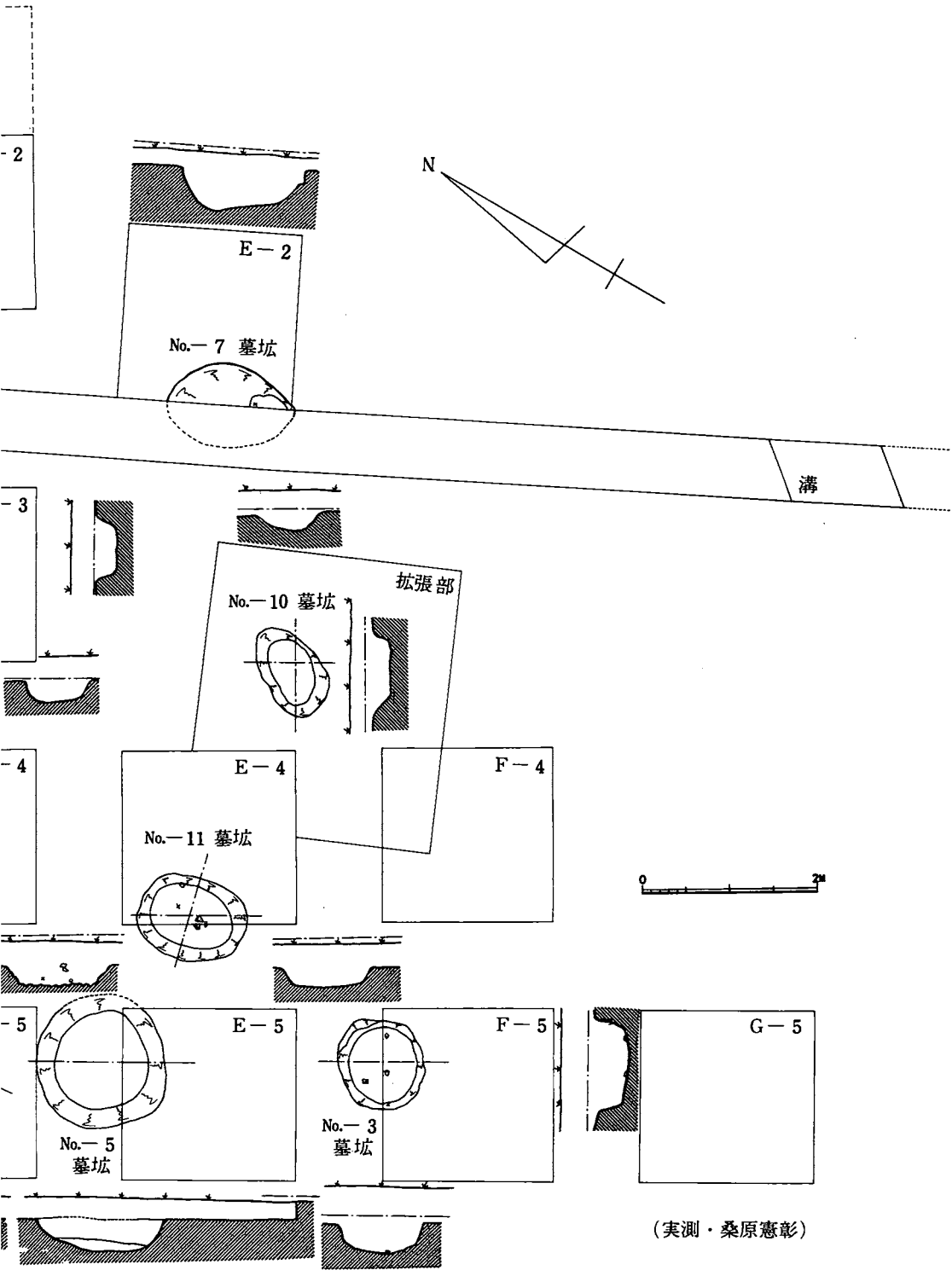
第20図　中山五輪塔立地地形図




(発掘現場)
N
至
戸
島
層序断面個所
(第25図)
県
道
小
山
戸
島
線
水路

第21図　中山五輪墓坑平面図（A区）





（実測・桑原憲彰）

現小山地区のある付近を頂点に、南面になだらかな斜面を描く地形で、その末端部に当遺跡が立地されていたものであろう。なおA地区北側は現在竹藪となっているが、一部には濠の跡らしきものが残存している。その機能および時代共に不明である。また東トレンチの末端に現われた深さ170㎝の落ち込みは、第1層が2層をカットし第3層の赤色土に掘り込まれている。この部分は土全体が柔らかく、黒色土と赤色土の境がはっきりしていて、古い時期の落ち込みでないことを示している。大正年間山林を開いて畑地とした際の埋め込みか、または、以前熊本へ通ずる旧道があったと伝えられるので、その跡とも考えられるが出土遺物もないので確証はない。

B区についても、長さ10㎞、幅150㎝のトレンチを設定し、土層を調査（第26図・(2)）したが、第一層の上に約20㎝の客土が乗っているだけで、外はA区の土層と同様であった。

3. 遺　構・遺　物

A地区の五輪塔の散乱する荒地300㎡の表土（1層）を約30㎝にわたってはぎ取ったところ、大小13個の墓坑が発見された（第24図参照）。これら13の墓坑の特色は表3の通りである。

13の墓坑の殆んどから僅かな人骨片と土師系燈明皿破片が検出された。No.1の墓坑(図版12)には、直径9㎝の燈明皿二個を合わせた中に小指程度の人骨が納められていた。また黄褐色土で覆われたNo.6墓坑（図版13）からは人骨は検出されず、大小二片の布目瓦片が発見された。近くにある小山窯跡等からの混入であろうか。いかなる意味を持つものであるか不可解である。

150㎝×177㎝の直径を持つNo.2の墓坑は他の墓坑に較べ際立って大きい。深さは地表下60㎝で他と変わらないが、墓坑内より多量の木炭と焼けた人骨片および燈明皿破片が検出された。恐らく火葬用の土坑であろう。多量の木炭と焼けた人骨片、土坑底部の真赤な焼土は、火葬が一回限りのものでなく、数回にわたって営まれたことを物語っている。このNo.2に一部接して存在するNo.3墓坑にはNo.2よりかき出したと推定される焼土や木炭が多量につまっていたが、これらも数回にわたる火葬を裏付けるものであろう（第21図参照）。

以上の事実から当遺跡の一般的傾向として次のことが推察できるのではなかろうか。墓の大きさはNo.6の64㎝×70㎝が一番小さく、No.2の150㎝×177㎝が一番大きい。墓坑の形は、楕円もしくは円形をなし、地表からの深さは平均53㎝である。埋葬の方法であるが、墓坑の大きさおよび深さから考えると、この場合土葬は不可能である。焼土、木炭片、灰等の出土から見ると、荼毘に付した後、火葬骨は容器に入れず墓坑に直に埋葬したものと考えられる。A区内で火葬した場所と思われるのは、多数の骨片と焼土木炭の残るNo.2墓坑とAトレンチ拡張部の2ヵ所である。また各墓坑から出土する人骨が僅かで、骨片に近いものであることは、長い歳月による腐蝕の結果ではなく、最初から少ししか埋葬しなかったためであろう。この事はNo.1墓

坑の埋葬状態からも裏付けられよう。また埋葬にあたっては殆ど葬送用具として燈明皿を使用しているようであるが、№1墓坑の蔵骨器（第27図・1～3）として使用された以外は、すべて破損しており、破片としてしか取りあげられなかった。その他今回の調査では墓坑内より副葬品の出土は見られなかった。

4. ま　と　め

以上地下遺構について述べてきたが、地上の遺物としては五輪塔がある。遺跡一帯に散乱する五輪塔の各部を一か所に集め実測（第22～23図）を行ったが、風空輪20個、火輪6個、水輪4個、地輪3個、泥板岩質板石1個、上質の凝灰岩よりなる宝塔の相輪部1個、他に直径10～20cmの円礫20個が確認された。今回の発掘調査により出土したものでなくすべて地上に散乱していたものである。これらの数から推定すると、当時現位置を中心として、約20数基の五輪塔と宝塔、板碑等が存在していたものであろう。塔に記名がないため誰の墓(供養塔)であるか不明であるが、大正時代の初め頃山林であった当地を開墾した際、錆びた太刀がまとまって出土している事などから推察すると、武士の墓で合戦等による戦死者を葬った可能性も考えられる。

この付近は託摩六箇荘のうち小山郷にあたる場所であり、鎌倉時代からこの地方の地頭職であった早岐、小山氏等の支配するところであった。当遺跡すぐ横にも昔から墓地と伝えられる場所もあり、或いはこれら一族関係の墓所であったのかもしれない。しかし墓所とはいっても、墓坑内に骨片程度のわずかな量の骨しか納めていない点では、これらの五輪の塔は墓というより供養塔的な性格が濃厚である。

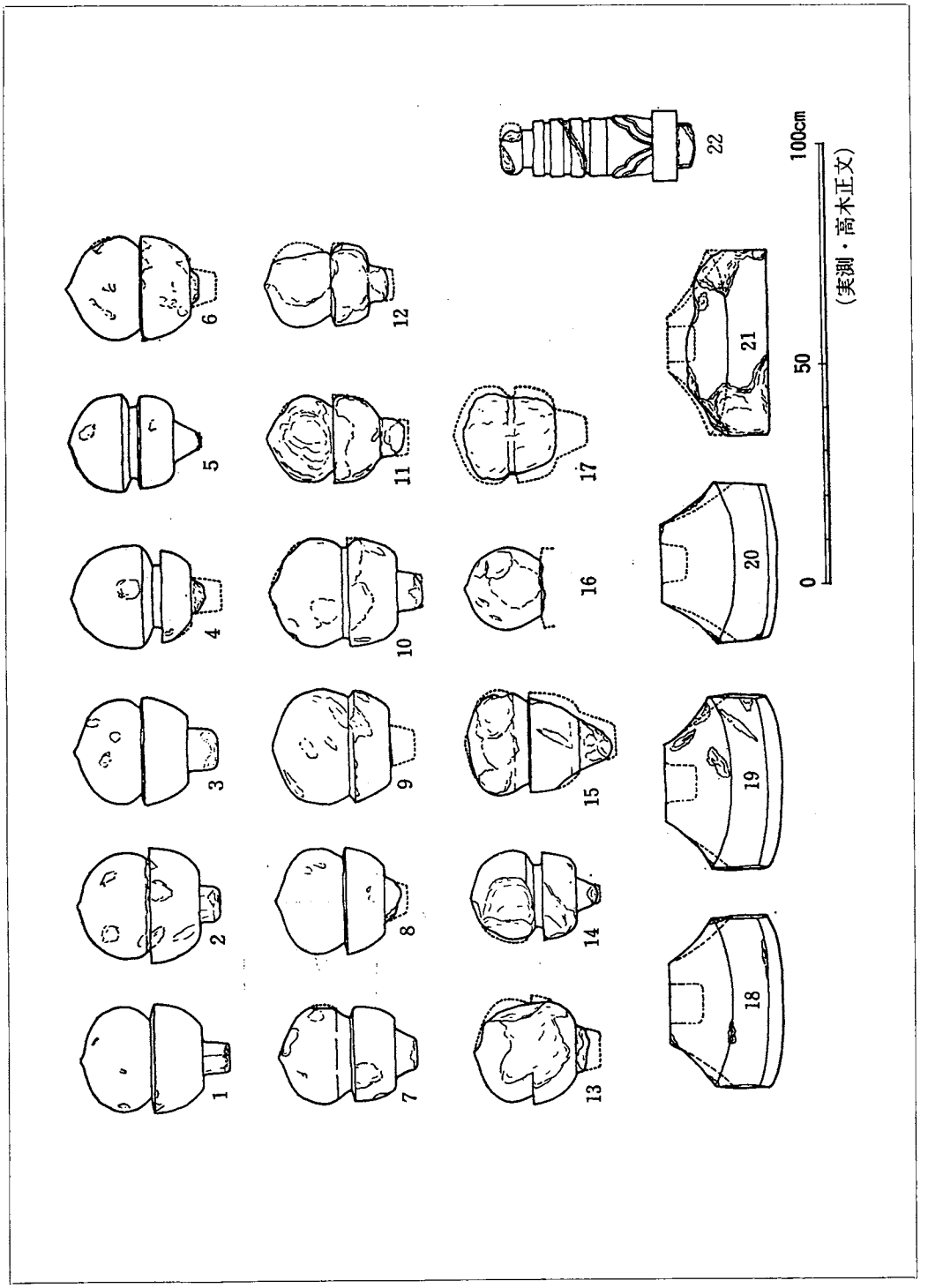
現在、両墓制の起源は戦国末期頃までしか遡り得ないといわれているが、両墓制における詣り墓的なものとも考えられるし問題点が多い。この遺構の成立年代であるが、五輪塔の形式等から推定すると、室町中期から末期にかけて営まれたものとみてほぼ間違いないように思われる。

その他先行文化を物語る遺物としては、各墓坑の合間を縫うようにして、第2層上面に甕底部、器台、焼け石など数は少ないが出土し、住居跡を推定せしめる床面の一部が残存していた。しかし中世墓坑成立時と、大正時代の開畑の時と2回にもわたる破壊を受けているため、遺構としては確認できなかった。ただ上段畑の県道沿いの叶丸（かのうまる）遺跡から、先年多数の弥生土器の出土が上野辰男氏により報告されているので、それらの遺跡と関連づけられるものかもしれない。また五輪塔の時期に伴うものであろうか、陶器2.3片、刀のなかごと思われるさびた鉄片等も出土している。

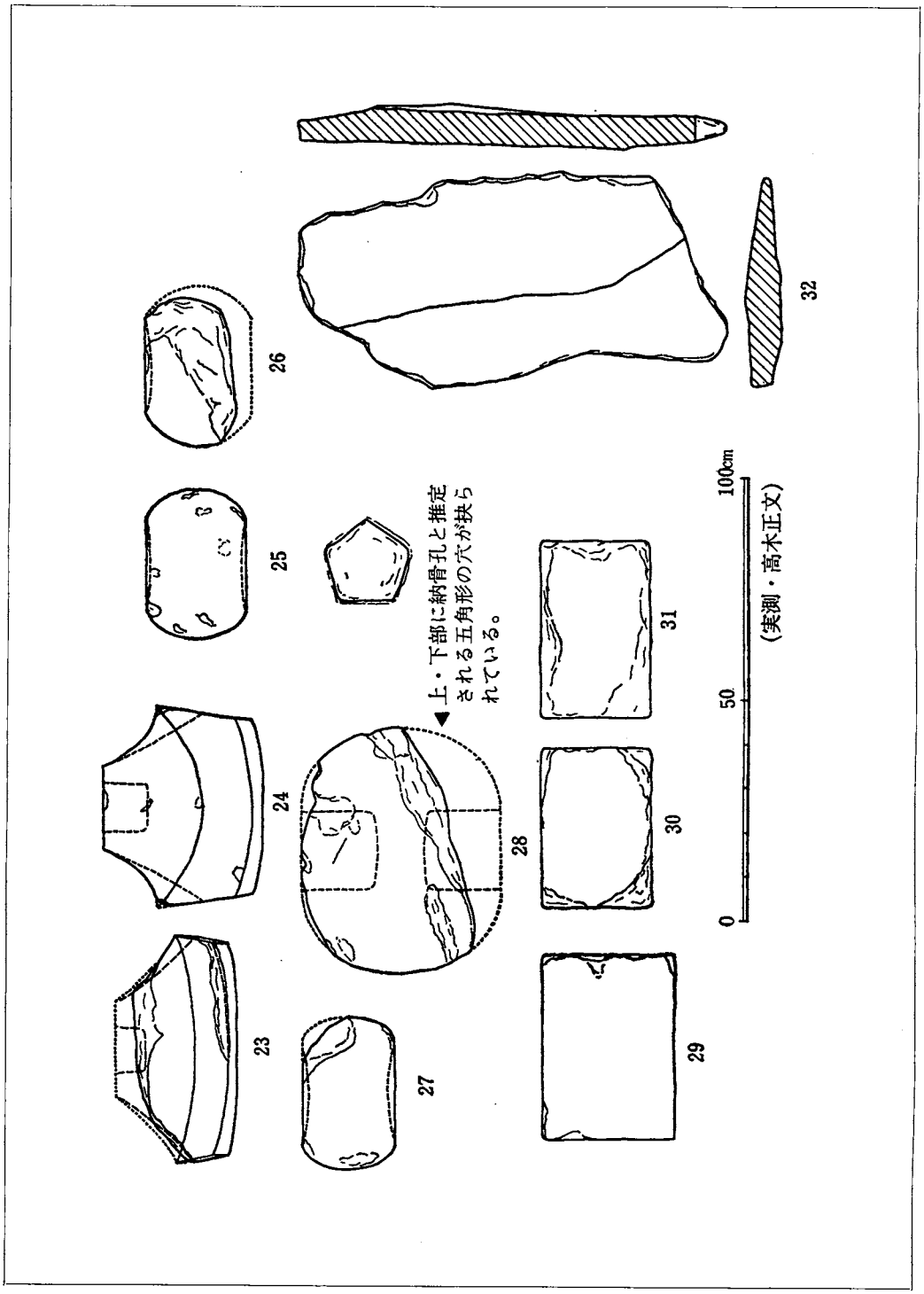
墓地関連遺跡としては、近くの小山山（おやまやま）の東南部で発見され、数年前熊大医学部や上野辰男氏が調査した御船塚（第32図）がある。方形の墳丘を持つ大小30基の墳墓は中世から近世にかけて築造されたものと推定されている。

（桑　原　憲　彰）

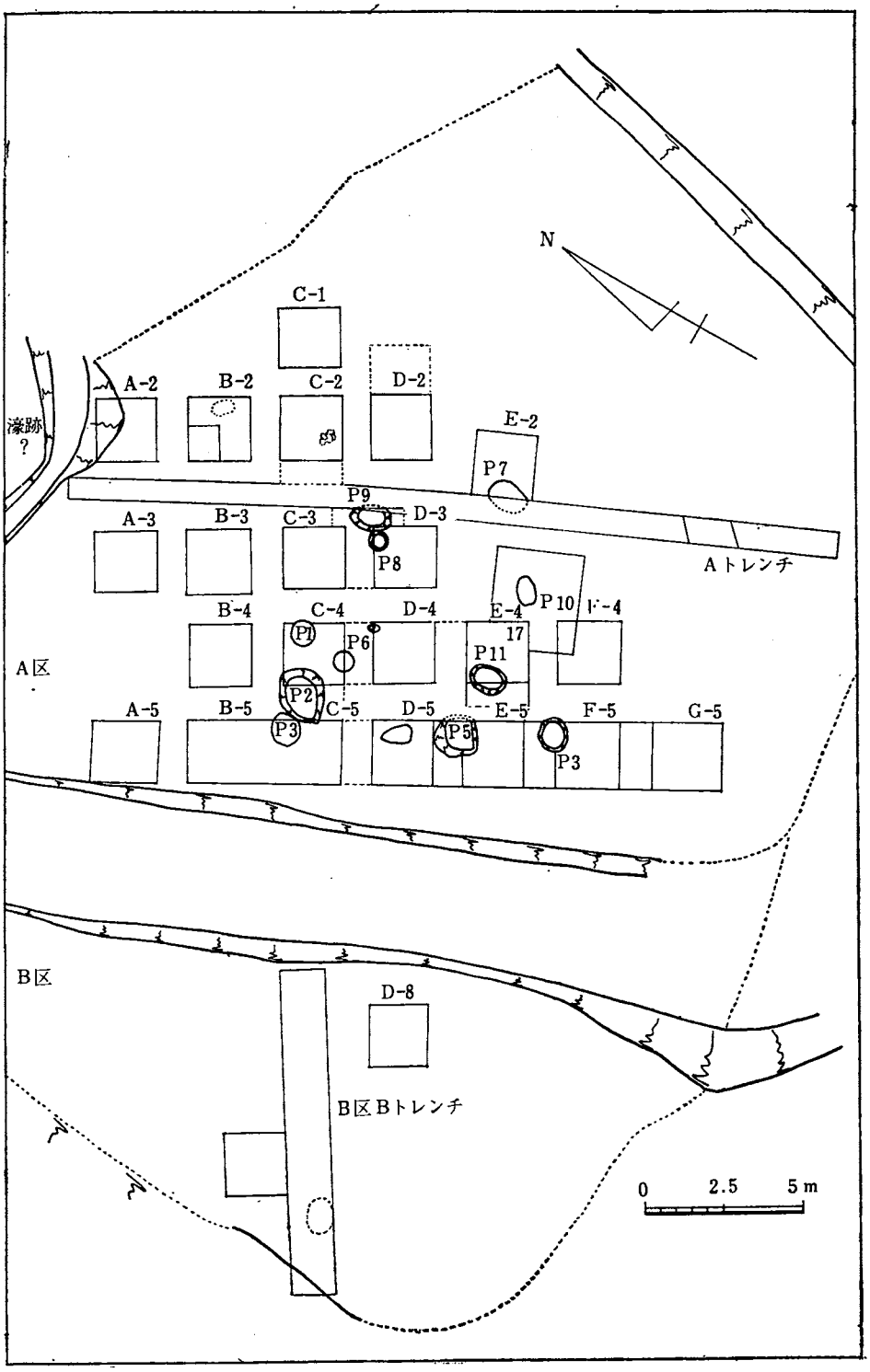
第22図　　中山五輪散乱石造遺物(1)



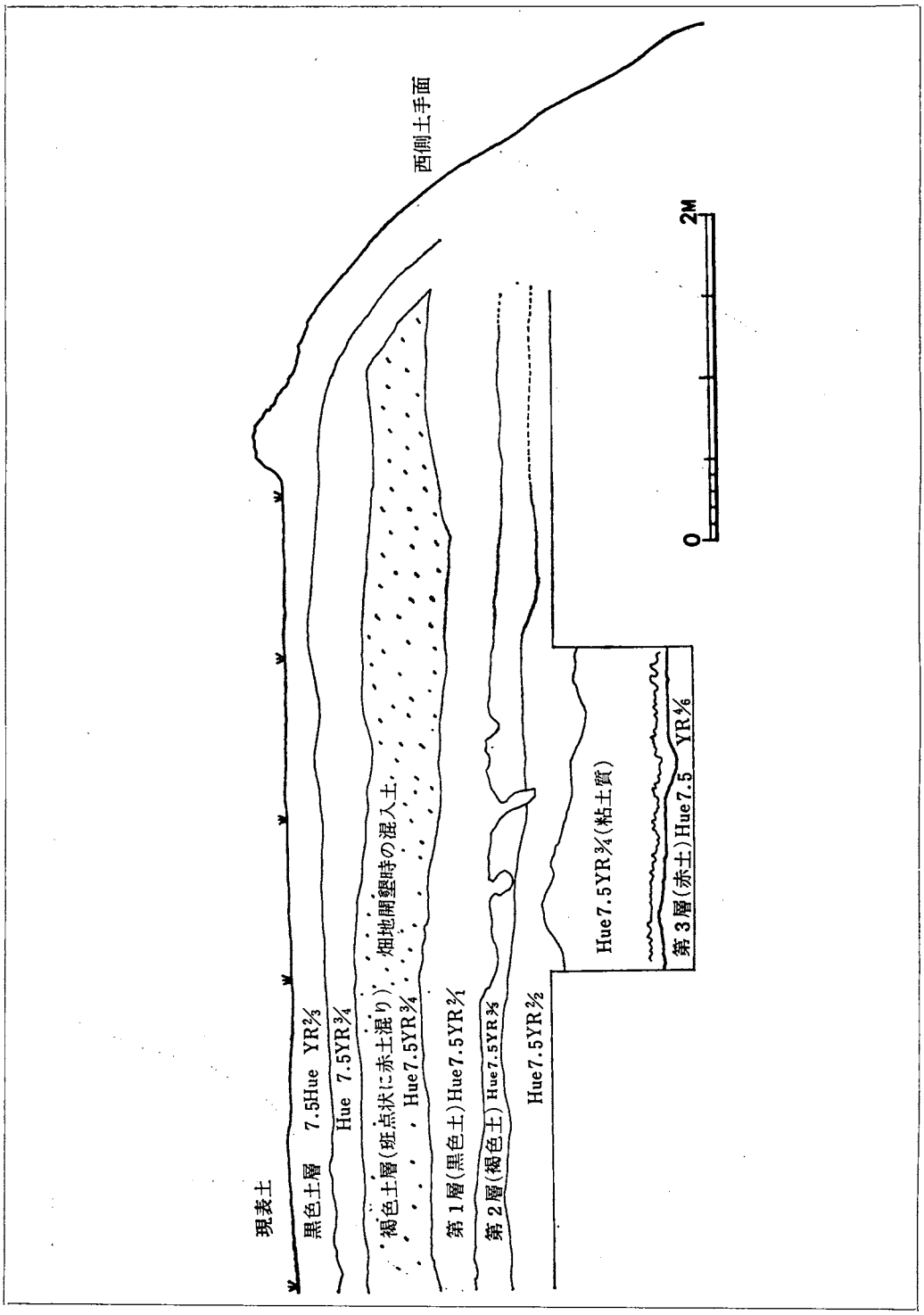
第23図　　中山五輪散乱石造遺物（2）



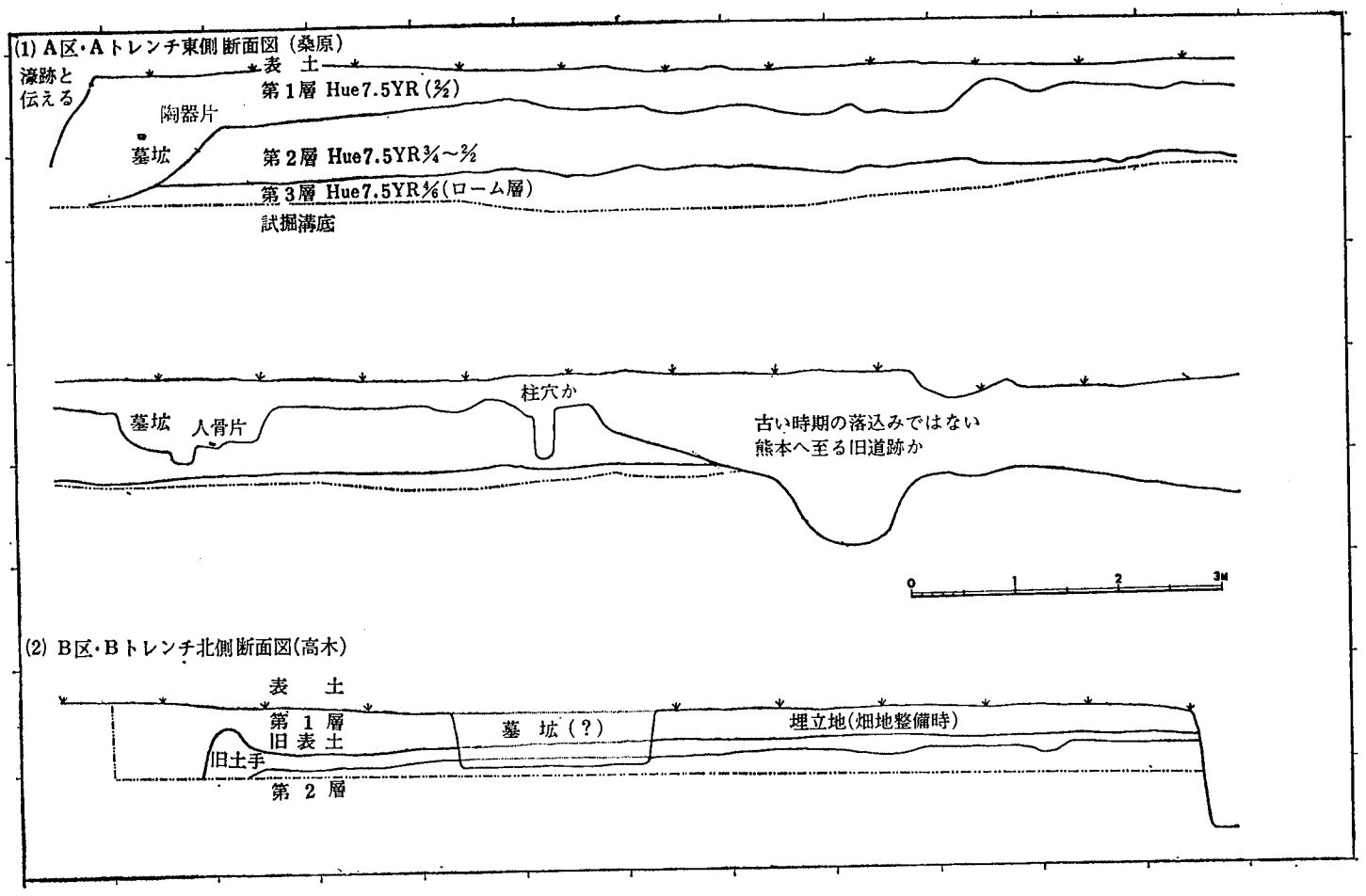
第24図　　中山五輪遺跡グリッド設定図



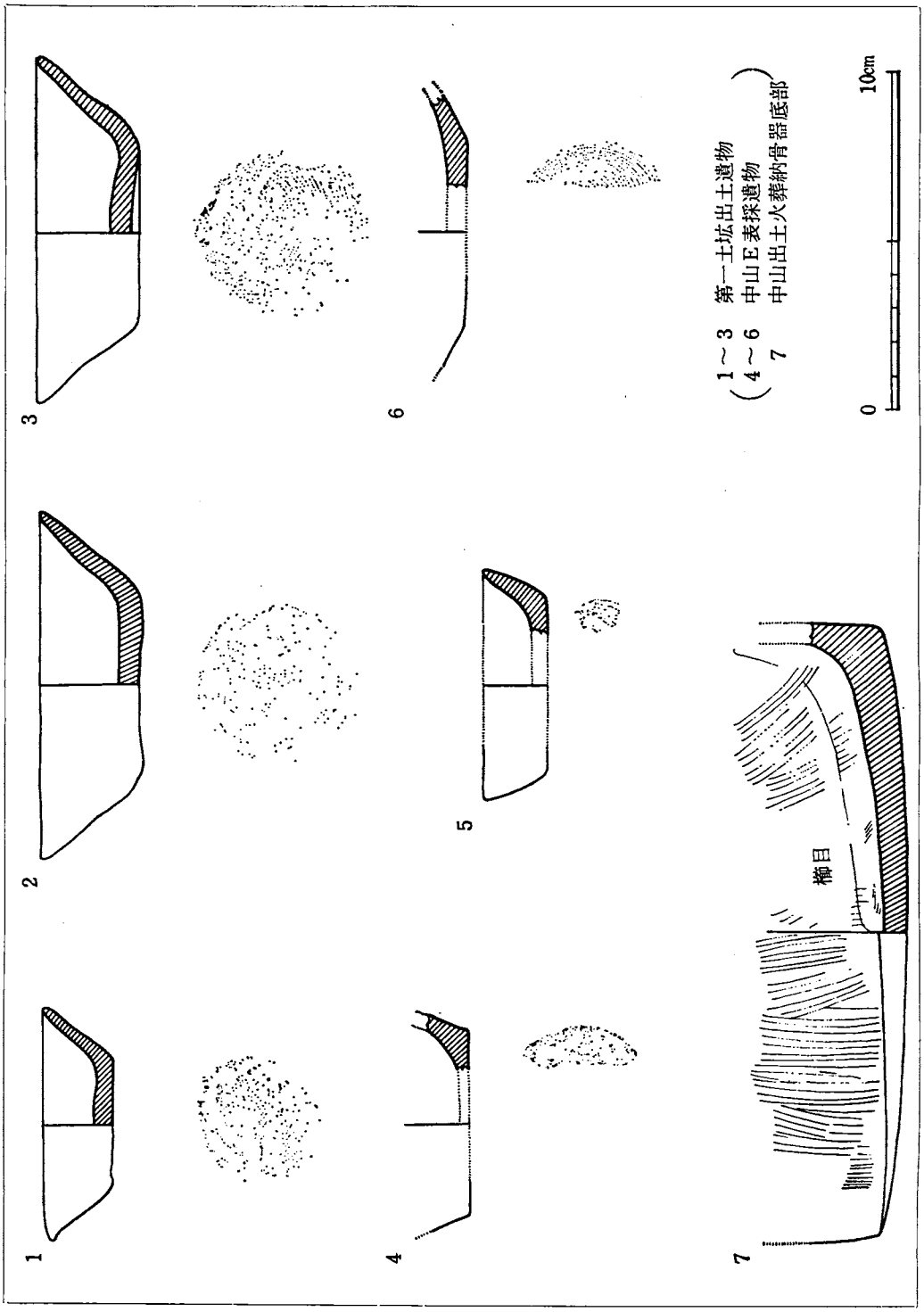
第25図　　遺　跡　層　序　図


西側土手面
2M
0
現表土
黒色土層　7.5Hue　YR2/3
Hue　7.5YR3/4
褐色土層(斑点状に赤土混り)，畑地開墾時の混入土，
Hue7.5YR3/4
第1層(黒色土)Hue7.5YR2/1
第2層(褐色土)Hue7.5YR3/3
Hue7.5YR2/2
Hue7.5YR3/4(粘土質)
第3層(赤土)Hue7.5　YR4/6

第26図　遺跡試掘溝断面図



第27図　　中山五輪遺跡出土遺物



2. 福富(西園祭祀)遺跡

1. はじめに

この遺構は昭和47年12月九州自動車道敷地内にある福富遺跡の発掘調査中に、遺跡から20数m離れた個所より発見されたもので、奈良時代の竪穴住居跡の拡がりを確認するため設置したグリッドのひとつである№36に偶然、遺構の一部が引っかかったものである。現在の地目は畑地となっているが、昔は墓地であったと伝えられるところで、現に宝暦の年号を持つ墓石が畑の畦部分より発見された。また、調査終了後の九州自動車道掘削工事の際、道法のカット面に木製の座棺を納めたと思われる三基程の墓坑の落ち込みが確認された。

2. 地形と環境

今回、九州自動車道敷地内で発見された祭祀跡と思われる遺跡は、上益城郡益城町福富字西園にある。現地は縄文晩期の古閑遺跡の所在する台地の南側の水田内である。この一帯は牟田と呼ばれる湿田地帯であり遺跡は南下する妙見川が形成したと思われる微高地上に位置する。

この微高地上は、縄文時代頃から人々の生活の場となっていたらしく縄文早期の押型文土器をはじめ夜臼式土器、降って弥生土器、古墳・奈良時代の須恵・土師片が発見されている。とくに奈良時代頃には、かなりの集落が所在していたようで、今回の調査で造り付けの竈を持つ竪穴住居跡が数戸分発見されている。その後、中世時には寺院が存在していたようで遺構東側の町道路傍にはこの寺院と関連あると思われる板碑等も残存している。また、中世末頃から近世にかけては墓地として使用されていた。

現在、この微高地一帯は集落および畑地として利用されているが、この部分の層序は第一層（耕土）、第二層（褐色土）、第三層（黒褐色土）、第四層（黄色土）、第五層（黄赤色土）となっている。奈良時代の遺構も当遺構も第二層に掘り込まれているが、この第二層上面は畑地の整備時に失われている。

3. 出土遺構・遺物

発見場所は福富遺跡の一角である。表土を約20cm排土したところ、多量の木炭が検出され、

そのなかに土師質土器（燈明皿）が混っているのが確認された。

中世の墳墓の可能性が考えられるため発掘を進めたところ、第29図のとおりの遺構が検出された。遺構は第二層に掘り込まれており、主軸の長さが294㎝、短軸が154㎝の長方形を呈しており主軸の方向はN 28°Wを指している。

発掘当初は、中世時の寝棺であろうかと思われたが、表土より約40〜50㎝も掘り下げるとベースに達し墳墓ではないことが判明した。この長方形の掘り込みは全面多量の木炭塊で覆われていたが、掘込み部分の底の側壁部には主軸に沿って窪みが造られそのなかに直径10㎝程の炭化したくぬぎの丸木が残存していた。他の木炭塊も殆んどがくぬぎの炭化したものである。この長方形の三隅には直径18㎝、高さ4.5㎝程の土師質の皿が意図的に配置されていた。南隅には見られなかったが、遺構が比較的に表土より浅い個所にあることと、遺物包含層である第二層上面がカットされている点などから後で失われた可能性が強い。

この外、直径8㎝程度の小型の土師質皿は同掘り込みのなかより10個出土し、そのうちの9個までが北隅に集中して出土した。またこのうちの5個が上向きに、残りの4個が裏向きになっており殆んどが割れているため何らかの儀式の終了後、遺棄されたものと思われる。

この土師質の皿13個以外には遺物の発見はなかった。なお長方形の掘り込まれた底部は多量の木炭の出土にもかかわらず焼けておらず、一回限りの焚火であったことが判る。

4. ま と め

遺物、遺構の状況から、当遺跡が、生活遺跡でなく、何か特殊な行事に伴う遺構であることは明らかである。特に148㎝×77㎝の大きさに掘り込まれた土坑に多量の丸太のままのくぬぎやかし等の炭化物が組まれた状態と三方のすみに意図的に配置された大型土師質皿の出土状況から、その儀式は火を使った、しかも一回限りの儀式であったことが看取される。

従来、県下でこれに類似した遺構の調査例が皆無であるため断定はできないが、立地地形、環境、周辺、遺跡等から祭祀遺構であろうことが推定される。

宗教的行事は、人間の常識的思考を逸する行動を伴う場合が多いので、断定はできないが、恐らく中世時に行われた修験道関係の遺構ではあるまいかと今密かに考えている。つまり山伏が護摩を焚いた跡(註1)であろうという推定である。

それは次のような理由による。第一に遺構として148㎝×77㎝の火を焚くための火炉が設けられているということ。遺構の上面は畑地開墾の際、削平されているため元々の掘り込みの深さは不明であるが、現状では第二層に10㎝の掘り込みが確認できる。

第二に、護摩を修する時焚く護摩木(註2)が炭化物となって出土したこと。

第三に、火炉を設ける関係上、護摩壇(註3)を設置する場合、屋外の方が多く、火炉の周囲には

瓶子(へいし)や皿を並べ置くが、これと同様の意図を持つと思われる土師質の燈明皿（糸切り底）が当遺構の火炉から出土していること。

以上の3点がその直接の理由として挙げられる。次に遺跡の立地地形と環境上からは、以下のようなことが考えられる。

この遺構の発見された場所は、微高地上にあり、江戸時代墓地となっていたところである。しかも、すぐ横の農道沿いに二基の中世の板碑も残されており、元、寺院が存在したという伝承を持つところでもある。また、この遺構の所在個所から、熊本県における著名な修験道の霊山(註4)として知られる阿蘇（阿蘇御嶽(おんたけ)）と飯田山（常楽寺(註5)）の二つの山が望まれる場所である。この遺構の長軸方向はN 28°Wであり、遠方に眺められる阿蘇御嶽でなく目前にせまりくる飯田山を本尊として祈願した遺構であることは疑いない事実のように思われる。ただ、この遺構を護摩を焚く火炉とすると、その前面に炉壇、つまり護摩壇が設けられる訳であるが、周辺にはそれに該当するような遺構の存在は見られなかった。

さて、この遺構として残る護摩を焚いた時期は、文献もなく確実なことは判らないが、出土遺物である13個の土師質燈明皿の型式から室町時代頃の遺構であろうことが推定される。

このことは、日羅の開基と伝えられる飯田山常楽寺の興亡とも関連づけて考えるべきであろう。この常楽寺は、古代・中世を通じ繁栄していたが、壮厳善美をつくした堂宇もことごとく小西行長の時代に焼打ちされ、その後衰退したと伝えられる。小西行長焼打説の真偽の程は別(註6)としても、江戸時代にはすでに衰微の一途を辿り明治5年ついに廃寺に到っているので、この遺構も修験道の繁栄した中世時のものと思われる。　（桑原憲彰）

註1　密教で、火炉を設け乳木（にゅうもく）などを焚いて本尊に祈願した。本尊は不動尊である。

註2　護摩を修する時焚く木で段木（だんもく）、乳木（にゅうもく）の二種類があるという。

註3　大壇、水壇、木壇の三種があり、大壇は地を掘って牛糞を塗って造り、水壇は漉水で地を浄めて急造し、木壇は木造の壇である。前二者は屋外に、木壇は屋内に設けるという。

註4　この外、山岳信仰の対象となったものとしては、熊本市郊外の「金峰山(きんぽうざん)」をはじめ、上益城郡甲佐町の「甲佐岳」球磨郡水上村の「市房山」、また山鹿市津留の「権現さん（彦岳）」などがあげられる。このなかでも金峰山は役小角(えんのおずぬ)の創建と伝えられる金峰山寺の所在する奈良県の金峰山(きんぷせん)に因んで修験の栄んな頃、熊本で名付けられたものであることは明らかである。また、金峰山を一の峰、二の峰、三の峰という呼び方をする場合もあるが、三の峰のことを、熊ん岳（熊野岳）と呼び、熊野三山に擬せられることもあるので、その影響を受けた時期もあったのであろう。一の峰、二の峰という呼び方は金峰山より新しい時期の呼び方と思われる（安田宗生氏談）。金峰山(きんぽうざん)も阿蘇山と同様、火山でもある。

甲佐岳・飯田山・金峰山との関連を窮わしめる説話として、各山々の高さ較べの話が地元に残る。飯田山が甲佐岳にその背較べの話を申入れ、竹樋に水を流してその高さを較べたが、飯田山が負けたので飯田

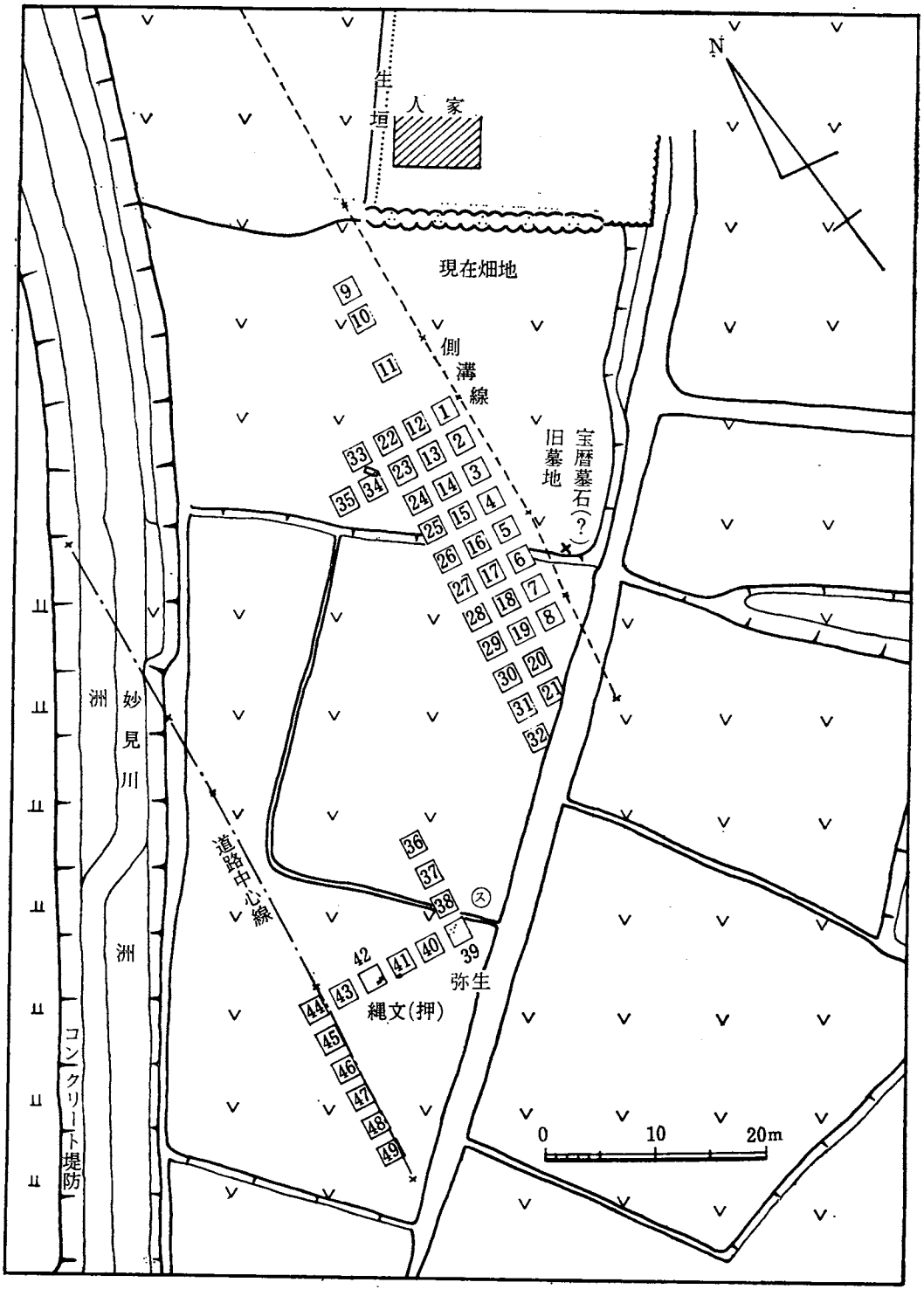
山は「もう言い出さん」といったという話である。同様の話が飯田山・金峰山との間にもある。一見、地名起源譚のように見えるが、共に中世における山岳宗教（修験道）の霊山としての関連を示唆するものではなかろうか。

註5　この寺院は天台宗で、敏達天皇（572～585）の時、芦北の国造の子である日羅の開基と伝えられる。古代・中世を通じ、寺勢頗る盛んで、碩学の僧も多く輩出し、京都・泉涌寺の俊芿国師もこの寺の真俊の弟子であった。小西の頃、戦火にあい燼滅に帰し後、復旧されることもなく、江戸期を通じ衰退の一途を辿った。明治5年廃寺となったが、明治27年再興され現在に到っている。

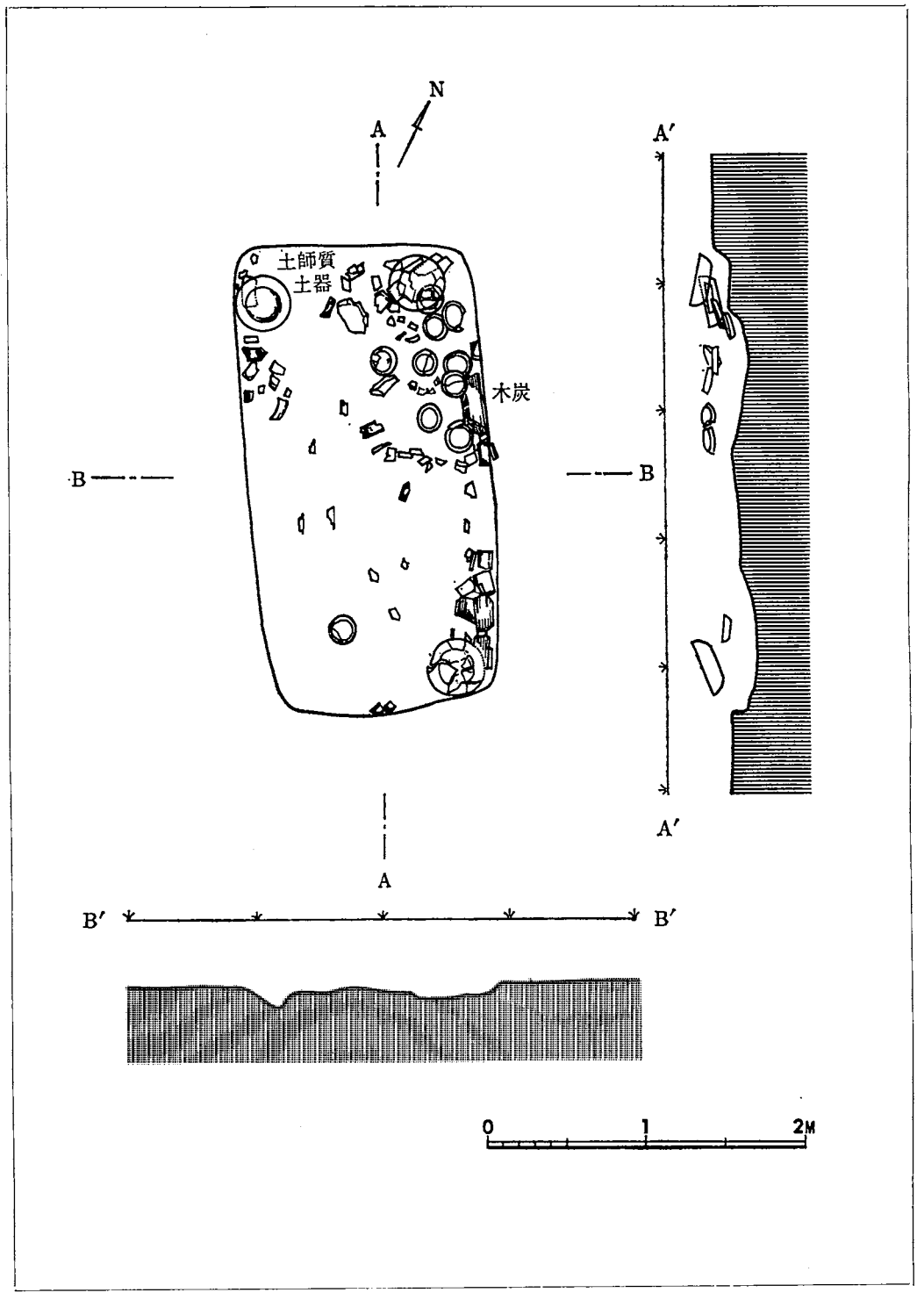
註6　肥後では小西領となった宇土・益城一帯の有力寺院および廃寺となった寺院の殆んどが、小西行長の焼打に偶い衰微したという伝承を持つ。

24万石の行長に抗する程の武力を持つ有力寺院ならともかく、現在伝えられるようにすべての中小寺院が焼打ちに偶ったとは考え難い。天正16年、肥後南半分の領主となった行長は、天草五人衆の鎮圧、2回にわたる文禄慶長の役と席のあたたまるひまもなく、伝えられるように領内すべての寺院を焼打ちすることは政策上も不可能であろう。また、才子であった行長が国内宣撫の政策上からもそのような蛮行を敢えて成したとは、到底考えられない。恐らく行長がキリシタン大名であったが故の後世の人の付会の説というべきであろう。

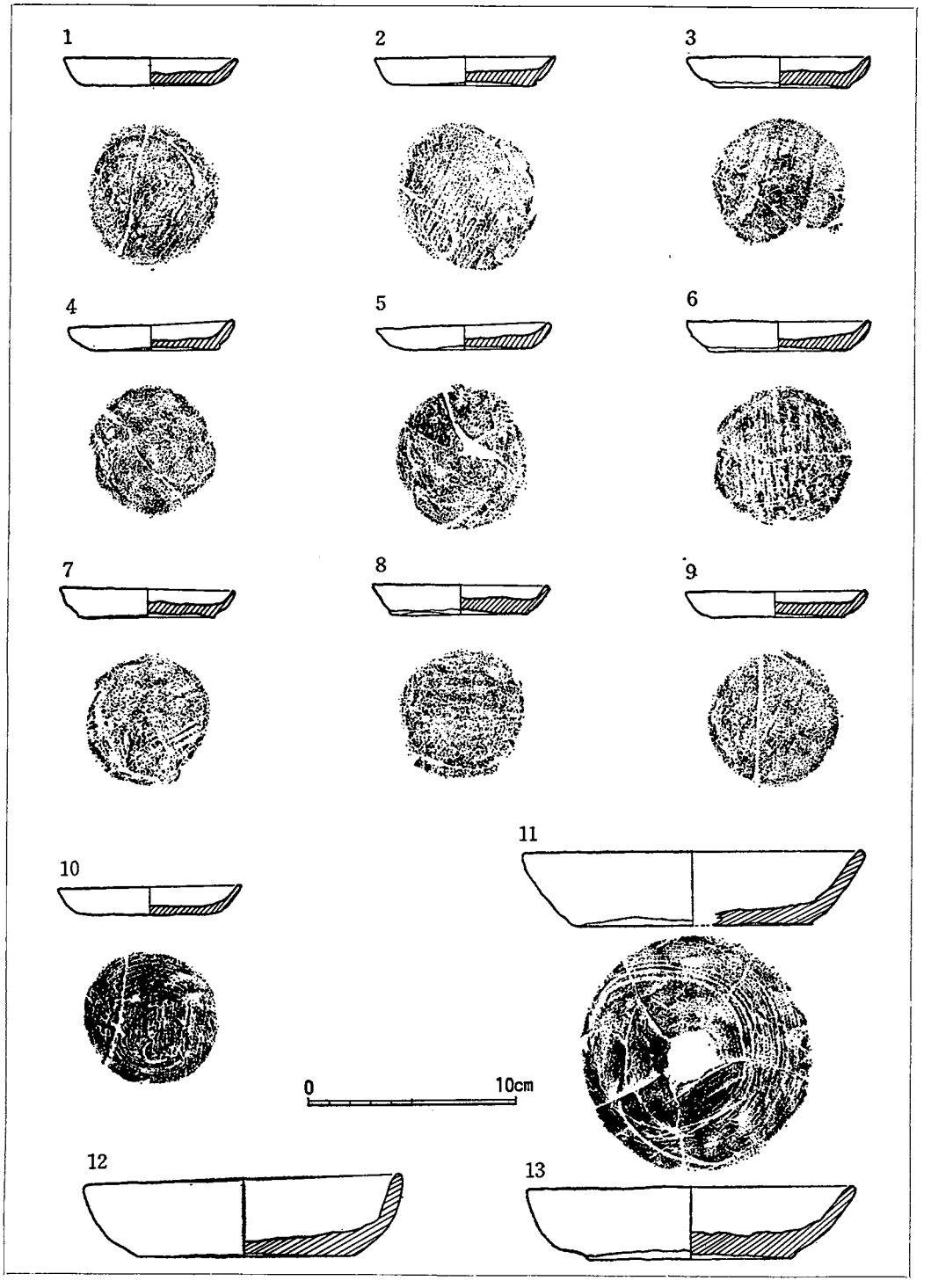
第28図　　福富（西園祭祀）遺跡周辺地形図とグリッド設定状況



第29図　　福富（西園祭祀）遺跡遺構平面図



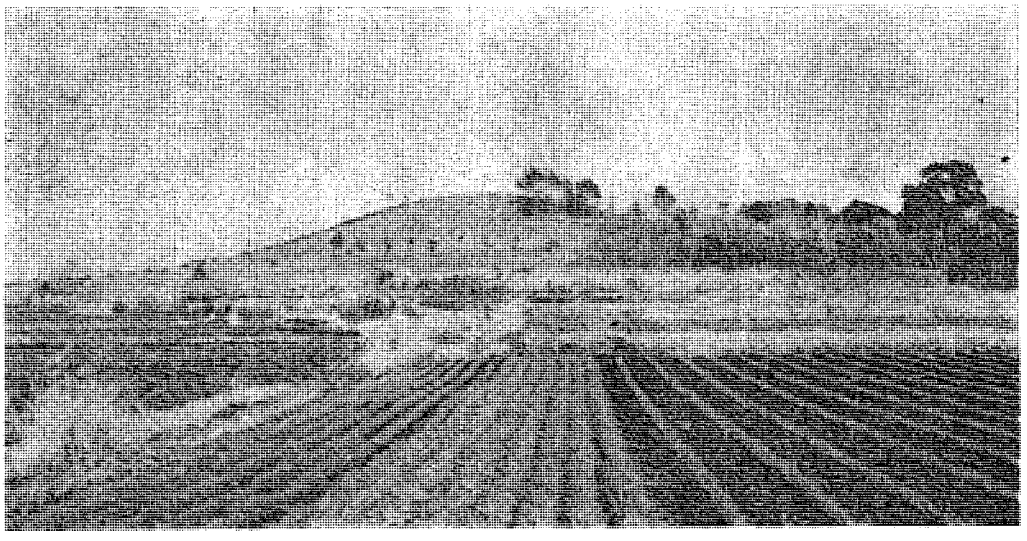
第30図　　福富（西園祭祀）遺跡出土遺物実測図



3. 御船塚、中近世墓地遺跡

1. 御船塚墓地群

御船塚、中近世墓地は、飽田郡託麻村小山御船塚1631番地（現熊本市小山町御船塚1631番地）に所在した。国土地理院発行の五万分の一地形図、御船図幅（熊本四号）の図上では、西端から10.7cm、北端から0.5cmの地点である。



第31図　　御船塚旧状（西北方向より）遠景

熊本市の東に広がる託麻台地の上にラクダの背のような姿を見せている託麻三山の一つ、小山山（標高189.6m）の東1kmの所に御船塚と呼ばれる小さな山があった。標高80mの台地上にのっている標高110mの低くなだらかなこの丘は、西側の山裾にある墓地を除いて全山雑木に覆われ、遠くから見れば大きな森のように見えていた。空港も高速道もなかった昭和40年代のはじめまで、この周辺は広く平坦な畑地帯で、小山山の裾にある小山集落を出ると東2kmにある中原集落まで一軒の人家も見られなかった。

御船塚の南麓には縄文後晩期の遺物散布地が広がっていたが、縄文期以外の遺物は全く見られず、この山の周囲では縄文期以後集落跡の存在は全く認められなかった。

昭和40年、御船塚は熊本専門店会によって宅地造成工事が行われることになった。この計画によれば、山全体を削平し、全域を宅地化することになっており、西側山裾にある墓地地区も

第32図　　御船塚中・近世墓平面図

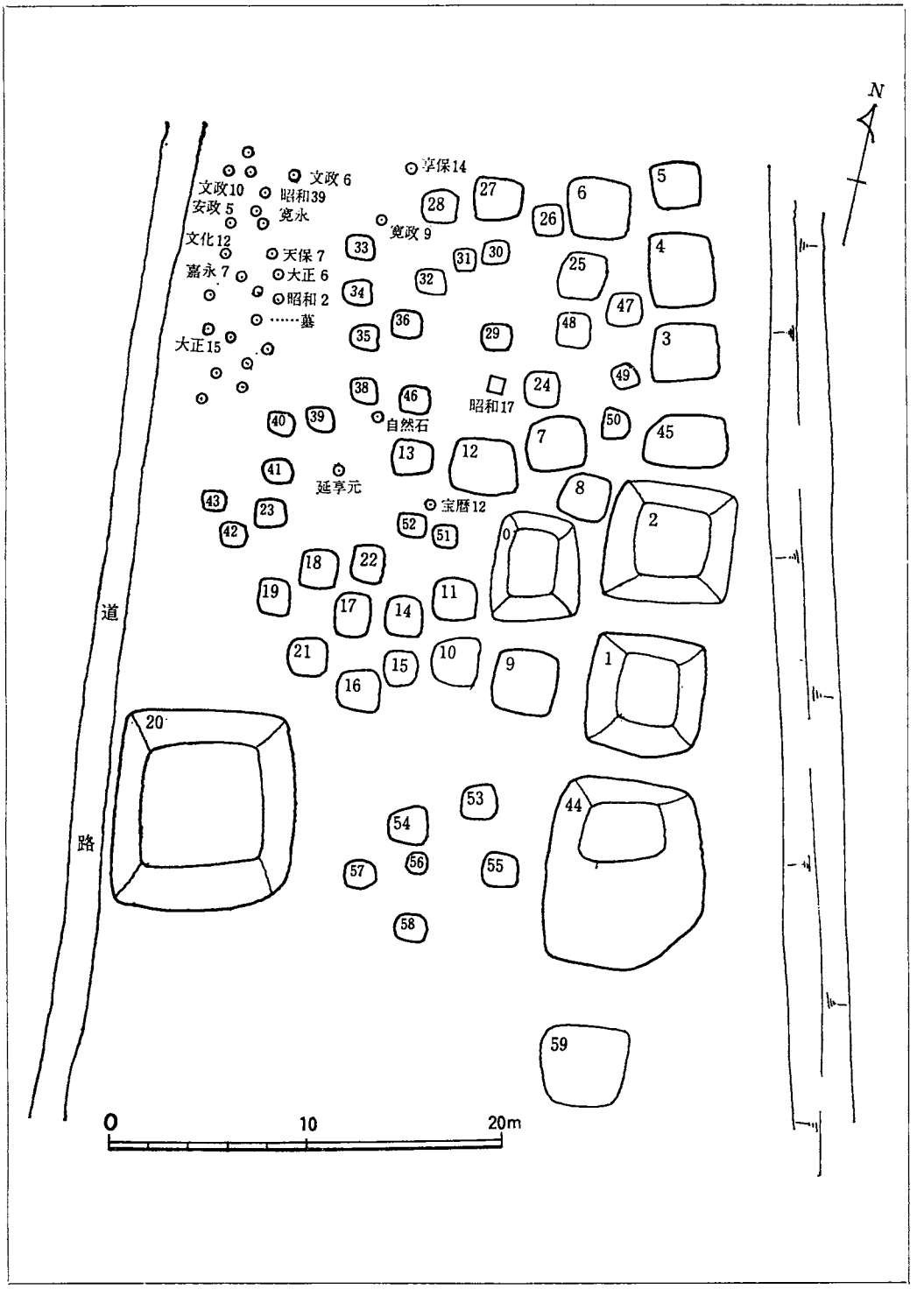


表 4　　墓石の年代

記年銘	西暦	基
享保14年	1729	1
延享元年	1744	1
宝暦12年	1762	1
寛政9年	1797	1
寛政○○		1
文化12年	1815	1
文政6年	1823	1
文政10年	1827	1
天保7年	1836	1
嘉永7年	1854	1
安政5年	1858	1
大正6年	1917	1
大正15年	1925	1
昭和2年	1927	1
昭和17年	1942	1
昭和39年	1964	1
無銘のもの		10
……墓		1
……七年		1
自然石	—	1
計	29基	

この造成工事によって削平、平坦化されることになる。

この墓地には昭和39年建立の新らしい墓もあったが、大部分は関係者が全くわからない古い墓であり、工事前に無縁墓として処理が必要であった。一方、この墓地については、後記のように色々な伝承があり、遺構としても問題があるので、改葬を機会に調査を行ったらとの要望もおこっていた。このため、熊本県教育委員会の依頼により、熊本大学医学部助教授（故）松野茂と上野辰男が担当し、熊本大学医学部第二解剖教室及び熊本大学法文学部助手伊藤奎二らの協力を得て工事に併行して調査を行った。

この墓地は飽託郡託麻村小山、御船塚1631番地にあり地目は埋葬地となっている。当時この土地は小山上の村上研一氏の所有で台帳面積は1反1畝3歩（約1100㎡）となっていたが、実面積は1600㎡以上あったようである。

埋葬地は周辺の山林と墓域を区切るように、東側と南側に低い土手が築かれ、西側は小径で区切られていた。南側の土手は殆んど崩壊し、僅かに存在が認められる程度にしか残っていなかったが、東側のものは底辺が4m、高さが1m近くもあって、充分境界垣としての役割をはたしていた。おそらく北側にもそうした構造物があったと思われるが、調査時には全く認めることができなかった。

墓地には墓石だけのものと、盛土の饅頭形のものと二種類あった。墓石だけのものは、墓域の西北部にかたまり、最も古いものは享保14年（1729年）、新しいものは昭和39年（1964年）でその数29基を数えた（表4）。中には文字が消えて見えなかったり、自然石で当初から文字を入れていな

かったのではないかと思われるものもあった。この墓は関係者が明らかなものもあったので、調査から除外した。これ等の墓は村上氏ほかの関係者によって、小山上、上の前1566番地の新らしい墓地に改葬されている。

墓地の大部分を占めるのは、盛土のもので、もともと小さかったり、土が流されたりしてかろうじて判別できるものを含めて、その数59基を数えた。

盛土の形は、くずれてしまっていて、やっと存在が認められるものもあったが、四角錐台形を基本型としていた。特に大型のものの中にはくずれも少なく、きちんとした形を保っているものが多かった。

盛土は大小の差がひどく、最大のものは台形底辺の一辺が10m、高さ2.5mもあったのに対し、小さなものは一辺の径も1mにみたず、高さも0.2m程度のものもあった。

墓の配置は墓石のあるものが雑然としてしているのに対して、盛土のものは整然と配置されており、南西端にある特別大きな1基を除いて東の土手の前に大きく形のしっかりしたものが並び、西の方にあるもの程小さくなっていた。この墓地は山の西裾の傾斜地にあるため、西の方が低くなっている。高い地盤の所に高い盛土の墓が多いため、全体が階段式の観覧席の様な形をしていた。

盛土は何れも同じ方向軸で作られていた。碑のあるものは一つしかなかったが、それは西に向かって立てられており、盛土群配置は西を正面に築かれていたと考えられた。

盛土の墓は、2墓を除いて全く墓碑等の構造物が見られなかった。木柱等当初はあったのかもしれないが、発掘では何等の痕跡も認めることはできなかった。

墓碑があったのは第32図中0番の中央部にある比較的大きく形の整った墓で、高さ78cmの安山岩で、頭部が円い形の平石を墓の前に建てていた。この石には、円に囲まれた種子（キリーク）の下に「祖父善慶禅定門吳位」とあり、右に「天正八年六月二十五日死去」左に「文禄三年甲午六月三日」その左に「岡本四良兵衛尉」と刻まれていた。又、南西端にあり番号20番を付けられているこの墓地群最大の墓の上には、六地蔵塔の龕部状の六角柱が置かれていた。これは凝灰岩製で、高さ65cm一稜26～28cmを測り、三面に彫刻があった。中央は蓮華座上の二重円の中に種子（サク）があり、その左右面にも種子（サー・キリーク）が刻まれていた。この他、左面に横書きの沈線が梵字の下に見られたが、文字は見出せなかった。残りの三面には何も刻まれていない。この墓には「キョウ塚」とか「宝物が埋まっている」との伝承があり、確かに他の墓とは異なった雰囲気があった。しかし発掘の結果、墓坑と思われる掘りこみはあったものの、攪乱がひどく何等の遺物も検出できなかった。

この墓地の墓坑は、正方形に近い長方形で、一辺が1m内外のものが多かった。深さは120～190cm位までまちまちであったが、180cm、120cm、150cm前後のものが多かった。これは、6尺、4尺、5尺といった基準が使われたからであろう。

表 5　　御船塚出土人骨一覧表

墓地番号	性　別	年　令	備　　考
4	男	熟　年	
5	男		
6	不　明	不　明	頭骨一部のみ
8	不　明	幼　年	古銭副葬
9	男	壮　年	
10	男		
11	男	熟　年	
12			骨細片で不明
14	男		
15			骨細片で不明
16	男	壮　年	
17			骨細片で不明
18			〃
22	不　明	幼　年	
23	男	熟　年	
24	男	壮　年	
26	不　明	不　明	頭骨の骨性癒合なく歯の磨耗度一度、若い人と思われる
27	女	熟　年	
28	男	壮　年	
31			骨片のみで不明
32	男	熟　年	
33	男	老　年	
34	男		
36			骨細片で不明
38	男	壮　年	
39			骨片のみで不明
44	不　明	老　年	
45	男	熟　年	
46			骨片のみで不明

1965.6.8.　松野茂熊本大学医学部助教授教示による

この中で人骨が検出されたのは29基だけであるが、性別・年齢が判明したものは12体で、性別のみが明らかになったのが4体、年齢のみ想定できるものが3体あった。性別のわかる16体のうち男性骨が15体と高い比率を示した。全く人骨が検出されなかった墓も多かったのでこの数値だけを信用することはできないが、墓地の特色を表わしているようにも思われる（表5）。

墓地一帯が酸性の強い黒色土であったため、人骨の遺存度は極めて悪かった。検出された人骨は何れも土葬と思われるもので、火葬骨と思われるものは全くなかった。墓坑の中より木材の細片や鉄釘が検出されたものが多く、何れも木棺を使用したものと思われた。

副葬品としては、16号でガラス、水晶製の数珠玉数個と8号で寛永通宝3個が出土しただけであった。

この墓地については、『肥後国誌』に「所以ヲ知ラス此所古墳多シ」とある他は文献上には全く現われていない。「昔戦争があった時、戦死した武士を葬った」等の伝承が

あるが、それを証する何ものもない。古く無縁の墓となり、村人達に畏懼の念を持たれつつこの山林の中にひっそりと眠りつづけ、現在に至ったものであろう。築造年代についても、墓碑がある文禄年間の墓以外は、それよりどの位古いか新しいかを明らかにすることはできなかった。

人骨発掘の所見から、封土のあるものでも比較的新しいものがあるのではないかという説もあったことも付記したい。

なお、この地方では、最近まで土葬の慣習が行われていた。　（上野辰男）

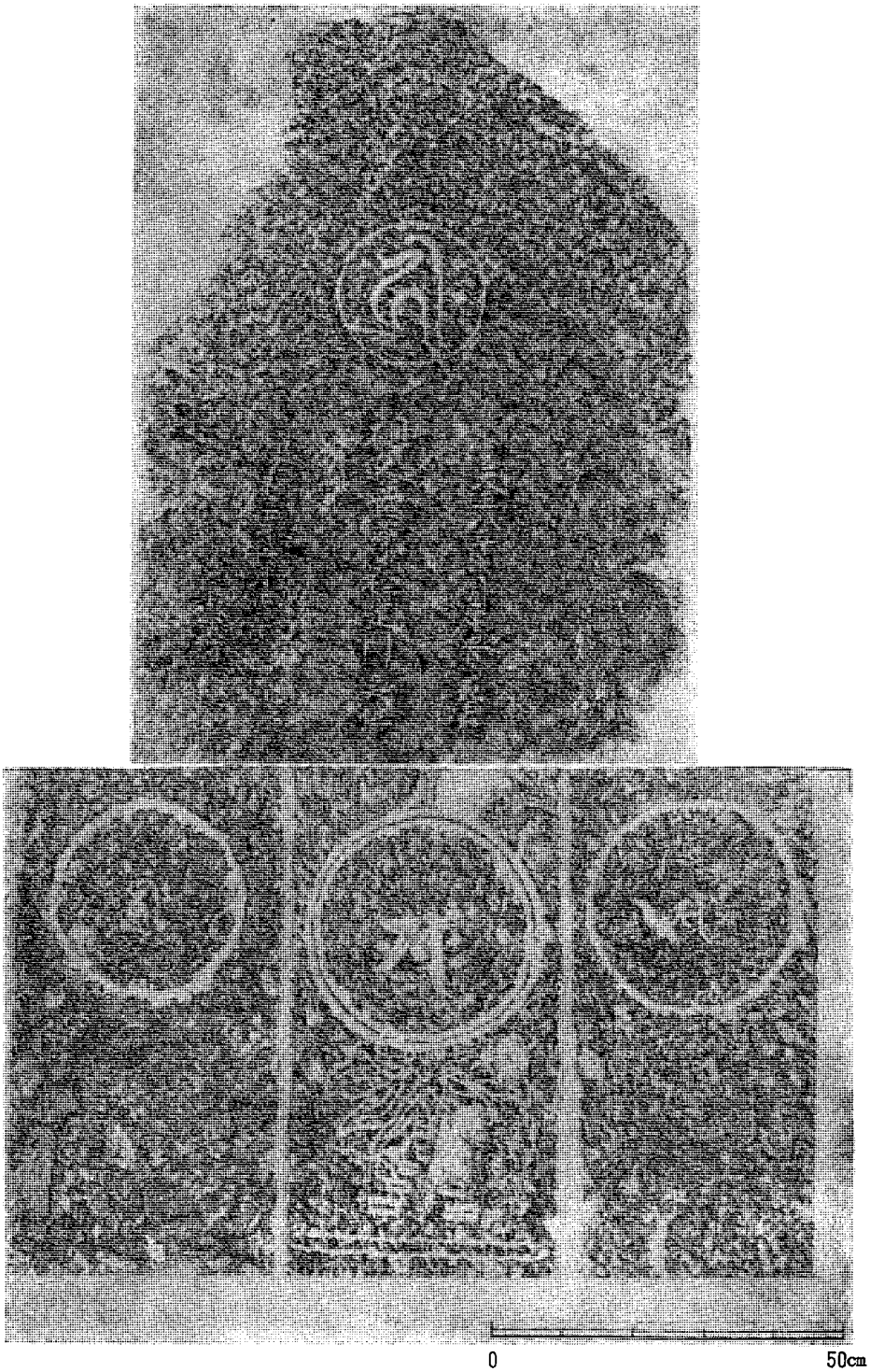
2. 御船塚出土板碑等について

戸島町二岡中学校の校庭にある板碑および塔残欠はもと御船塚にあった遺物である。御船塚は小山山の東南方にある小丘で、『肥後国誌』にも「御船塚所以ヲ知ラス此所古墳多シ」と記されている。稲丸氏手記(註1)には次のように記している。

「小山ト戸島ノ平野東部小山ノ山ト戸島山ト連脈トナル其中間ニ御船塚山ト云フ雑木林丘陵ガアル。其西裾ノ麓ニ数多ノ土塚ガアル。凡ソ九尺四方モアラウ。竪横ニ整然ト併列シテソノ数モ数十ニノボリ普通ノ墓デハナイ。時ヲ同ウシ多数ノ死体ヲ同形式ニ葬ッタモノデアル。里俗御船城主甲斐宗運ノ軍兵ノ塚ト云フ。中ニ一基タブノ古木アリテ笠付石塔ノ破損シタモノガ有ル。之ガ宗運ノ塚デアルカラ、此処ヲ御船塚ト呼ブノデアルト云ウ。其西ニモ大ナル土塚ガアル、ニウリ塚ト呼ブノデアル。又一基自然石ノ石碑ガアル。天正八年六月廿五日死亡祖父□□禅定昊位ト刻シテアル。之ハ右土塚トハ無関係ノモノデアラウ。今史書ヲ入念探究スレドモ宗運ガ此平野ニ出陣ノ史実ナシ。思フニ小山山ノ島津ト今城トノ戦（国誌小山城跡ノ項参照、天正13年―1581）ノ戦没者ノモノト考ヘラレル。或ハ島津勢ガ御船、赤井、木山ト攻メテ来タ時、御船ノ残党ガ敗走シテ来リ、是ニ打死シタノカモシレヌ。」

この御船塚は昭和40年3月熊本県専門店会による宅地造成の申請があり、県社会教育課の指示によって上野辰男氏が調査に当ったので、発掘調査に関しては別項に譲る。また稲丸氏記録にある「笠付石塔ノ破損シタモノ」と「自然石ノ石碑」に該当するものは二岡中学校校庭に移建されている。「笠付石塔ノ破損シタモノ」に該当する遺物は六角の凝灰岩の竿石で高さ65cm、六角の一稜は26～28cmで、三面には全く彫刻なく残り三面の中央には二重圏(外径25cm)の中に種子(サク―勢至)を大きく入れ、圏は垂れさがり気味の蓮華座に乗せられている。蓮華座の下には五個の小矩形を山形に配し、その下に二本の界線がある。竿身上部からこの界線までは51～52cmである。その右側面には月輪（径21cm）の中に小さく種子（サー聖観音）を入れているのみで、他には何等の刻銘がない。また左側面には同じく月輪（径21cm）の中に種子（キリーク―阿弥陀または千手観音、如意輪観音）を入れその下に五本の界線があるが、文字は全く入

第33図　　御船塚板碑類拓影

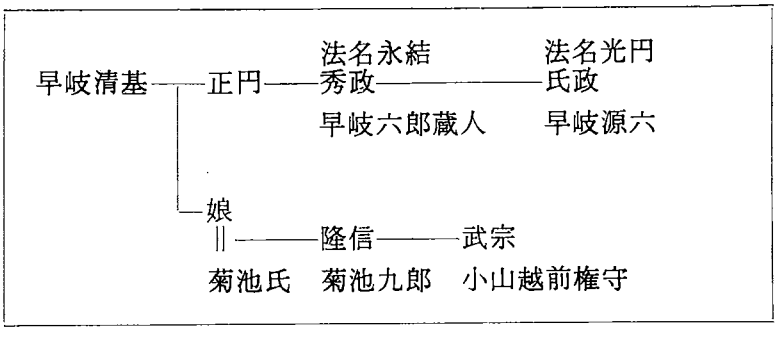


っていない。六角の竿石であることは六地蔵の幢身を思わせるが、勢至を中心として聖・変両観音を脇侍に画くという形式のものはいまだかつて接したことがなく、また竿石としては短かすぎる。現在の状態では全く旧状について推定を下し得ないのを遺憾とする。

今一つの「自然石の石碑」に該当するものは安山岩の平石で一平面を磨いてその面に刻写してある、我々の所謂戦国板碑である。底面79㎝、高さ78㎝、石の厚みは左側が薄く18㎝、右側厚い所で34㎝である。文字面は中央の日輪中に種子（キリーク）を刻み、その下に「祖父善慶禅定門吴位」右に「天正八年六月二十五日死去」左に「文禄三年甲午六月廿三日」改行して「岡本四良兵衛尉」とある。この岡本姓については稲丸氏の私見に次の記事があることを参照しよう。

正円廃嫡サレ、幾分ノ領地ノ分与ヲ受ケ今ノ平山（明治迄小山の内）ニ居住、今ノ中山部落ノ田地四町五反ヲ領有シテキタノデアラウ。其幾代カノ末ヲ岡本敬円（小山諏訪宮拝殿両側石燈籠二基元禄十三年教円ノ寄進スル所、）敬円ノ墓平山ニアリ、其子孫上田末太郎、（伝来銘刀数振有リ、諏訪宮ニ寄進今ハ行方不明）現在の上田姓ハ明治年間一般ニ姓ヲ付スル時其ノ当時岡本家主人歿シ二人ノ男子ト一女アッタガ何レモ旅ニ出テ帰ラズ。女ノミノ時トテ近隣ノ申合セニマカセ上田ヲ姓トスルニ至ツタモノデアル。此事ハ岡本代ヨリノ言伝ヘデアル。
中山部落ニ上田所有ノ田地アリ、其側ノ小藪ノ中ニ石ノ祠アリ。俗ニ田中サント呼ビ、大東亜戦ノ時其藪モ開墾シテ田地トナシ、祠ハ今早岐社ノ境内ニ移ス。上田有ノ田地ハ農地改革ニヨリ買収サレ、今ハ神園ノ者ノ所有、蓋シ此田地ガ先祖ノ領シタル四丁五反ノ名残デハアルマイカ

表6　　早岐氏系図



上記の説によればこの板碑の岡本四郎兵衛尉は早岐氏の子孫ということになり、年代的には岡本敬円の祖父位にあたることになるわけである。　（鈴木　喬）

註1　戸島にある正栄寺（浄土真宗）の住職であった稲丸堯俊氏（故人）の手記である。同寺の創建が明治41年と新しいこともあって、同氏は地区のことを知るため、周辺の史跡を踏査し、丹念に記録に留めた。未刊本

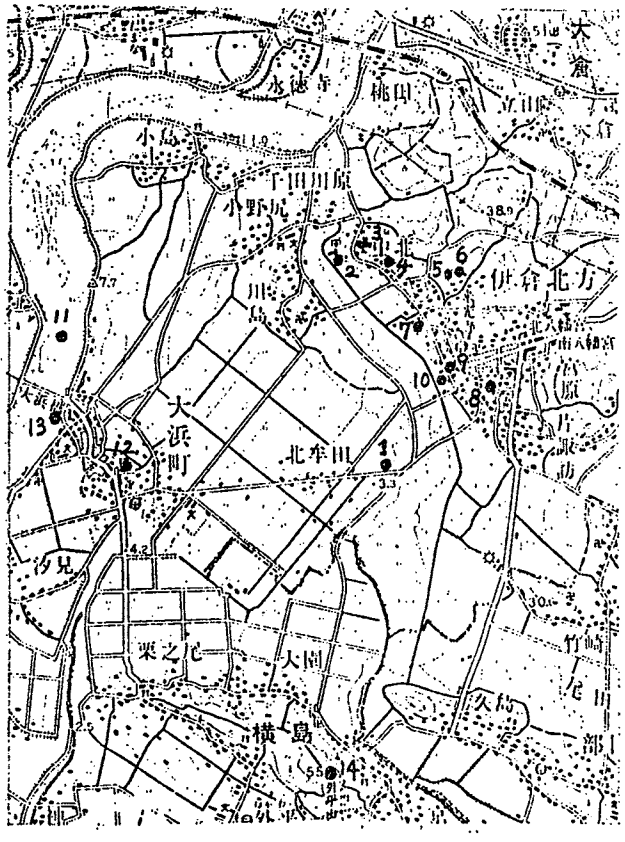
（昭和46年度、熊本市東部地区文化財調査報告書　熊本市教育委員会、二岡中学校遺物より転載）

4. 北牟田塚墳墓

1. 位　　置

伊倉鍛冶屋町の坂を南へ下り、玉名市より横島町へ通ずる道路と正交する十字路を直行し、唐人川橋を渡って西へ600 mばかり行くと北牟田の集落にさしかかる道路沿いの右手、西の大浜町方面から行くとすれば町の大通りから郵便局の角を東へ折れ、有明中学校（旧大豊中学校）の前を経て、北牟田集落の直線舗道をさらに東へ行った聚落外れの左手の、水田地帯の中央を南流する水路の右岸に二つの小さな封土の塚があった。5 mの間隔をもって南北に並び、地元では北の塚を荒神さん、南の塚を塚さん、またはつむしさんと呼んで、むかしから粗末にすると祟りをうけるといって恐れ、とくに北の塚はその名のとおり荒い神だとして畏敬されていたらしく、戦前までは香華を供えてお参りが絶えなかったという。

第34図　北牟田塚墳墓周辺遺跡分布図



1. 北牟田塚　2. 城が崎貝塚　3. 城が崎城跡
4. 中北かめ棺遺跡　5. 明人振倉謝公墳
6. 本堂山報恩寺跡・宇佐一族墓　7. 切支丹墓
8. 明人四位官郭公の墓　9. 船つなぎの銀杏
10. 伊倉港丹倍津跡　11. 石剣出土地　12. 外島神社
13. 大浜港跡　14. 経塚

2. 環　　境

周辺一帯は東方は伊倉の丘陵地より、北方より西方にかけては菊池川下流、南方は横島山に至る範囲内の、総面積およそ105km^2にも及ぶ広汎な全面の水田地帯で、大浜町、川島、小野尻、小島、北牟田などの大小の点在集落を包雍し、土地も肥沃で南玉名第一の穀倉地帯をつくって

いる。現在では米造りの一方にはいちご、西瓜、とまとなどを主とする近代的ビニールハウス利用の栽培による進歩的な農業が目立ってきている。この平野の西限にあたる菊池川河口は、国鉄線鉄橋の下流700 mの地点千田河原付近で西に折れ、さらにそのあたりから下流およそ1 kmにして大きく湾曲して南へ向かい、4.5 kmあたりで大浜町と小浜のあいだを経て、末広と共和のところで有明海に注いでいる。

この工事は藩主加藤清正の米の増産から国外移出によって、藩財政の獲得の一助にするとのことから出発して、領内四大河川の改修を行った事業の一つであった。肥後国主として清正が天正16年（1588）肥後に入ると、その翌年より工事を開始し、慶長10年（1605）に至って竣工をみた。その期間が17年、その期間中に計らずも勃発した2度に及ぶ朝鮮の役がある。このため清正の従軍のため工事中止期間の7年間を除いた10年という長い歳月をかけていることが『玉名郡誌』（熊本県教育会玉名郡誌会編　大正12年発行）や、『肥後文化史の研究』（玉名中学校編　昭和9年1月発行）などの郷土史書にのせられている。また横島石塘の潮止工事にまつわる人柱の悲話もこの工事のため、この工事の期間中の出来ごとであった。

なおこのことについて肥後藩講学所で時習館訓導をつとめた大城允氏撰文になる「浄池廟碑」（加藤清正の墓碑）には、「曰菊池川。呑ニ納迫一及ニ合志鍋田諸川一。導至ニ高瀬一。移ニ流於大小浜之間一。西入ニ千海一。」と記してその事績を顕彰している。

菊池川掘替工事以前に水田地帯があったことは確かであろうが、その広さのほどは皆目分っていない。掘替工事の完成によって小田牟田新地開田の各村の合計石高は5976石が挙げられているほどの結果を生むに至っている。

掘替後の菊池川下流の旧川床は、千田川原付近より南へ、伊倉の城が崎の西小野尻聚落地の東を直流し、伊倉丘陵地の西、丹倍津（旧伊倉港）を通り、尾田の丸池にみなもとを発する九十九曲りで知られる尾田川を併呑して、そのむかし唐船や南蛮船の往来したという説のある唐人川となって、久島山と横島山のあいだを通り、横島集落の東端部を迂回して有明海に注いでいたのであったが、そのあとかたは今なお認められる。北牟田の二つの塚の沿う水路は、菊池川旧川床の一部に当っている。

大東亜戦争が起ると、この地域に日本空軍の航空基地が計画され、昭和19年初頭ごろより突貫工事でその計画は遂行され、同時に北牟田集落は全面的に軍に徴発されたため、住民は残らず他所へ移住が強硬に迫られ、伊倉南方やその他の地域に移って行った。伊倉北端にあたる城が崎の山塊はどんどん削り取られ、飛行場建設地へ埋め立てられ、東西300 m、南北1100 mの広さに及ぶ大浜日本空軍基地は急造された。城が崎の山の上には中世城の遺構や弥生時代の遺跡や古墳などがあり、山の南裾には大規模な貝塚があることがこのときの採土工事で確認されたのであった。だがその時代においてはそのような遺跡など眼中にされなかったもので、ただ戦いに勝つことだけが念頭にあって、みるみるうちに遺跡は崩されていった。現在はその削り

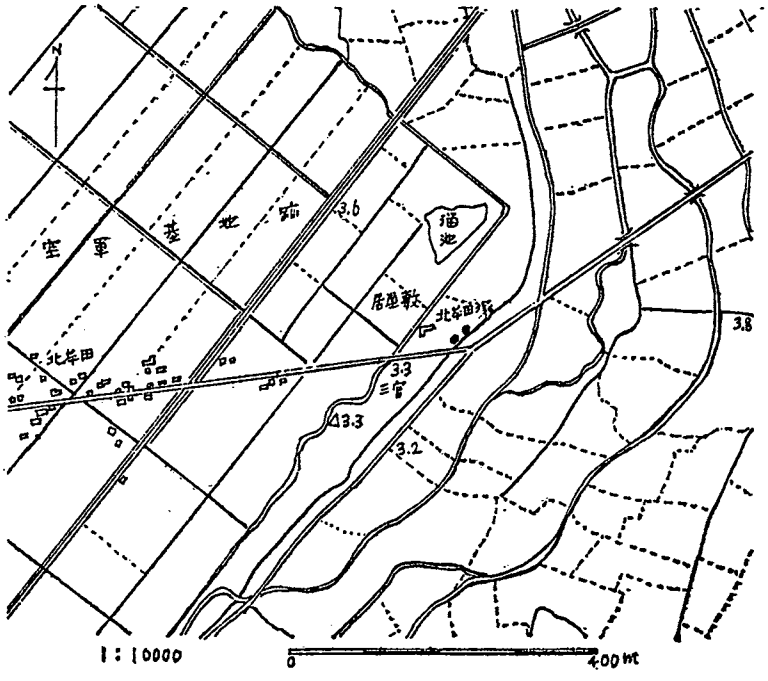
残りのわずかな部分と、破壊のあとの貝がらの散乱が見られる程度となっている。

戦争が終ると飛行場は解除され、間もなく跡地は民間に払い下げられると、一時他所へ移転していた元の住人や、新開地を求めてきた外地よりの引揚者たちによって、新しい家が建ちはじめ、旧空軍基地はにわかに新たな活気がみなぎり、たちまちにして別の北牟田の集落が新興した。

二つの塚は空軍基地の東北の隅に位置していて、紙一重の際どいところで、期せずして基地から外れていたため、戦争に係わりなく、今日までむかしのままのすがたを止むることができたのはまことに幸であった。戦前の地形をのこしているのは二つの塚のある周辺の一郭だけである。地名（小字）を居屋敷とよぶが、このことも以前からの聚落地であったことを意味している。

南隣りの地名を三官という。「三官」とは中国の明朝に出仕した官人の階級名から起った呼称がついには地名となったもので、ここのほかに八代や水俣や飽託郡の河内町など、主として河口にのぞむ町にその地名が見られる。これらの人たちが官を退いて、当時日本で豊臣秀吉の財政の立て直しの一策として採用した外貨獲得のための、日明貿易の開発に着目して日本に渡り、秀吉より朱印状をもらって、朱印船による公認の貿易商人としてその事業に携さわる人たちがいた。その人たちが住んでいたところを三官屋敷といい、元和年間（1615～1621）伊倉に来住の謝公と郭公の２人が、そして天水町米山に住んだ均吾があり、謝公の墓は本堂山墓地にあり、郭公の墓は鍛冶屋町裏手の東屋敷にあるのだが、住居がどこにあったか今まで分っていない。郭公は四位官であったから、謝公は三位官ではなかったか、それだとしたら謝公の住居が北牟田にあったのではないかという考え方も成り立つ。然しこれらの問題は直接には二つの塚から切り離して、伊倉を基地として盛行した日明貿易問題の上で今後進めていくべきものである。

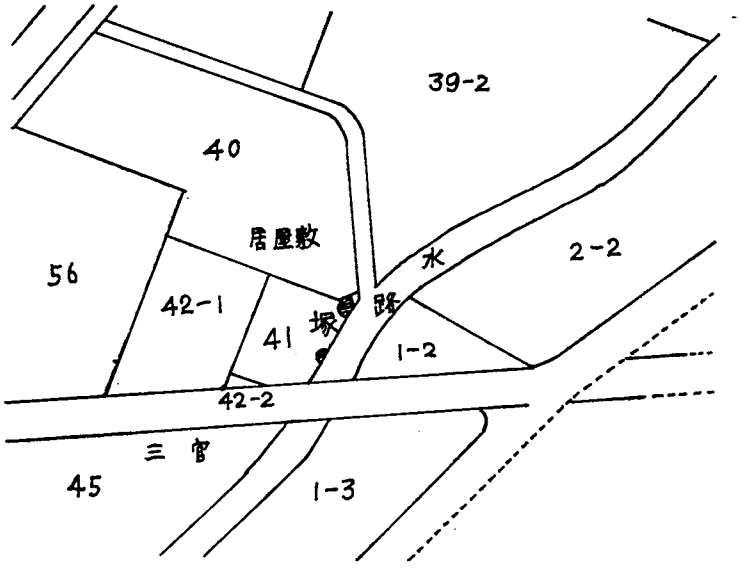
第35図　北牟田塚墳墓位置図



3. 発掘調査に至る経過

戦時中より北牟田から伊倉南方に転住し、建築業に従事していた萩原春幸氏（29）は戦前まで住み馴れた北牟田へ復帰するために、北牟田字居屋敷41番地約120㎡の土地の払い下げを受け、水田に造成して耕作していたが、53年3月この土地に住居兼作業場を建設するため山土を埋め立ててもとの地盤を70センチほど高くした。ところがこの敷地内に遺存する二つの塚が、埋め込むことも建物をかけることもできず、北の塚は建物には支障はないので、南の塚を北塚へ合祀することを思い立った。然しこれが埋蔵文化財であるため、簡単に掘り上げて片付けるわけには行かないので、玉名市教育委員会に届け出、県教育委員会の指導に依って法令に基づく発掘調査を行い、記録を保存しようということで、玉名市教育委員会を発掘調査の主体者とし、同市文化財保護委員会会長（日本考古学協会々員）田添夏喜を発掘調査担当者として、昭和53年3月3日より8日間の日程をもって発掘を行った結果、内部構造のすべてを明らかにすることができた。

第36図　　玉名市北牟田地籍図



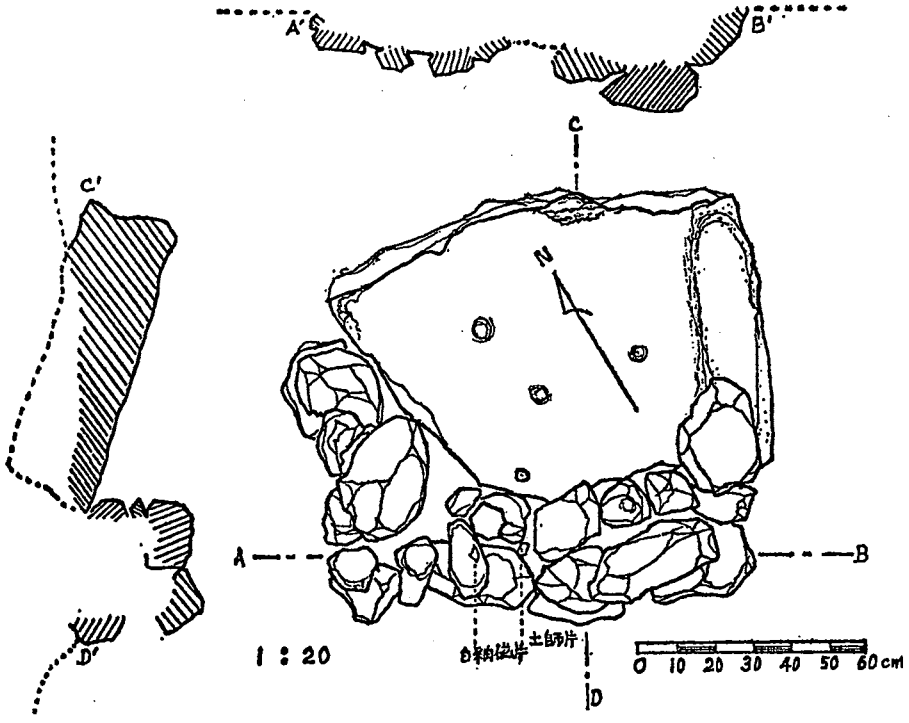
4. 発掘調査の過程

（1）二つの塚

2．環境の項に記述の通り、北牟田字居屋敷41番地の土地が、萩原春幸氏所有となった当時、ほぼ南北に長い矩形になる地形の東辺は水路に接していて北と南に5ｍの間をおいた北塚は、長径3ｍ、短径2ｍ、高さが北の方で水田面より1ｍほどの小さな封土で、北裾の一部は

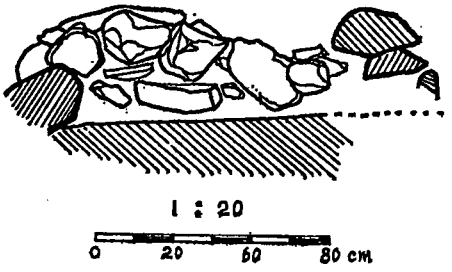
北隣りの水田地になだれこんでいる。南塚も北塚と同様の封土であったのが、水田造成の折多少変形したらしい。このたびの埋め立ての折、周囲が高くなり、封土は従前のまま、周りに柵を設けて土止めをしたため、塚の部分だけ低くまるくくぼみ、あたかも浅い井戸を見る状態になっていた。したがって封土の状態は把握することは不可能であった。このような封土の塚は玉名市内ではこのほかに上小田に三つ、立願寺に一つ、亀甲に一つ、中（春出）に一つ、合わせて六つの例が確認されているが、発掘されていないのでどのような内容のものであるか分っていない。然し、上小田にある一つには封土上に五輪塔の断片が見かけられるので、中世の墳墓であることは間違いないであろう。他の一つには寛永10年と同19年銘の板碑２基があり、近くに養音寺という寺跡があることから、同寺関係の墳墓であることは明らかである。北牟田の北塚では水路側のかたわらに一本の榎の古木がある。古さの割に巨木というほどの大きなものではないが、四方に根張るこぶだらけの樹根は、節くれだった幹肌とあわせ、相当の年輪を重ねているように想像される。樹木が塚の年代判定の決め手になるわけではないにしても、おおよその程度は見当がつくのである。そうしてみるとこの榎が塚と同年代のものか、後世の追植

第37図　　内部上層石郭実測図



かそれすら分からないが、この木は塚の造営年代の古さを指示していることは間違いないであろう。周囲は果てしないほどの水田地帯である。樹木といえば一軒屋の隣家の庭木よりほかに広莫たる平野の見渡す限り何も見ることはできない。ただこの榎の木一本だけが塚の守りとなりある時には塚の目じるしともなって神秘さを漂よわせ続けている。

第38図　　石郭東側内部正面図



（2）内部上層石郭

二つの塚のうち今回は家屋建設の都合上急を要する南塚を発掘することになった。まず、埋め立てによって設けられていた土砂止めの柵を除去し、埋め立てられた客土を塚の周りの1m幅、70cm深さ、もとの表土面まで排土して封土の上面を露出させた。封土上は藁やもみがら、腐蝕した雑草が被り、すでに損壊した部分も多く、形状も変形し封土としてのかたちはなくなっていた。埋め立て工事以前に計らずして生じた痕跡であることが分った。

つぎに表土を直径2mの広さを厚さ20cmほど2度くり返して排土した。腐蝕質を多量に含む黒色土の下層に、水田表土と同質の植物細根の腐蝕したものが混合し、したがってもとの水田面に達していることが分った。さらに下層へ掘り深めること30cmにして砂混りの赤味のある褐色土となり数個の石群も一部を現わした。この段階で何物であるか解明することを止め、その部分を、石群の崩壊することをおそれ、周りの土とも残して、例の通り20cmの厚さの排土をくり返すこと2回にして安山岩の平たい大石に突き当った。可なりに広さがある感じなので、あるいは甕棺の蓋石か、石室の天井石かと勝手気ままに想像するがまだ状況は早過ぎる。この段階で一応石塊群と大石の露出と清掃を行った。

楕円形を横に二分したような形の、幅90cm、110cm、厚さ25cmの大きさをもつ質のよい安山岩の平たい石が18度東（水路側）へ傾斜し、その上に人頭大くらいの石塊20個が大石の上の東と南の外郭に沿って、二個並びでほぼ三段に積み上げた状態の石組みがあった。もと西と北辺にこの状態が続いたのであろうと考えられる。またもっと上に積み上げ天井石を覆う形式の、古墳時代によく造られた石郭室のようなものではなかったか。それが水路側が地盤が軟弱であるため、上からの圧力によって沈下してその方向（東）へ傾斜し、反対側（西）が高く上へ出張ったのを、後世水田造成工事の際に邪魔だとして取り除いたもののように思われる。

石組の空隙に土師片１点、白釉磁器１点があった。白釉磁器は、少々薄弱だとする点もあるが、水田造成の時期を示す証しとみてはどうであろうか。

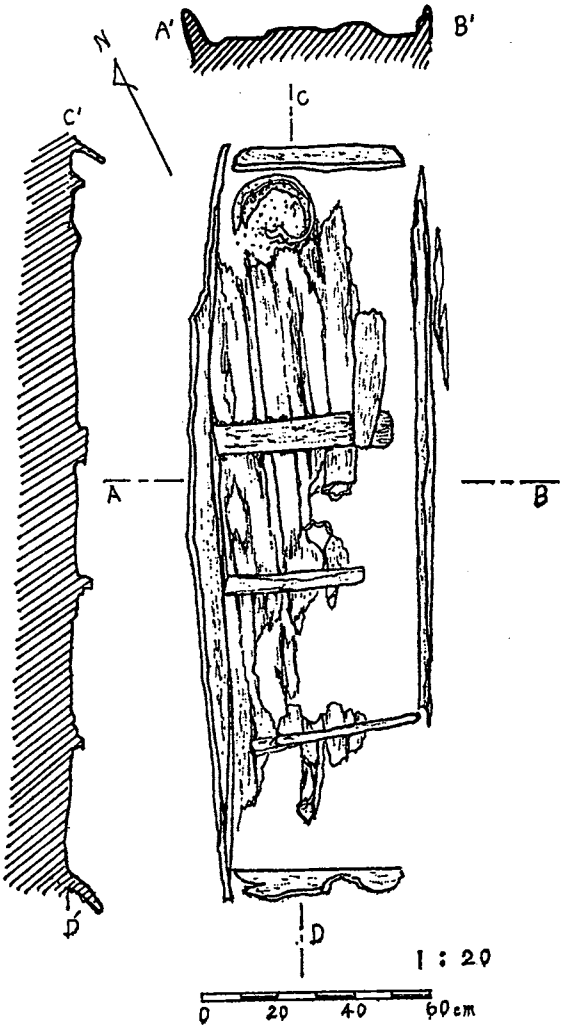
なお遺物については全部纒めて後述することにした。

（３）主体部

①　埋葬施設　木棺

大石とその上部の石組に掘り当ったとき、これが塚の内部主体とみて、この発掘は一応これで終止符をうつところであったのが、またとないことで、念のためにと思い、この際に主体部の下層はどうなっているのか確かめておく必要を考えついた。そこで石組の実測を終えると、その解体に取りかかった。最上部より１個ずつ遺物の混入にはとくに気を払い、石の組み方にも注意しながら各石を取りはずし、さらに直下に据えられた大石の据えぐあいに気を配り、重量物揚げ機械を使用し、萩原春幸氏の労をわずらわして引揚げた後下層の状況を検視したが、前項に記述した白釉磁器、土師器の細片各々１点のほかには、別段取りあげるべきほどの徴候は認められなかった。

第39図　　木棺実測図（棺蓋）



大石を引き揚げたあと、下層を20cmほどの厚さ排土する。東側の水路の右岸にあたる土層の、本来の青褐色に対して大石のあった部分は砂混りの茶褐色を呈する土層であり、すると、この現象は主体部を埋葬した土坑だとみること以外に考えようがなかった。そう考えつくと放っておけなくなって、同様の要領をもって20cmほど掘り下げたとき、数10cm² に亘って腐蝕木片様の植物質が平面に敷かれたか

の状態で認められた。数片を取り上げて検視すると、杉皮のようである。その出土地点を基点に、四方へ少しずつ範囲を拡張しながら排土を進めると腐蝕した木片が細長くつづいて、杉皮らしいものもさらに面積を増した。このようにして長さ2 m、幅50cmぐらいの長方形が形づくられた。木棺であることはもう明白となってきた。やがて骨らしい様相を呈する片々が排土に混入しているのに気付き、水洗いして検視したところ人骨にまちがいないことも分った。こうなってみると主体が別にあって、遺存状態も事のほか良好であることと埋葬施設が異例であることなど、ほぼ確実となった。それらのことに力を得て、仕損じてはならない、急いではならないと考え、細心の注意を払って除々にそして精密に腐蝕木片で境界された長方形内の排土を進めた。このようにして2日後杉皮と薄い杉板に被われた破れ目に人骨を認め、木棺の形状、用材、埋葬施設、遺体の配置状態などに至るまで把握し得るほどになった。

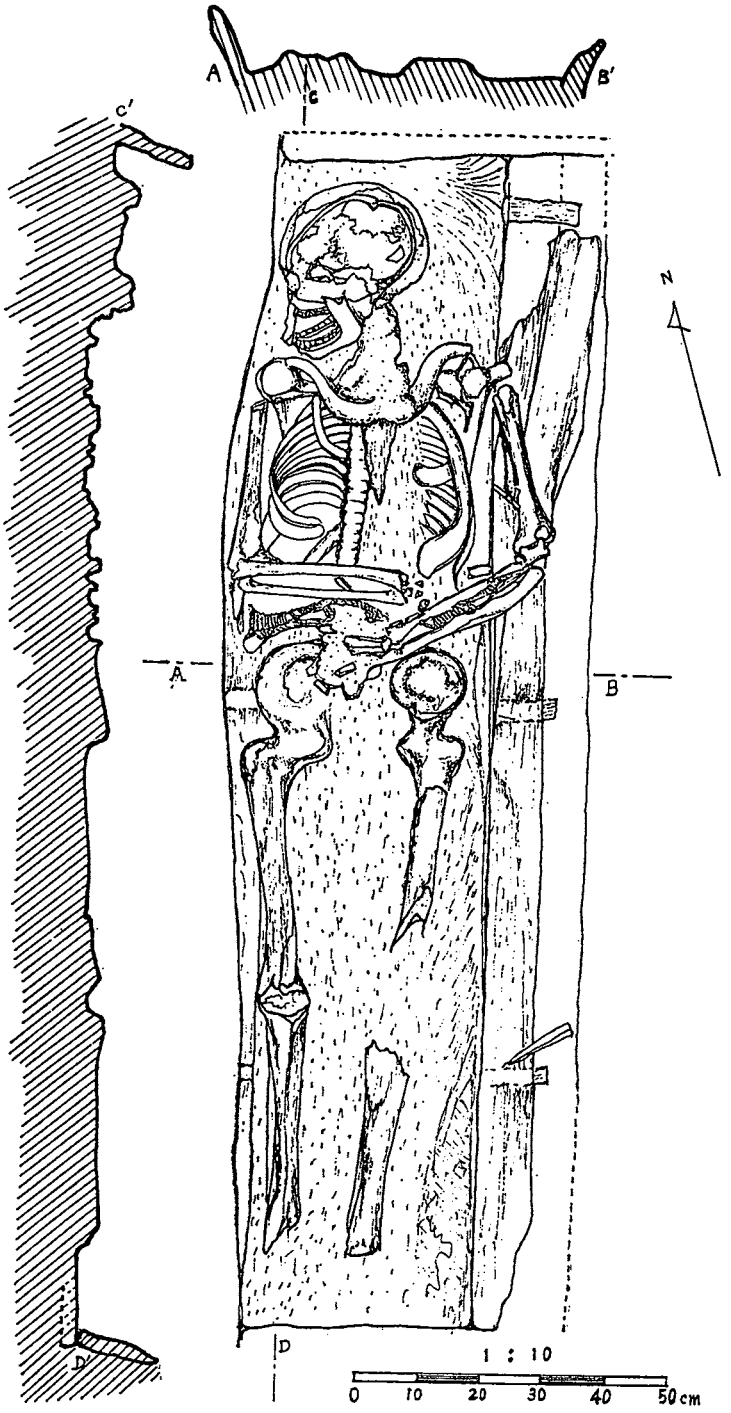
一方、発掘孔底は水田上面より70cmの深さ、埋立土の上面より140 cmの深さになっていて、東隣りの水路右岸壁と境する壁の厚さが50cmにおし詰められ、土層の軟弱な部分の隙間やもぐら穴などから洩水が激しくなって、作業に困難を生ずるようになった。粘土をねって水口を閉塞して発掘濠底のかたわらに水溜を設け、バケツで中継して排水するなどの余分の労が加担した。しかし常時水浸しになっているので、木棺、人骨も露出作業の進展する都度しぜんに水洗いされ、完掘時には同時に清掃までできていたという利点があった。

木棺は北端部で横幅が50cm、中央部で少々外へはみ出し55cm、南端部で52cm、全長194 cmの大きさをもつ。埋葬人体の上向きの場合、もっとも広い腰の部分にある西側壁の遺存状態の良好な部分で1 cmほどしかない薄い板であったため、腐蝕していくにしたがって、人体の圧力が加わって漸次外へはみ出したのであろう。東側では南端が全体の4分の1と、北端の隅が少しく消滅していたほかはよくのこり、杉の丸太を縦に割り、20cmほどの幅で表皮側（板表）を内に向けて立て、中味正目の部分の3 cm厚さの割板を同様の広さにして、側板より7 cmほど内に引っこめて釘づけにし、中央部と南半部の中ほどと北に寄ったところの3箇所に、1寸小割の杉材の横木を側板に鉄釘で取り付けにし、その上に幅37cm、長さ184 cm、厚さ4 cmの見事な樫の柾目板を人骨の部分に敷いて底板にし、1寸小割材の横わたしをこれに下から4本ずつの鉄釘で固定し不足分は薄い杉の柾目板で補なって棺身を造った状態になっていた。

棺蓋は棺身同様の1寸小割の杉角棒を中央に1本、南半部の中央に1本、北半部の中央に8 cmの幅の薄手の杉板をそれぞれ横にとおし、内がわ（裏）は薄い杉板数枚を継ぎはぎにして、横木に釘でつけた形跡が認められた。なお棺蓋上面でも、棺床でも杉皮の夥しい出土を見たのであるが、これについては後項人骨で記述することとする。

木棺の遺存が極めて良好で、構造が完全に近く把握でき、さらには木質までも判定可能であったということはめったにないことだと思うが、これは周囲の土質が、少量の砂土を含む腐蝕質の多い泥土質で水田地帯特有の水分を多く含む泥岩層の中にあったからであることはいうま

第40図　　主体人骨実測図



でもない。

② 主 体 人 骨

主体の人骨はまったく完全なすがたで遺存していた。前項に述べた通りの木棺内、床板全面に杉皮数枚を重ねて敷き、その上の西に片寄せられた樫板のま上にあたるところに、上に向き足をのばし、頭を北にし顔を西に向け、右手をやや上位にした両手は何かを抱く格好で腹の上になり伸展葬の形式におさめられていた。弥陀のお浄土は西にありという仏教伝来後の浄土宗の頭北西顔の葬法によるものであるかどうか、それはよく分らない。

筋肉や内臓が腐蝕するに伴い、上からの土圧が加わって人体は圧迫されて、全体は扁平になり、頭骨も押しつぶされて中は大きくくぼんで底板にくっついていた。両手には何か異質の細長いものが2本ずつ平行についたのが認められた。よく洗って検視すると、細糸数本をあつめて八つ組みくらいに編んだひもであることが判明した。さらにその端末に同じものを7～8回横巻きに巻きつけてあった。

ひもは袖括とみるよりほかに思い当たるものがなく、果してそうだとすれば、袖括のある形式の着物を纏っていたということになる。

脚部の床面が多少低くなっていたので、排土排水の都合上誘導路を通す際に人骨に気付かず欠損した箇所があるが、その部分は両足先と、両膝の部分である。人骨遺存の事実を知る端緒をつくったのがこの部分の破片であった。

人骨は一見して全体的に太く、たくましく、歯も全部ついており何らの病状も認められず、身長も180 cmの巨体を有する熟年30才前後の男性と推定される。死因については決め手になるものも発見できず不明である。

③ 副葬品と年代について

塚の築かれた時代を判定するとき、その決め手となるのは、どうしても副葬品、遺物が重視される。そのことで、この場合では塚の内部主体に後世の破壊箇所もなく、副葬品が納められたとしたとき盗掘も考えられない。とくに主体部が原状を完全に止めているので、発掘作業では副葬品の配置に特段の留意を払ったにも拘わらず、あまりみることができなかった。それにあたるものとして、外面を黒漆、内面を茶色味を帯びた朱の漆で塗られた木椀の細片1点が人骨の左ひじ付近の棺側に付着して見つかっている。そのほかに上層の石組中から土師器細片と有田焼細片各1点と、木棺外北側より細片土師器1点の出土ぐらいであった。

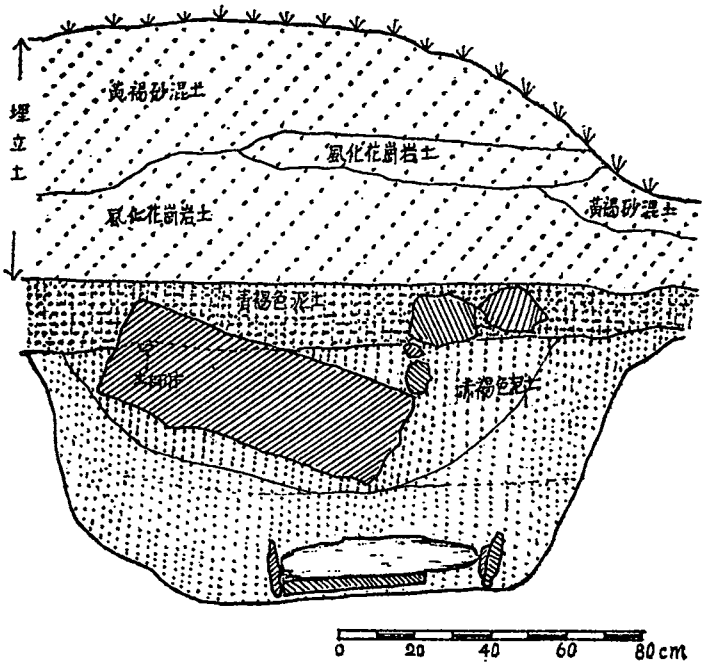
いずれも4点細片ばかりの取るに足らぬ貧弱なものであるが、木椀について少しく考えてみることにしよう。昭和48年玉名市高瀬本町通りの繁華街で下水道工事にかかって各種多数の遺物が発見されて、中世上流階級の住居群の遺跡であることが確認された。それが何で分ったか、というのは言うまでもない多数出土の遺物である。地表下3 mの深さのところから、中国貨銭10数個、青磁碗破片10数個、木材片、木製箸無数、獣魚骨多数、マゴンドウ鯨の骨大型10

数個、土師器の糸切皿若干、瓦器質土器は釜、にな、にしなどの小巻貝多量が挙げられるなかに、木製漆仕上椀1個が含まれている。これは外側は黒漆地に朱色で笹の葉をちらし、内側は朱の漆塗りに仕上げてあり、北牟田塚出土椀は細片ではあるが、口縁部がついていてその部分から下へ彎曲するスロープの状態と漆仕上げとその配色に至るまで双方の共通点が多く、時期、製作の場所等も同じだと思われる。

10数個の貨銭は「天禧、天祐、元豊、政和」他すべて1100年代中国北宋の年号を刻銘するものばかりであった。因みに近郊地で貨銭の出土例は玉名郡玉東町西安寺で459個あり大半が北宋銘を見、玉名市築地の今見堂遺跡出土の20数個もまた同様の北宋のものばかりである。このことから推せば、同時代の銭貨ばかりでなく、各遺跡から青磁、木椀など共伴しているので、北塚の場合、青磁も貨銭も出ているわけではないが、木椀一つでも同時代のものであろうということは推察がつくのではあるまいか。また同塚遺物の土師片は、平安時代から鎌倉時代にかけた特有のもの、さらに挙ぐれば人骨の両腕に付着した2条ずつのひもを袖括と見るとすれば、当代の衣服に水干、直垂長絹の類が考えられる。そう考えてみると出土のひもも年代判定の有力な決め手の一つとなるであろう。

なおまた木棺について検討するならば、下益城郡城南町塚原古墳群発見の木棺では、弥生時代から古墳時代へ推移するころのものだと聞いており、そうだとしたら最古の木棺だといえる。厚板を用い、前後の木口板を両側壁板の内にはさみこみ、さらにわずか内の方へずらして装着した組み方になっているのに対して、玉名市伊倉堂山の報恩寺跡墓地にある江戸時代の明人振倉謝公の木棺は、四隅を直角に合せ、大型鉄釘4～5個ずつで接合して造り、それが漆喰郭室の中に収められていた。勿論それらのものをもってその時代の

第41図　　北側断面実測図　1：20



木棺を代表するというわけではないが、それぞれ特徴をもっていて、木棺の研究資料とはなるであろう。塚原古墳群発見のものはもっと古い形式で、日本最初の型ともいえる。明人謝公の木棺は明の型式か日本型であるかその点が問題だが、墓標が日本式なので主体部も同様と見て然るべきであろう。その中間期のものが北牟田木棺だということも考えてみた。

いろいろと述べたが、北牟田塚は中世期に築かれ、北牟田地方を開拓し、産業、文化を進めた青年支配者を葬むった墳墓であると結びたい。

5. あとがき

北牟田塚2基のうち南塚一基の発掘に至った端緒から発掘調査の結果に及んで述べた。なにしろ、玉名地方ではこの種の丸塚と称されるものや、同様の封土をもつ墳墓は山手の集落の中や丘陵の上、また集落付近の峡い水田中に分布していることは前にも述べたのであるが、しかしこれらがすべて中世の単独墳墓であることは断定しがたく、発掘して始めてそれがはつきりするのであることは申すに及ばない。ところが残念にして発掘された例がなく、したがってこの種（中世）の墳墓の発掘は始めてのことで、比較検討するための資料がなく、さらに加えて発掘はしたが副葬品がなく、出土した遺物も取るに足らないものばかりであったため、年代の判定や被葬者の身分、当地方の社会組織等を考えるのに非常な困難さを覚えずには居られなかった。

昭和23年ごろ、荒尾市本村、玉名市高瀬間の産業道路（現在の国道208号線の一部）の開設工事が進められ、その後この道路はさらに双方に延長されて現在の国道208号線となった。その折玉名市築地字今見堂付近で遺跡にかかった。そのとき多数の五輪塔の断片や青磁皿や、土師器の糸切皿にあわせて20数個の中国北宋時代の貨銭等が出土し、そのかたわらに土葬人骨2体も発見された。ここの地名が「今見堂」というところから、中世期の寺院今見堂跡であることが明白となった。出土の人骨は土葬のまま頭部はほぼ完全で、他は大腿部のほかはほとんど消滅してしまっていた。頭部を南へ向け南北に伸ばして埋葬されていた。年代は五輪塔、糸切皿、青磁等の遺物が示すとおり平安時代から鎌倉時代のもの、ましてや出土の貨幣がそのものずばりその年代を示している。ここの場合北牟田塚と私の考えたうえで一致共通する点は成立の年代である。他は性格的に趣を異にしているが、人骨の埋葬が仏教伝来以後といえど、北牟田塚のような「頭北西顔」の法式に限られたものでないこともうなずけるであろう。

次の事例としてさらに考えてみたいのは、前にも述べた玉名市高瀬の出土例である。その一つである木椀は、外は黒漆地に朱の笹模様を浮かし、内は朱漆りという普通型の高台付きの漆器である。同伴出土の青磁では高台付碗や、その種の破片が多かったなかに白の象嵌入り鶯色地の小さな高坏が含まれている。いずれも中世にもっとも多い種類のものと見られるし、それ

に加えて前記の今見堂遺跡とまったく同じ中国北宋貨銭10数個がここの年代を実証している。共伴の漆器の椀が、北牟田塚のが細片ではあるが、口縁部とその胴部にかかる彎曲の状態でよく分るようにほとんど同大同形である。年代推定の好資料としてここで用いた。

埋葬人骨の腕のひもについては、着衣の袖絞りひもとみて、平安時代にはじまり、中世盛んに官人、武家たちのあいだに用いられた水干直垂その他にひもをつける。したがって被葬者はその類を着用する身分にあった人だということになり、北牟田をはじめ現在の川島、小野尻、小島までぐらいは支配したろうという見方まで生じる。

北牟田塚の発掘によってこの地方の歴史を知ることができ、また中世の支配者級の葬法も同時に解明し得たのである。学界に及ぼす影響もまた大きいと思う。地元の人たちはむかしは海であったのが、加藤清正が横島に石塘を築いて以来陸地になったと信じていたが、発掘によって清正以前すでに陸（島）であったことを実証した。

塚の名称については、古墳時代の古墳としては所在地の上から考えても形体上から見ても、趣が異なるようで古墳名では間違いになるし、地元で塚と呼称されているのでそれをとり、所在地の小字名の居屋敷だが同名は県下至るところ極めて多いので、混同しやすい。大字名であったら別に同じ名称も、遺跡もないので「北牟田塚」と呼ぶことにした。

この発掘調査が円滑に進み、大成功のうちに終了し得たことは、市教育委員会の方々、土地所有者萩原春幸氏御夫妻、地元の代表出口一氏等の熱心な御援助によるものである。茲に記し止めて深謝の意を表したい。

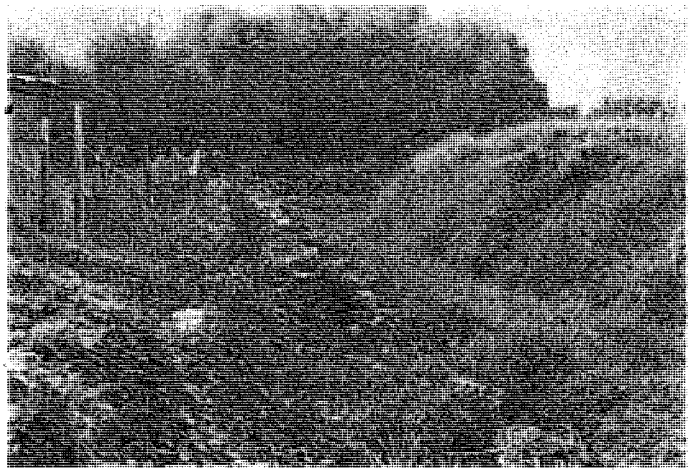
（田添夏喜）

5.　鹿央町上広西屋敷近世墓地遺跡

1.　は　じ　め　に

昭和53年度、鹿本郡鹿央町では、同町内の吉井原、寺米野両地区の県営圃場整備事業を行った。工事に先立ち県文化課では同地区内に点在する埋蔵文化財の発掘調査を実施した。その結果吉井原地区の西屋敷遺跡からは平安時代前期頃の住居跡や、高床の倉庫のものと推定される柱穴等が、また、寺米野地区からは120基にのぼる甕棺が発見され、弥生時代の一大甕棺墓地であることが調査により確認された。

第42図　　近世墓周辺の状況



これらの2遺跡以外に吉井原台地の東端部一帯の畔に、地元住民等が供養する11個所にのぼる中・近世の墓所と見られる小マウンドおよび帯状の空地が存在するため、工事着工以前に早急に調査を済ませるよう地元役場、地元民より要請があった。このため2遺跡の本調査に着手する以前の8月下旬に一週間に亘って調査にあたった。しかし調査費は皆無で作業員を雇う余裕がなく、地元の人々の遺骨収集に立合う形を取ったため、人骨収集後の掘り返された跡地を調査員2人で削り、墓坑の形を確認した位で、図面はおろか十分な調査は実施できず、単に埋葬状況を記録に留める程度に終った。

2.　城丸組の先祖祭と地名

小規模の墓所が散在する吉井原台地が、畑地として開発された時期は明らかではない。しかし一般に台地の開発は江戸初期に多く見られるのでこの頃の開発と考えて大過あるまい。

この吉井原台地の東端に11個所にものぼる小規模の墓地が存在するが、調査にあたり便宜上北側から順にA～Kの名称を付した。

この内、上広地区に近いBからK墓については、竹製の花立が打たれており、毎年、上広地区の小組のひとつである城丸組の21戸が、1月20日に先祖祭を行って来た。この祭の起源は明らかではないが、当日は城丸組の全員でお墓まいりをした後、その年の座元の家に集まり僧侶を招いてお経を上げて貰う。この行事は今も続いている。

城丸組は、これら小墓地の所在する一番近くにある小組で21戸から成立っている。小組における姓は木本姓が8戸、佐野木姓が7戸、他は野村3戸、高木2戸、村上1戸である。一番多い木本姓は昔は、城本と書いていたといい、木本重次氏（62才）宅には、これに関連した古文書が残っているという。

なお隣りの組は一城組と呼ばれ、一城、一本の姓が多い。また、各墓所が点在する場所は、西屋敷と呼ばれ現在畑地となっているが、この調査の後に実施した発掘調査で家屋の柱穴や、それを取り囲む鉤状の空堀の存在が確認され、ここから青磁碗破片等が出土した。中世時、この場所に土豪の館が存在したことは明らかで、西屋敷の小名に過去における館の存在が留められていることが判明した。

この地点は吉井原台地の東端にあたり、すぐ東側は斜面となり、その直下に現上広集落が位置している。小組名として残る城丸組といい、その主体を占める木本（城本）姓といい、また隣の一城組にしても城に関する名称でありこの西屋敷と関連付けて考えると理解できる事柄が多い。

3. 西屋敷墓地の成立時期

西屋敷内に点在する墓地は、畑の畔や農道路傍等に帯状の空地として存在しており、高さ20～30cmの僅かな盛上りが見られるのみであるためはっきりした年代は不明である。

しかし、B墓地からは、倒れた状態で宝暦13天と文化2天の年号を持つ墓石が発見され、またそれ以後の埋葬は見られないので、文化2年頃をこの墓地群の下限と見て大過あるまい。

他に、年代の決め手となるものはないが、中世時には、この場所に豪族の館等が存在していたことが発掘調査結果から判明しており、また、墓所が農道や畔に平行して設置されている事実等から、畑地として開墾された後の墓所であることは明らかである。先にも述べたようにこの台地の開墾は江戸初期頃と推定されるので、上限を最も古く考えても江戸初期を越えるものではない。また、墓坑内人骨は、腐蝕度の速い酸性土壌に埋葬されている割には保存状態が良く中世時までさかのぼれるものとは考えられない。また、各墓地に打たれている、花立の数が地下の墓坑の数とさほどの差異がない事実等もあまり古い時期の墓でないことを裏付けるものであろう。恐らく江戸中期頃から形成され始めた墓地だったのではなかろうか、ただ、台地斜面の雑木林内にあるK墓所についてのみは、人骨は消滅したり骨粉となっており、また墓坑周

囲より中世時の施釉甕片が出土しているので中世末頃の墓である可能性は残る。

また、各墓所における墓坑は、墓地の形状に一致して一列に並び、かつ墓坑の重なり、切り合いが認められない。これは、墓地としての埋葬時期が短期間で終ったことを物語っている。被葬者は、この場所より一番近い城丸組の人々の先祖であったと思われる。

4. 調 査 結 果

先にも述べたように、今回の調査は墓所改葬の人骨収集の立合い程度のものであったため、精査できぬきらいがあったが、(1)地上の形状 (2)墓坑の形状 (3)人骨の有無及び保存状況 (4)埋葬状態 (5)副葬品の有無、等の各項目について調査を進めた。

(1) 地 上 の 形 状

墓地は畑地の畔や農道に沿って帯状の空地として所在し、小規模の盛上りが数か所で認められるだけで、その空地に並べて立てられた花立が僅かに墓地であることを示すのみであった。墓石としては、B区墓所のB—2で「宝暦十三天、釈西入忌未三月廿四日」の銘のある墓石、B—3に「文化二丑天、釈妙誓三月十日」の刻銘のある墓石の計2基が確認されたのみで他には認められなかった。

元来粗末な木製の墓標もしくは自然石等が墓の目印として立てられていたのが、永い年月を経て朽ち果てたり、失なわれてしまったものであろう。また僅かに盛上げられた土饅頭も大半は洗い流され消滅してしまったものと思われる。

(2) 墓 坑 の 形 状

墓坑の形状については、長軸、短軸、深さ、主軸の方向、かたちの各項目に関して調査可能であった32基を記録に留めた。

平面上で見た墓坑のかたちは正方形と長方形の二種類が認められるが、これは内部の遺体の埋葬状態による差異である。32基のうち25基が長方形、6基が正方形、不明が1基で、長方形をなす25基の墓坑の長軸の平均値は、102.68cm、短軸の平均値が74.64cmで両軸の数値の差が大きい。また、方形をなす墓坑は長軸が95.6cm、短軸は90.6cmを計り両者の差異は少ない。また墓坑の深さは長方形型で平均が118.65cm、方形型が137.5cmで方形の方が深くなっている。

これらの異差は内部に納められる棺のかたちによるもので、長方形の墓坑内には長方形の寝棺が、方形の墓坑には座棺が納められていたことが判る。

長方形墓坑における長軸の方向は、ほぼ南北に求めているものが多かった。

(3) 人骨の保存状況

殆んどの墓坑から保存状況の差こそあれ、人骨が出土した。乾燥度が高く酸性度の強い火山灰土地帯の台地上にある墓所としては、保存度は良好で、ほぼその埋葬状況を把握することができた。

人骨によって得られた知見は以下のとおりである。C—6号墓は、他に比べ、墓坑が小さく、骨の腐触が激しく歯の数2本が残存していたのみであった。小児埋葬の墓と推定される。またC—7号墓の、大臼歯は咬耗が激しく（Broca2～3）、熟年のものと考えられる。C－2、I－4号墓等の屈葬人骨は保存が良く、I－4号墓人骨はM_3がはえておらずまた、頭蓋骨の状況から成人男性（20～25才）と推定された。その外、I－2号墓はJ区墓所の一番末端にあり、このグループの中では最も新しい時期の埋葬とも考えられる。

これらの出土人骨については、城丸組の先祖ということで組の人達によって即座に取り上げられ、納骨堂へ一括納められたため、学術的調査の機会は得られなかった。

(4) 埋葬状態

B区墓所からJ区墓所にかけて設けられた32基のうち埋葬状況が確認できたのは、23基で9基については、人骨が消滅しており把握できなかった。

この23基のうち18基が北枕西向きの右側臥屈葬、1基が南枕東向右側臥屈葬で、残りの4基が座臥屈葬であった。

1基だけ南枕東向の右側臥屈葬があったが、これは、棺を墓坑に納める時、方向を誤ったためと思われる。このまま向きを変れば北枕西向きの右側臥屈葬になるからである。

死者を北枕にして安置するのは、現在この地方で一般に見られる慣習である。また顔面を西向きとするのは、西方に阿弥陀仏の浄土があるという考えによるものであろう。また遺体を側臥としたのは、この姿が寝た場合の一番安楽な姿勢であるためと思われる。

しかしながら、遺体は長さ82cm、幅52cm、深さ27cmの信じ難い程の小形の棺に身体を折り曲げられた窮屈な姿勢で納められていた。これはI－6号墓の例であるが、棺の大きさが確認できた他の墓においても、同様の状態が確認できた。遺体の姿勢から、おそらく遺体の両手両膝は紐等で体に繰り付け固定させた後、納棺したものと推定される。

座臥屈葬は4基あったが、確認できたのは1基のみであった。しかし、方形の墓坑を持つ墓は、その形による制約上、すべて座臥屈葬であった可能性が強い。これらの人骨の向きは、明らかに出来なかったが、他の中世墳墓の調査例から推測すれば西向きであったことが考えられる。

これらの遺体は両手を合掌させ、数珠が掛けられていたようで、胸の周辺に数珠玉が散乱し

ていた。数珠玉が検出されたのは、3例に過ぎなかったが、他は木製の数珠のため腐蝕してしまったのであろう。

これらの遺体が納められた棺の形状は、墓坑の形状により縦型の座棺と横型の寝棺の二種があり、主流をなすものは小型の寝棺であったことは明らかである。しかし、棺材の木質部が完全に腐蝕してしまっているため、墓坑内に残された棺材の圧痕とその空洞からその形状を、また角釘に錆付いた木質部により棺材となった板の厚さを知る以外に手段はない。

好都合なことにⅠ－6号、Ⅰ－11号の2墓により墓坑内部の棺の形状が確認できた。

Ⅰ－6号墓の棺は長さが82cm（2尺7寸）、幅が57cm（1尺8寸）、深さ27cm（8寸9分）の木製の棺であったことが判明した。またⅠ－11号墓では長さ92cm（3尺）、幅が40cm（1尺3寸）で深さは確認できなかった（巻末写真29　下段参照）。棺の墓坑内での位置はN－35°－Wで墓坑の掘り方よりも若干西寄りに埋納されていた。

棺材となった板の厚さは、釘に付着した木質部から推定すると1.3cm（4分）の厚さを持ち4分板だったようである。現在の棺に較べると、意外に厚い板を使用していたことが知られる。用材の種類は、判明しないが、おそらく杉材等ではなかったろうか。釘の長さはC－1号墓では4.6cm（1寸5分）、3.6cm（1寸1分5厘）等で、Ⅰ－6墓では3.7cm（1寸1分5厘）、3.5cm（1寸1分）、3.3cm（1寸5厘）等が多かった。使用された角釘は、手造りであるためか、その規格は寸分違わぬという訳にはいかず若干の、長短が見られる。また使用時に手元にあった釘をその部分部分に応じて適当に使ったことも考えられる。しかしⅠ－6号墓の場合1寸釘が主として使われたようである。一個の棺での釘の本数は、Ⅰ－6号墓の場合、木口に2本ずつ10cm間隔で使用されていた。この釘は、棺の角の部分に突き刺ったまま残存していたため明らかである。釘の使用本数が少ないのは、棺の角部分等に木組がなされていたからであろう。因みに、中世時の家屋等に釘の使用が今に較べ少ないのもこれと同様の理由によるものと思われる。

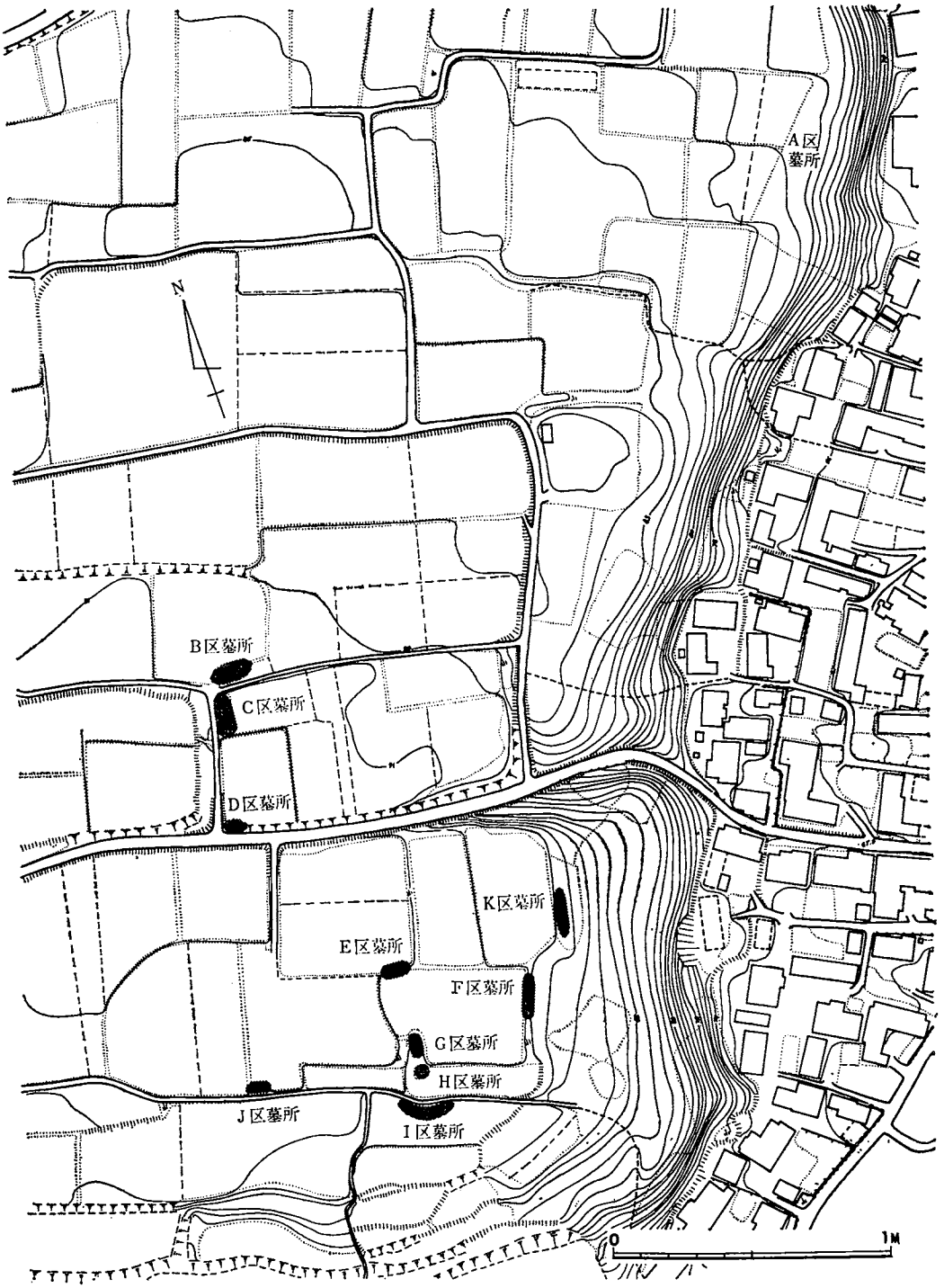
(5) 出土遺物について

副葬品は、ガラス製の数珠がC－1号墓、C－2号墓、C－3号墓等3基の墓坑から出土しただけで他には認められなかった。遺物としては先述の如く、棺材をとめた鉄製の角釘が墓坑より出土した。

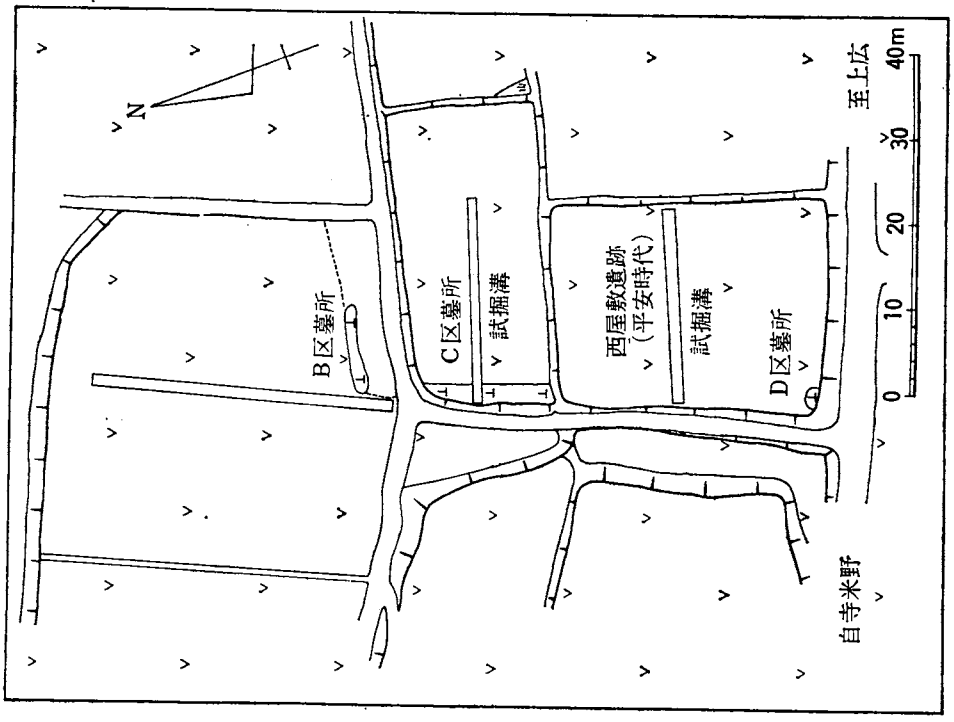
ガラス製の数珠玉は、永年地中にあったため表面は腐蝕し、白色ないしは乳灰色を帯び、一部剝離現象を起しているものも見られた。

C－1号墓からは、水晶玉3、ガラス玉4の計7玉出土した。雨あがりの後日再び現場におもむいた時、排土中より3個ほど発見したので総計10玉になった。玉は3個とも直径は4.5mmと小型で腐蝕が進んでいる。水晶玉は直径7mmを測り胴部に稜線が巡り、算盤玉の形状に近

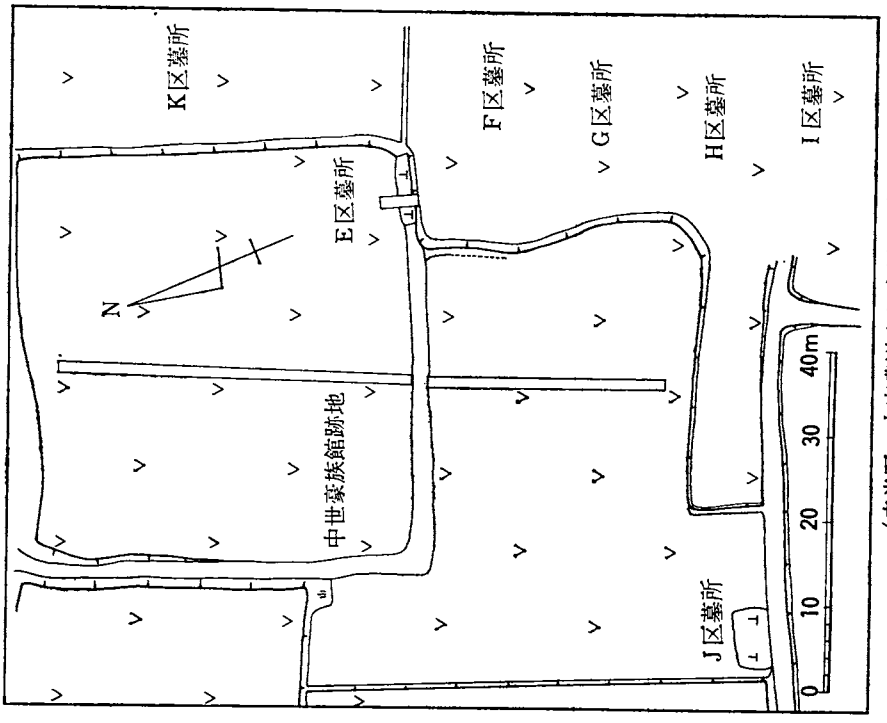
第43図　　上広西屋敷墓所周辺地形図



第44図　　上広西屋敷墓所部分地形図（その1　その2）



（寺米野～上広農道より北側一帯）



（寺米野～上広農道より南側一帯）

表 7　　上広西屋敷墓所墓坑および埋葬状況一覧

No.	墓坑の形状					人骨の有無・保存状況
	長軸	短軸	深さ	方向	かたち	
1	130 (4.29)	105 (3.46)	160 (5.28)	N—0°	長方形	有・良
2	100 (3.3)	100 (3.3)	135 (4.46)	N—0°	方形	有・良
3	不明	不明	60 (1.98)	不明	方形？	有・不良
4	115 (3.79)	80 (2.64)	130 (4.29)	N—0°	長方形	有・良
5	123 (4.05)	76 (2.51)	140 (4.62)	N—0°	長方形	有・良
6	83 (2.74)	83 (2.74)	145 (4.79)	N—10°—W	方形	無
7	101 (3.33)	70 (2.31)	110 (3.63)	N—20°—E	長方形	有・良
8	105 (3.46)	96 (3.17)	123 (4.05)	N—0°	長方形	有・良
9	66 (2.18)	50 (1.65)	110 (3.63)	N—0°	長方形	有・不良
10	110 (3.63)	84 (2.77)	110 (3.63)	N—5°—E	長方形	有・良
11	90 (2.97)	65 (2.15)	102 (3.36)	N—10°—W	長方形	無
12	98 (3.23)	70 (2.31)	100 (3.3)	N—20°—E	長方形	有・良

単位 cm （ ）尺寸

埋葬状態	副葬品の有無	土地所有者	備考
北枕西向右側臥	なし		B—1 3基ある内の一番東側に存在。墓坑内部の南西隅より角釘2本出土
座臥？	なし		B—2 墓坑上部に宝暦十三天釈西入霊未三月廿四日の墓石あり。 墓坑内より角釘6本出土。
座臥？	なし		B—3 ユンボで確認中墓坑が浅かったため破壊。上部に文化二丑天、釈妙誓、三月十日の墓石あり。
北枕西向右側臥	数珠7（水晶玉3 ガラス玉4）		C—1 Cグループは花立8つ存在したが、実際は全部で10基確認された。内一番北に存在するもので墓坑内部より角釘20本出土
北枕西向右側臥	数珠26（ガラス玉）		C—2 数珠は胸の前で組み合わせた手の付近に認められ丸く連続して発見された。おそらく手にかけて埋葬したものと考えられる。
不明	なし		C—3 墓坑北辺部に、北側に伸びる長さ65cm、幅37cmの掘り込みが付属する。底はスリバチ状で中央部が一番深い。
北枕西向右側臥	なし		C—4
北枕西向右側臥	なし		C—5 試掘で確認した墓坑で、人骨はその際取り上げた。一部下肢骨が残存していた。
北枕西向右側臥？	なし		C—6 他の墓坑に比べ著しく小さい。内部からは歯が数本確認されたのみで、あるいは小児埋葬の墓坑かも知れない。
北枕西向右側臥	なし		C—7 人骨の大臼歯は咬耗が激しい（Broca 2〜3）。熟年のものと考えられる。
不明	なし		C—8 墓坑が浅く削平時にカットされた可能性もある。
北枕西向右側臥	なし		C—9

No.	墓坑の形状					人骨の有無・保存状況
	長軸	短軸	深さ	方向	かたち	
13	110 (3.63)	78 (2.57)	110 (3.63)	N—10°—W	長方形	有・良
14	120 (3.96)	65 (2.15)	180 (5.94)	N—0°	長方形	有
15	107 (3.53)	82 (2.71)	182 (6.01)	N—10°—E	長方形	有
16	125 (4.12)	85 (2.81)	110 (3.63)	N—20°—E	長方形	有・良
17	100 (3.3)	80 (2.64)	112 (3.09)	N—10°—E	長方形	有・良
18	95 (3.14)	65 (2.15)	126 (4.15)	N—10°—E	長方形	有・良
19	85 (2.81)	75 (2.48)	130 (4.29)	N—20°—E	長方形	有・不良
20	不明	不明	140 (4.62)	不明	不明	有
21	89 (2.94)	60 (1.98)	135 (4.46)	N—10°—E	長方形	有
22	75 (2.48)	80 (2.64)	150 (4.95)	N—10°—E	方形	有
23	110 (3.63)	90 (2.97)	170 (5.61)	N—10°—E	方形	有
24	110 (3.63)	100 (3.3)	165 (5.45)	N—10°—E	方形	有・良(特に)

単位　cm　（　）尺寸

埋葬状態	副葬品の有無	土地所有者	備考
北枕西向右側臥	なし		C—10
北枕西向右側臥	なし		E—1　Eグループは掘鑿前、6つの花立が存在したが実際に確認されたのは2基である。上部に小マウンドをもっていた。
北枕西向右側臥	なし		E—2　墓坑の南側に幅55cm深さ15cmの溝状遺構が走り、墓坑はそれを切って掘り込まれている。
南枕東向右側臥	なし		G—1　G—グループは花立4〜5箇所存在したが実際は3基確認。これは最も北側に位置し、墓坑内に焼灰（藥灰）が認められた。
北枕西向右側臥	なし		G—2　試掘時に確認した墓坑で、北枕右側臥の屈葬人骨がはっきり確認できた。
北枕西向右側臥	珠数30(ガラス玉)		G—3　墓坑内より角釘出土（数不明）
不明	なし		K—1　Kグループは台地東辺の山林内に所在し6箇所に花立が存在した。台地縁辺にあるため確認が困難である。付近から陶磁片出土。
不明	なし		K—2　削平時に人骨を確認したが墓坑は明確にできなかった。台地縁辺は土層の乱れがあり、確認は困難であった。
北枕西向右側臥	なし		I—1　aグループの墓坑(I—1〜I〜7)は東西方向一列に並び、bグループ(I—8〜I〜11)は東西に千鳥足状に並ぶ、角釘2本出土。
座臥	なし		I—2　aグループの埋土は黄灰褐色と紫灰褐色の粘質土層から成っている。安山岩のバイラン土壌か。
座臥？	なし		I—3　墓坑内より角釘1本出土。
北枕西向右側臥	なし		I—4　人骨は非常に残りがよく、頭蓋骨の状況から、成人男性（20〜25才）と考えられる。（M_3が生えておらず）

No.	墓坑の形状					人骨の有無・保存状況
	長軸	短軸	深さ	方向	かたち	
25	85 (2.81)	70 (2.31)	135 (4.46)	N—30°—E	長方形	有
26	114 (3.76)	90 (2.97)	170 (5.61)	N—30°—E	長方形	有
27	90 (2.97)	65 (2.15)	143 (4.72)	N—30°—E	長方形	不明
28	68 (2.24)	55 (1.82)	140 (5.62)	N—30°—E	長方形	無
29	95 (3.14)	65 (2.15)	135 (4.46)	N—30°—E	長方形	有
30	95 (3.14)	65 (2.15)	123 (4.05)	N—14°—E	長方形	無
31	121 (3.39)	77 (2.54)	162 (5.35)	N—20°—E	長方形	有・良（特に）
32	130 (4.29)	93 (3.09)	123 (4.05)	N—20°—W	長方形	有

※A地区（花立1）　台地の縁辺に存在し確認できなかった。すぐ南側に一段高い楠の大木のある畑があり、この付近に墓地があるのかも知れない。現在ある花立は、移動している可能性が強い。

※O地区（花立1）　道路崖上にあるが、戦後道路幅を拡張する時、移動したものらしい。墓坑は確認できなかった。

※F地区（花立3）　台地縁辺にあり確認できず。台地縁辺は黒色土が厚く堆積し、しかも雑木等の根が多く確認が困難であった。

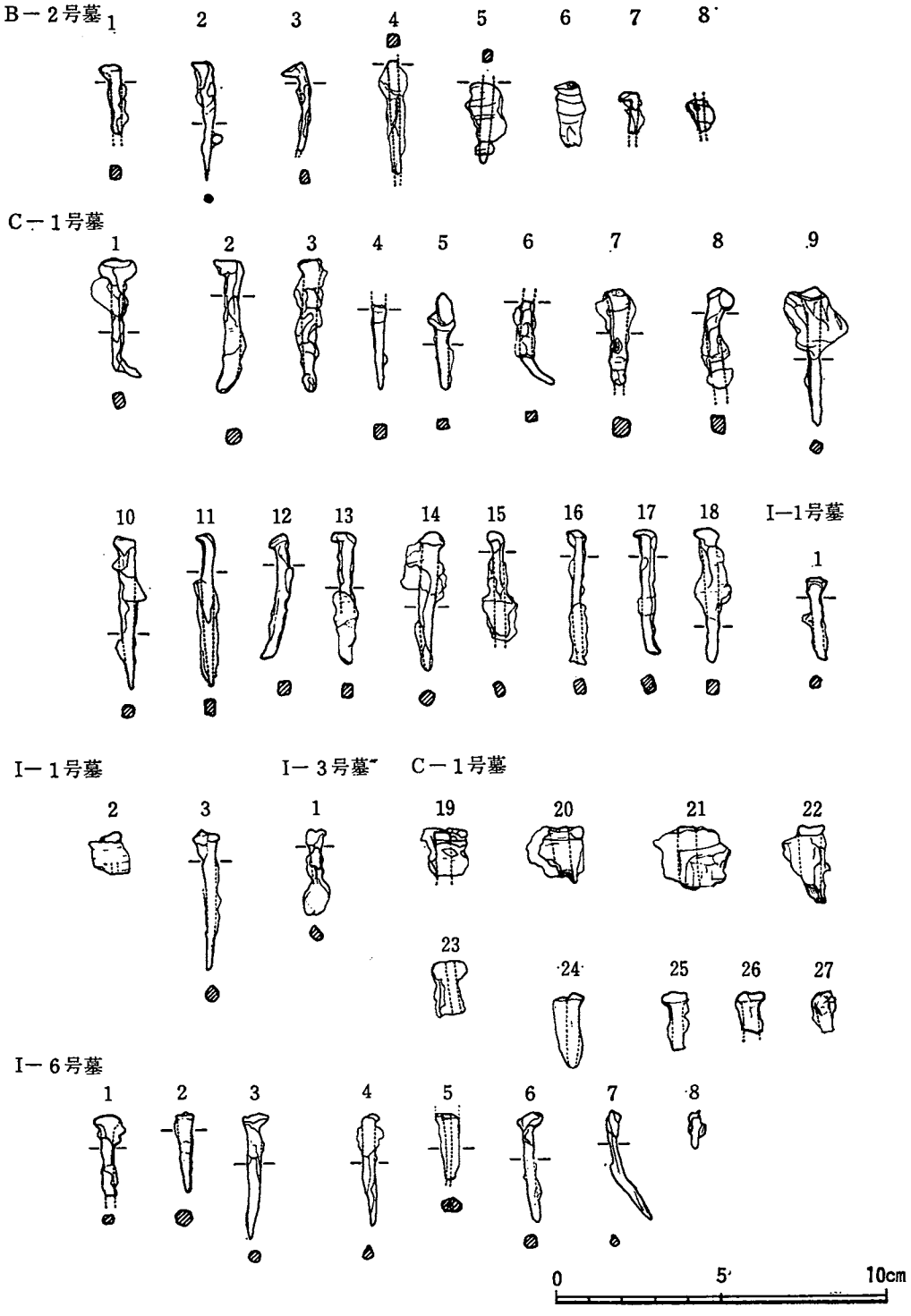
※H地区（花立4—5）　当初径3m、高1m程度のマウンドがあり、その周囲に花立をたて祭ってあった。試掘時、墓坑らしきものが1基確認できたが、人骨は発見できなかった。元来ここは台地の高い部分にあり、しかも墓地だという伝承で開墾し残した部分かもしれない。

単位　cm　（　）尺寸

埋葬状態	副葬品の有無	土地所有者	備考
不明	なし		Ⅰ—5　墓坑は隅丸の長方形である。
北枕南向右側臥	なし		Ⅰ—6　墓坑内に棺の圧痕が残り、棺の大きさを想定することができる。長さ82cm（2尺7寸）幅57cm（1尺8寸）深さ27cm（8寸9分）3.5cmの釘が7本ほど出土し、木口に2本づつ、10cm間隔で打たれたことが明らかとなった。
不明	なし		Ⅰ—7　墓坑は隅丸長方形である。
不明	なし		Ⅰ—8　bグループの墓坑埋土は、黄色砂質土層か、またはそのブロックが混入する。Ⅰ—8は小型で小児用か。
不明	なし		Ⅰ—9　墓坑半分はセクションにかかり未調査。
不明	なし		Ⅰ—10
北枕西向右側臥	なし		Ⅰ—11　墓坑内部に棺が確認できた。長92cm（3尺4分）幅40cm（1尺3寸）で方向は、N—35°—Wとなり、墓坑の掘り方よりも若干西よりである。人骨の保存が非常によく指骨まで残存していた。
北枕西向右側臥	なし		J—1　墓坑周辺より須恵の皿（高台付）が出土、Jグループはもともと3箇所の花立が存在したが、確認できたのは1基のみであった。

（一覧表作成・下村　智）

第45図　　上広西屋敷出土遺物



い。算盤玉より胴部に、やや丸味を帯びる点が異なる程度である。

C－2号墓からは、組合せた手の付近よりガラス製の数珠玉が丸く連続した状態で出土した。この数珠玉は直径4.5㎜から7㎜位の大きさで、ほぼ円形に近い玉である。手にかけた状態で埋葬したものであろう。

C－3号墓では、30個の数珠玉が出土した。大きさは直径5㎜前後、穴は1.5㎜を測る。糸を通す穴を垂直に玉の上下が切載された形状をなし腐蝕が著しい。玉の大きさは、手造りのためか、今のものと異なり、同じ墓から出土したものでも直径が5㎜もあれば7㎜のもあり、大きさにばらつきが見られる。数珠には108顆、54顆、27顆、14顆などの種類があるようであるが、出土した数珠は、合掌した手にかけさせてあったことが推定されるので30個では不足である。普通数珠の玉の数は玉の大小でも左右されるので一概には言えないが単念珠でも、最低54個前後位は必要である。

自から発掘した訳でもなく、人骨収集に立合う程度のことであったので、排土に混って見落したのが多かったのかも知れない。C－1号墓出土の数珠玉が少ないのは、木製の数珠玉内にガラス玉と水晶玉が混って用いられていたためと思われる。また、普通二連珠が正式で単念珠は略式であるが、この墓地では単念珠が使用されていたのであろう。

鉄釘は、5基の墓から出土したが、他の遺跡に比して特異なものは見られない。総計47片のうち長さが1寸、1寸5分前後のものを主体とし、細身のものが多かった。これも手造りのためか長さ等一定ではなくばらつきがある。鉄釘はすべて断面が四角形を呈する角釘で、頭の部分はほぼ直角に打ち曲げられた「とめ」の部分が施されている。

墓坑出土の遺物は以上であるが、この外、K区墓所、墓坑周辺より、陶磁器片が出土した。高台付の粗製の碗の破片で内部には、淡い緑釉が施されている。中世末頃のものと思われるが、この墓に伴なうものか西屋敷の中世館に伴なうものか断定できない。この外中世の白磁碗破片や、折返し口縁を持つ碗片、なまこ釉のかかった江戸期の磁器碗片が周辺より表面採集されている。

5. ま　と　め

今回調査を実施した吉井原台地の東端、西屋敷の畑地畔等に、帯状のグループをつくり点在する墓は、江戸時代中期から後期頃にかけて営まれた上広の城丸組の先祖の人々の墓である。今回調査可能であった墓は32基で、その概略は以下のとおりである。

遺体は全て土葬であり、長方形もしくは、方形の墓坑に寝棺や座棺に納めて埋葬されていた。これらの棺は木製で、4分前後の板を棺材として、1寸ないし1寸5分の鉄釘を使用し組み立てられていた。棺は最小限のスペースをもって作られており、遺体は全て可能な限り折り

曲げられた状態で納められていた。

埋葬の姿勢は寝棺の場合、方向を誤って埋葬されたと思われる一例を除いて全て、北枕、西向の右側臥屈葬で、座棺であった4基は西向の座臥屈葬であった。各遺体は合掌させ、手に数珠をかけてあったと思われるが、ガラスや水晶を用いてあった3基以外は、木製数珠だったようで、確認はできなかった。また、数珠以外に納棺時に納められたと思われる副葬品は見られなかった。

これらの墓坑の上には小さな土饅頭をつくり、木製の墓標や自然石等が置かれていたと思われるが、永年の星霜を経て流失したのであろうか僅かな盛り上りが認められるにすぎなかった。ただ、宝暦13年や文化2年の銘を持つ背の低い角石塔が2基見られるので、一部墓石を使用していたことが判る。しかしこれら墓石の基礎部は見られず、失われたのかも知れないが、最初から存在しなかったことも考えられる。

こうして永い年月を経て被葬者氏名が忘れ去られた後、小組の先祖の墓として城丸組により供養が続けられて来たものと思われる。また、被葬者の家の宗旨は浄土真宗であり、旦那寺は近くの徳栄寺だったのであろう。今も城丸組は、徳栄寺の門徒が一番多い。

（桑原憲彰・下村　智）

おわりに

中・近世の墓制研究は原始古代のそれに比べると立遅れの観が強い。この理由としては、中近世墓の墓制が文献等である程度知られていることや、現在に残る送葬儀礼等が比較的古い時期の慣習をとどめているため、民俗学上からも辿れることなど、考古学とは噛合わない一面に起因していることも否めない。

しかも発掘調査に従事する考古学徒も、新しい墓には何となく、一種のうす気味悪さとうしろめたさを感じ、開発事業でこれらの墓所の調査に遭遇した場合も、単に地表に散乱する墓石の写真撮影と、刻まれた文字を記録する程度の調査で済まし、下部遺構である墓坑の調査まで手を掛けなかったのも事実である。

ところが、ここ数年来、生産方式および土地利用の変化に伴なう国土開発は、従来の地形の大規模な改良を余儀なくさせ、その余波としてとくに手をかけることがタブーとされて来た墓地の大々的移転・改葬が近年各地で行われるようになり、中近世墳墓も発掘調査の対象遺跡として新たに浮上しつつある。

ここに掲げた近世初期の「おさき墓地」も、県が日本道路公団との受託事業として調査を行って来た、九州自動車道路線敷地内から発見された無縁墓地のひとつである。

この報告書をまとめるにあたり、過去に県が実施してきた中近世墳墓遺跡の調査結果も付論として収載した。

なお、私事に亘るが、この報告書執筆中の昭和54年の2月に、京都に登り得度し、僧籍を得た。寺院の生れということもあるが、幾多の中近世墳墓の発掘調査に従事し、その破壊に立合った現在遅きに失した観もあるが、現在生かされている有難さを噛みしめ、人間の生き方について今一度、真剣に取り組みたいと考えたからである。　　（桑原　憲彰）

図版1　おさき墓地古塔碑群

(上)おさき墓地発掘個所全景

(下)調査前の地元有志による墓前供養

図版２　おさき墓地古塔碑群

（上）墓地内に散在する五輪水輪部

（下）発掘個所の表土を約30cm程除去した状況

図版3　おさき墓地古塔碑群

（上）墓坑の排土作業風景

（下）確認された15の墓坑

図版4　おさき墓地古塔碑群

(上) 排土を終えた墓坑群（南東方向より）

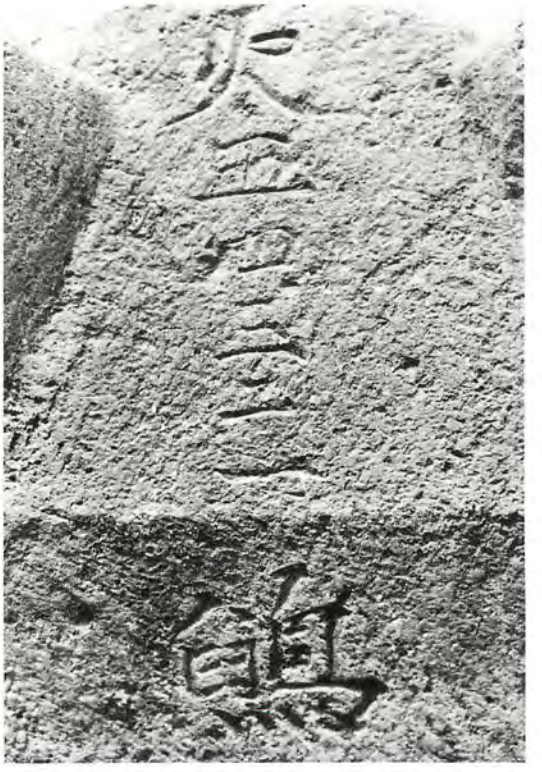
(下) No. 3 墓坑内に設けられた基礎部分の石組

図版5　おさき墓地古塔碑群

(上)〔左〕有角五輪塔の火輪・空風輪部

(上)〔右〕同・空風輪部（部分拡大）

(下)〔左〕火輪部に刻まれた文字



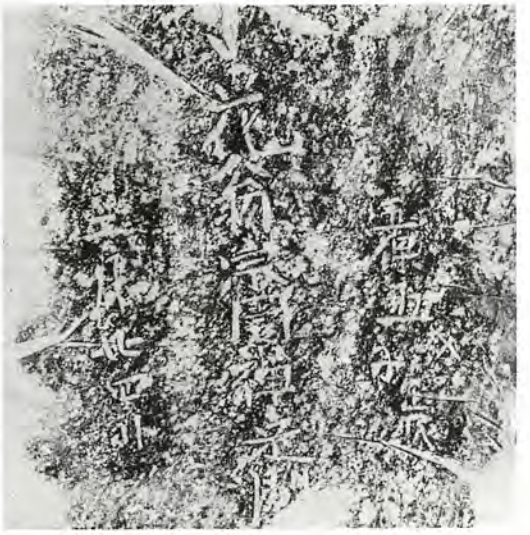
(下)〔右〕同・火輪部（部分拡大）

図版6　おさき墓地古塔碑群

(上)四　方　四　仏　塔(宝塔か)

(下)同上・塔身部拡大

図版7　おさき墓地古塔碑群

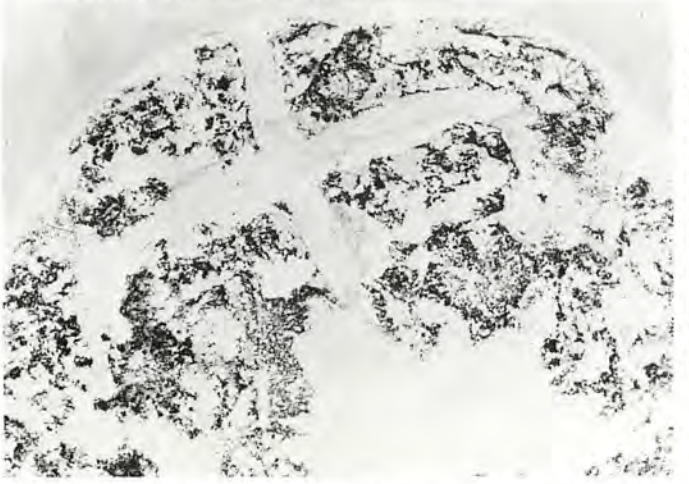


（上）〔左〕(1)花翁宗園禅定門の五輪水輪部（拓影）

（上）〔右〕同左五輪（写真）

（中）〔左〕直翁宗国居士の五輪地輪部（写真）

（中）〔右〕同左五輪（拓影）



（下）〔左〕五輪水輪部上端に刻まれる単十字（拓影）

（下）〔右〕有角五輪火輪部に刻まれる鵠（写真）

図版8　おさき墓地古塔碑群

（上）火の見櫓周辺に散乱する五輪火輪部

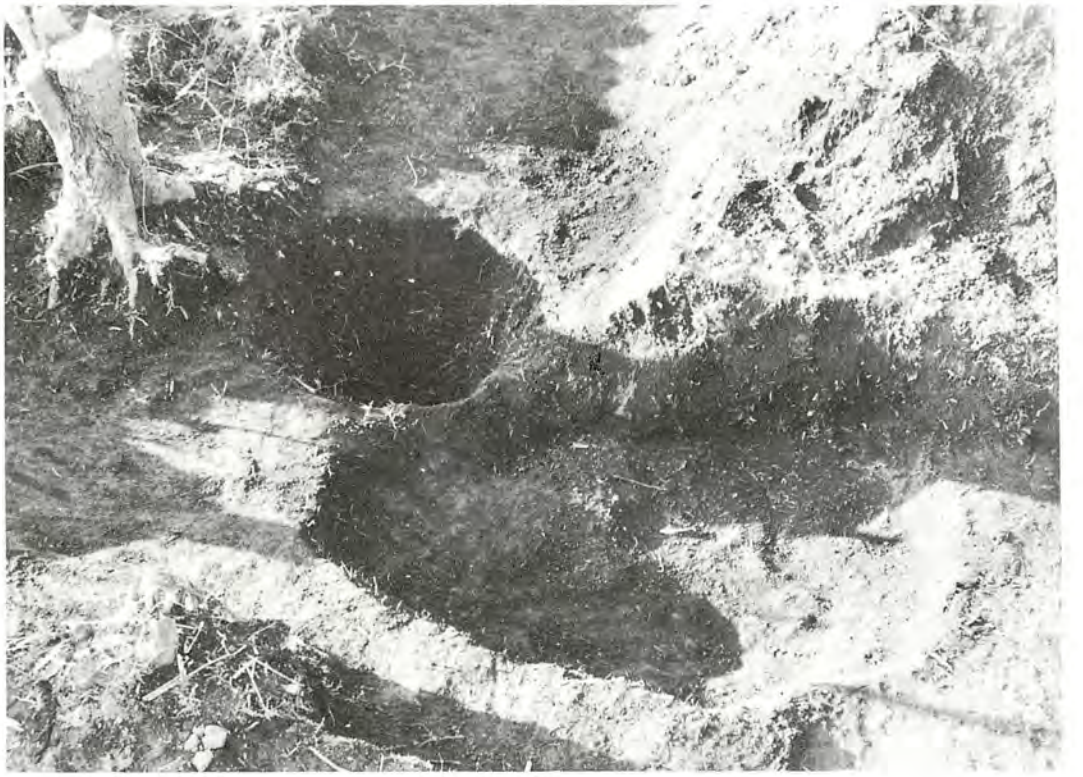
（下）石垣内に組み込まれていた五輪地輪部

図版９　中山五輪遺跡

(上)中 山 五 輪 遺 跡 遠 景

(下) 散乱する五輪塔の各輪

図版 10　中山五輪遺跡



(上) No. 8 墓坑とNo. 9 墓坑(手前)全景

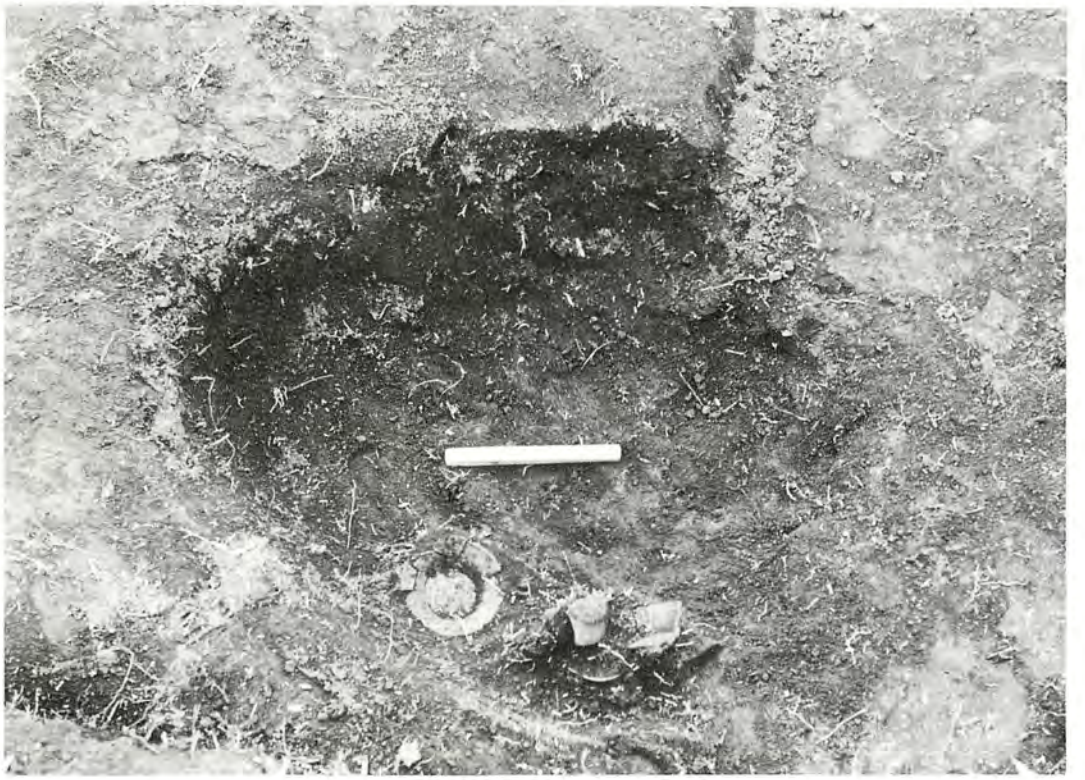
(下) 各墓坑群　先方より左No. 1、No. 6 墓坑、中央がNo. 2 墓坑　手前がNo. 3 墓坑

図版 11　中山五輪遺跡

（上）遺物出土状況　土師質納骨器底部と弥生土器片

（下）土師質火葬納骨器底部拡大写真

図版12　中山五輪遺跡



（上）No.1墓坑となかに納められた土師質土器

（下）同土師質皿拡大写真（二枚の土師質燈明皿の口を合わせ、なかに火葬骨片が納められていた）

図版13　中山五輪遺跡

（上）No.6墓坑に紛れ込んでいた平瓦片（布目瓦）

（下）No.11墓坑

図版14　中山五輪遺跡

（上）中山五輪調査風景

（下）調査終了後整理された散乱石造物群

図版 15　福富（西園祭祀）遺跡

（上）福富（西園祭祀）遺跡遠景（南方より）

（下）福富（西園祭祀）遺跡発掘調査風景

図版16　御船塚遺跡

（上）御船塚墳丘群（東北より）

（下）同上墳丘群

図版17　御船塚遺跡

（上）御船塚 墳丘部の試掘溝 設定 状況

（下）同　上

図版18　御船塚遺跡

（上）御船塚天正銘板碑

（下）六地蔵龕部塔残欠

図版19　北牟田塚遺跡

（上）北牟田の集落と北牟田塚の位置（矢印）右北塚・左南塚

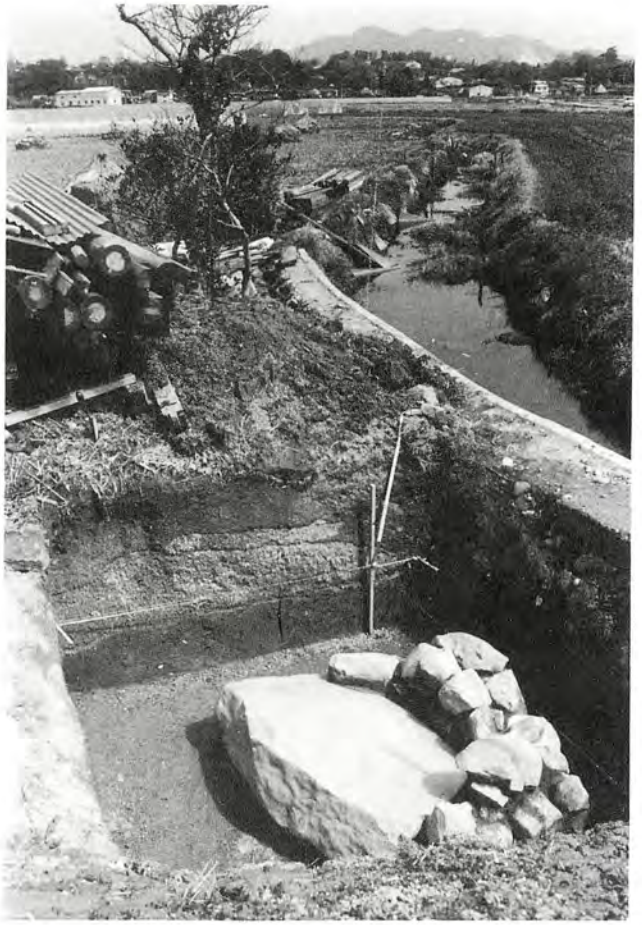
（下）北塚全景（北方より）

図版 20　北牟田塚遺跡

下　北塚全容

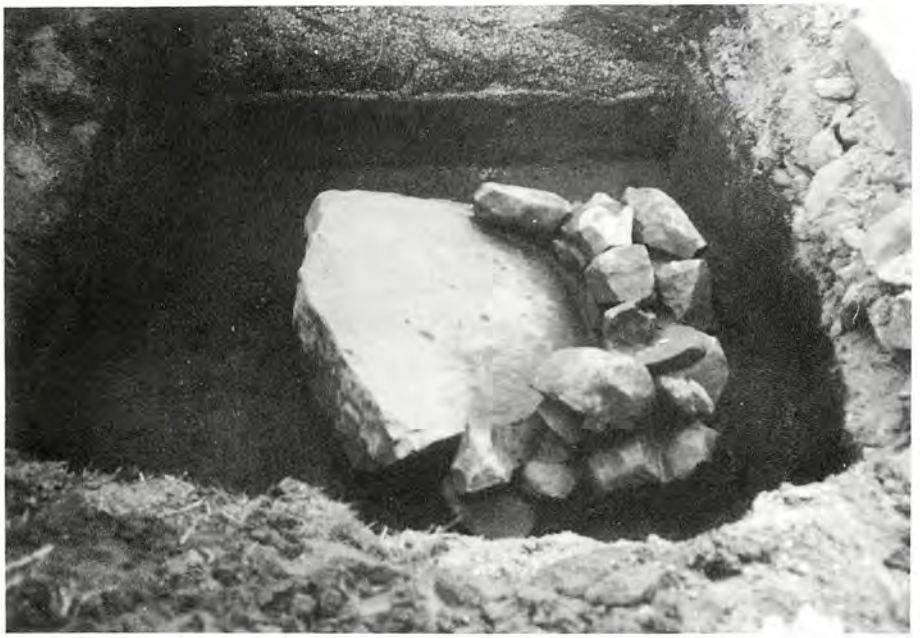
上　北牟田塚より望む東方の景観　遠景は伊倉の台地　○印の上方は北塚、手前は南塚

図版21　北牟田塚遺跡



上　露出された内部上層の石組と東方を望む景観

下　同上石組拡大



図版 22　北牟田塚遺跡

（上）内部上層の石組拡大　下の白い部分は下に敷かれた大石

（下）大石の引き揚げ作業　遠景は金峰山系三の嶽（左）、二の嶽（右）、

図版 23 北牟田塚遺跡

（上）土坑内北側断面土層

（下）内部主体の木棺々蓋

図版24　北牟田塚遺跡

（上）木棺々蓋上半部
杉の皮と板の使用状態を示す

左端は頭骨横断面、上の横長いのは
木棺々身左側板の一部

（下）同上主部拡大　　この部分の下に主体人骨胴部がかくされている

図版25　北牟田塚遺跡

上　露出清掃された主体人骨の全容

下　同上上半身部拡大

図版26　北牟田塚遺跡

（上）主体人骨下半身部拡大　　樫板の木目も鮮やか

（下）主体人骨　顎骨部拡大　　左に縦に湾曲するは左鎖骨

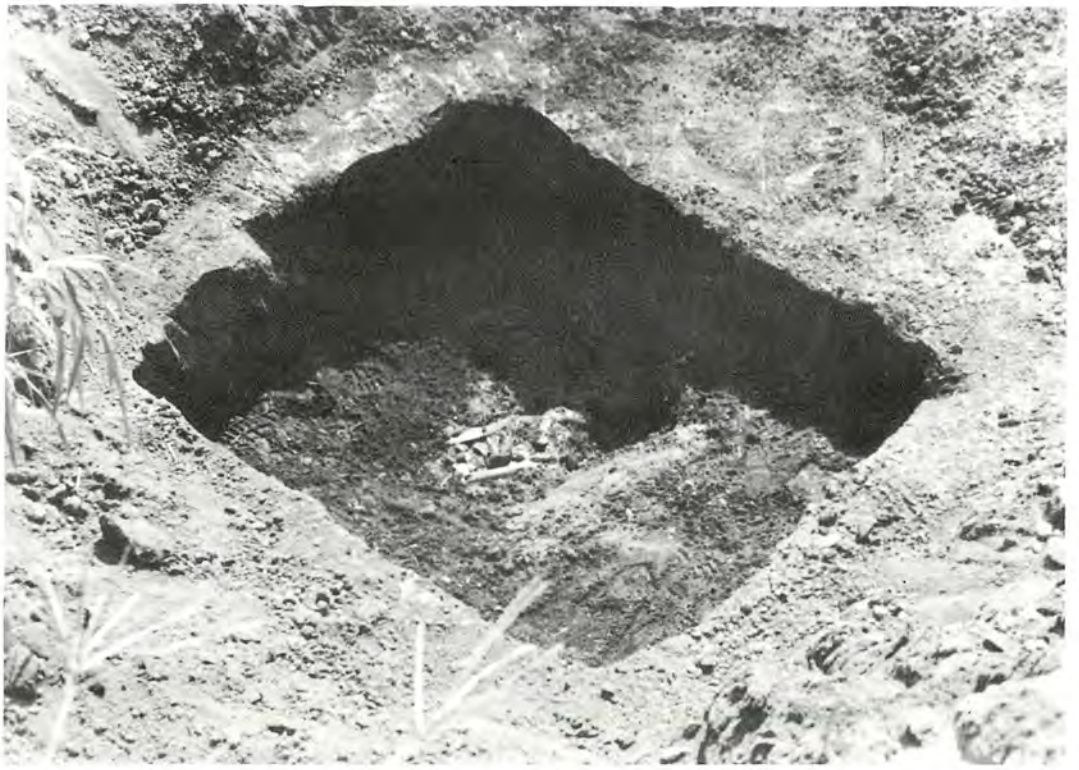
図版 27　北牟田塚遺跡

（上）主体人骨の左腕に付着するひも

（下）左腕に付着するひも拡大

図版28　上広 西屋敷 近世墓

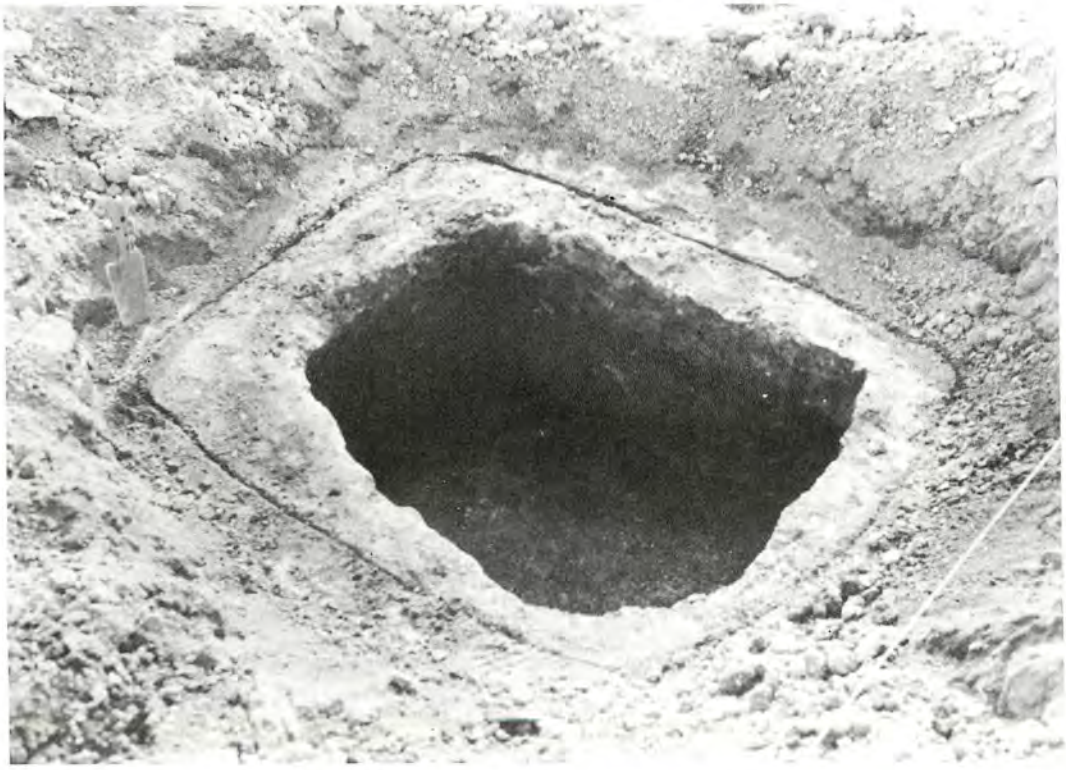
（上）C区墓所　　墓坑配列状況　　全10基



（下）B区墓所　　B－2の墓坑と人骨の埋葬状況

図版 29　上広 西屋敷 近世墓

（上）Ⅰ区墓所　旧農道に沿って帯状に並ぶ墓坑



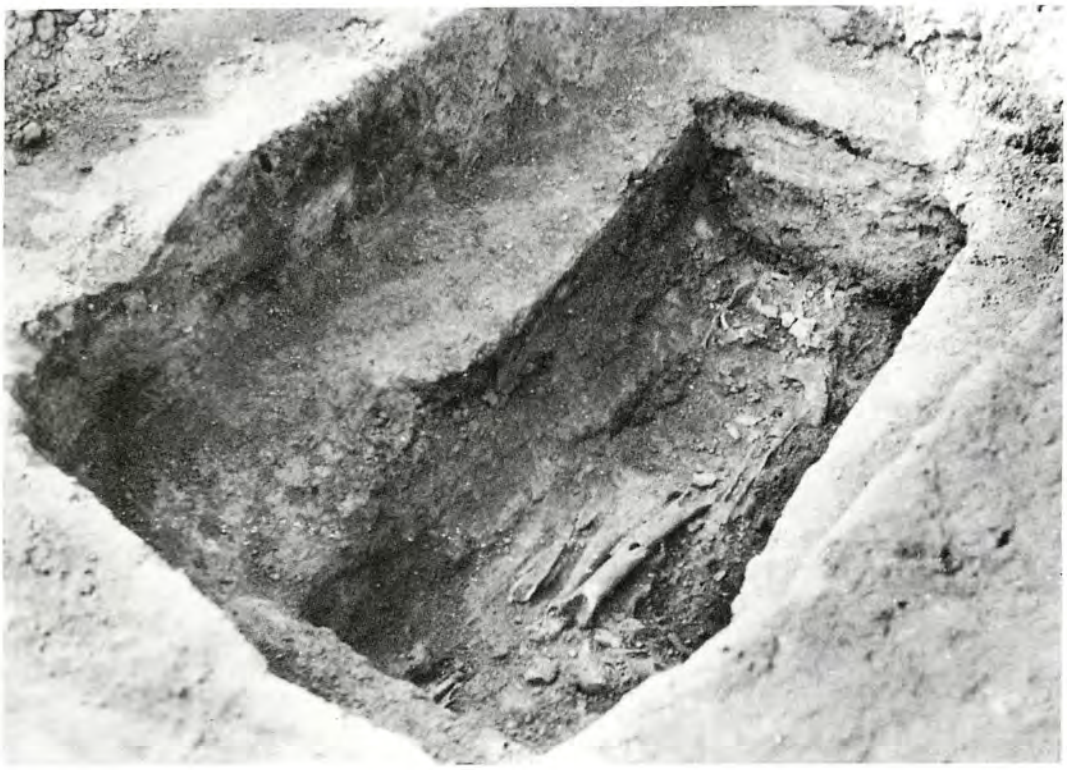
（下）Ⅰ区墓所　　Ⅰ－６墓坑　墓坑線と棺の圧痕

図版 30　上広西屋敷近世墓

（上）Ⅰ区墓所　　Ⅰ－1・Ⅰ－2墓坑

（下）Ⅰ区墓所　　Ⅰ－11墓坑と棺圧痕

図版31 上広西屋敷近世墓



(上) I区墓所　　I－11墓坑と棺内に納められた右側臥屈葬人骨

(下) I区墓所　　I－11墓坑・同上部分拡大

熊本県文化財調査報告　第36集

おさき墓地古塔碑群

昭和54年3月31日

編集　熊本県教育委員会
発行　〒862　熊本市水前寺6丁目18番1号
印刷　株式会社　秀　巧　社
〒862　熊本市国府四丁目10—18
☎ (0963) 66—1221

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第 36 集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：おさき墓地古塔碑群
発行：熊本県教育委員会
〒862-8609　熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号
電話：　096-383-1111
URL：http://www.pref.kumamoto.jp/
電子書籍制作日：2016 年 3 月 31 日